

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 268

特別名勝 岡山後楽園 史 跡 岡 山 城 跡

特別名勝岡山後楽園二色が岡景観復元
事業に伴う埋蔵文化財確認調査

2024

岡山県教育委員会



1 二色が岡と花葉の池（北東から）



2 T2 旧護岸検出状況（北東から）



3 T4 建築部材出土状況（南から）

巻頭図版 2



1 T6 盛土検出状況（北東から）



2 T13 園路3検出状況（南東から）



1 T15 園路5検出状況（北西から）



2 T20 園路8検出状況（北東から）

卷頭図版 4



1 「後樂園地下ヶ絵図」(年未詳)



2 「上道郡図」(万治4年)



3 「御後園絵図」(元禄初期頃)



4 「御後園指図」(元禄2年頃)



5 「後樂園 御茶屋廻り之図」(元禄3年頃)



1 「御後園地割御絵図」(正徳2年頃)



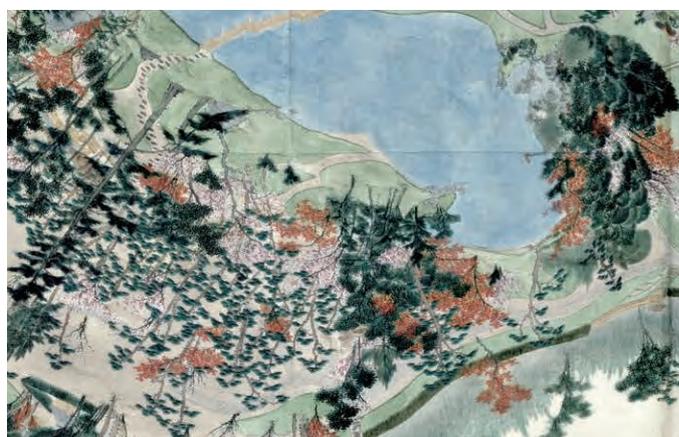
2 「御茶屋御絵図」(享保元年頃)



1 「御後園絵図」(明和8年)



2 「御後園絵図」(文久3年)



3 「備前国岡山後楽園真景図」(明治16年)



4 「岡山後楽園之図」(明治30年)

序

本書は、特別名勝岡山後楽園二色が岡景観復元事業に伴い確認調査を実施した、特別名勝岡山後楽園・史跡岡山城跡の発掘調査報告書です。

岡山後楽園は、元禄年間に池田綱政が郡代津田永忠に命じて築かせた江戸時代を代表する回遊式庭園で、水戸偕楽園・金沢兼六園と並ぶ日本三名園として岡山県民をはじめ岡山を訪れる人々にも広く親しまれてきた岡山県を象徴する文化遺産です。

岡山県では、この岡山後楽園のさらなる魅力を発信するにあたり、築庭当初には山桜が彩どる春の花と秋の色づきの景観から「二色が岡」と呼ばれた一画を景観復元するため、植栽を中心とした整備を進めることとなりました。二色が岡は、藩主の居間であった延養亭の南側、花葉の池に接する小高い丘で、茶室の花葉軒（今の茂松庵）や、地藏堂などの宗教施設が点在し、藩主が折に触れて訪れた場所です。

築庭当初の絵図には、現在とは異なる園路や建物が描かれていることなどから、これらの保存を考慮した景観復元計画を策定するために埋蔵文化財の確認調査を行いました。調査の結果、花葉の池端が洪水の被害により、幾度となく改修がなされているものの、江戸時代の園路の保存状況が良好であることが明らかになりました。

本書が、地域の歴史研究に寄与し、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、確認調査及び報告書作成に当たりましては、文化庁文化財第二課をはじめ、特別名勝岡山後楽園保存管理委員会委員並びに岡山県埋蔵文化財専門委員の先生方から御指導を賜り、また岡山県土木部都市局都市計画課、岡山後楽園事務所からは多大な御協力をいただきました。記して深く感謝申し上げます。

令和6年3月

岡山県古代吉備文化財センター

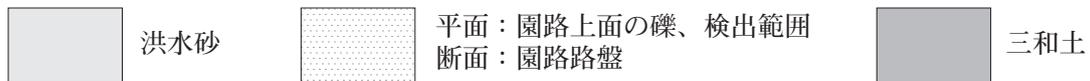
所長 奥山修司

例 言

- 1 本書は、特別名勝岡山後楽園^{にしき おか}二色が岡景観復元事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県土木部都市局都市計画課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を実施した、特別名勝岡山後楽園・史跡岡山城跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、岡山市北区後楽園1番5号に所在する。
- 3 確認調査は4か年にわたり、平成30年度（平成31年1月15～24日）は松尾佳子、令和元年度（令和2年1月14～22日）は松尾佳子・後藤寛子、令和2・3年度（令和3年2月15～25日と令和4年2月1～10日）は團奈歩が担当した。調査面積は、計89.1㎡である。
- 4 本書の作成は令和5年度6～3月に團が行った。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節を文化財センター職員柴田英樹が、その他は團・松尾が担当した。全体の編集は團が行った。
- 6 確認調査にあたっては、岡山県埋蔵文化財専門委員 亀田修一氏・山本悦世氏、特別名勝岡山後楽園保存管理委員会委員各氏より御指導・御教示をいただいた。記して深く謝意を表す。
- 7 岡山大学 名誉教授 鈴木茂之氏には、石材や土壌の堆積状況について御教示を受けた。また、公益財団法人岡山県郷土文化財団 主任研究員 万城あき氏からは、文献史料からみた岡山後楽園についての玉稿をいただいた。
- 8 巻頭図版・本文に掲載した絵図・古写真は、所蔵者である岡山大学附属図書館、岡山後楽園事務所、岡山県立図書館、渡辺家の許可を得て複製・掲載したものである。
- 9 以下の分析について、次の機関と業務委託契約を行い実施した。
土壌の花粉分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 10 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 11 本書に関連する遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度値は標高であり、挿図に示す北方位は平面直角座標V系（世界測地系）の座標北を示し、挿図・報告書抄録の座標値・経緯度は世界測地系に準拠している。
- 2 各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記のとおりである。
各トレンチ平・断面図 1/50
遺物 土器・瓦類・ガラス製品：1/4
- 3 遺構番号は、遺構の種類ごとに通し番号を付している。
- 4 遺物番号は、陶磁器・土器類を除いて番号の頭に次の略号を付している。
瓦類：R ガラス製品：G
- 5 掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、径が不確実であることを示している。
- 6 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
- 7 次の挿図は、以下の地形図を複製・加筆したものである。
第2図 国土地理院発行 1/50,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」
第3図 岡山市発行 岡山市域図157・158・167・168 (1/2,500)
- 8 本書で用いた時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、暦年代は西暦と和暦を併用した。
- 9 掲載した遺構に示すトーンの凡例は次のとおりで、その他のものについては個別に例示している。



- 10 本書で使用している次の絵図については、() の略称を併用した。
岡山大学附属図書館所蔵「池田家文庫」
「後楽園地下ケ絵図」 (地下ケ図) 「御後園地割御絵図」 (正徳の絵図)
「御後園絵図」 (明和の絵図) 「御後園絵図」 (文久の絵図)
「備前国岡山後楽園真景図」 (明治の絵図)
岡山後楽園事務所所蔵
「御茶屋御絵図」 (享保の絵図)
- 11 岡山後楽園内の各地点での発掘・確認調査の成果は、以下の既刊行物内で報告されている。

電線埋設・浄化槽

『岡山県埋蔵文化財報告』23 岡山県教育委員会 1993

花交の池木樋管

「特別名勝・国指定史跡 岡山後楽園」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』223 岡山県教育委員会 2009

御舟入跡・烏帽子岩・花交の池護岸

「特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』238 岡山県教育委員会 2013

東広場

『岡山県埋蔵文化財報告』51 岡山県教育委員会 2021

『岡山県古代吉備文化財センター年報』1 岡山県古代吉備文化財センター 2022

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 確認調査及び報告書作成の経緯と経過	
第1節 確認調査及び報告書作成に至る経緯	5
第2節 確認調査及び報告書作成の経過	6
第3節 日誌抄	6
第4節 確認調査及び報告書作成の体制	7
第3章 確認調査の成果	
第1節 二色が岡の調査	9
第4章 自然科学的分析	
第1節 岡山後楽園二色が岡で採取した土壌の花粉分析	29
第5章 総括	
第1節 考古学的成果	31
第2節 絵図と和歌にみる二色が岡の植栽と変容	42
遺構一覧表・遺物一覧表・トレンチ一覧及び新旧対照表	50
図版	
報告書抄録	

目 次

<p>第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000) 1</p> <p>第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000) 2</p> <p>第3図 岡山城と岡山後楽園 (1/9,000) 4</p> <p>第4図 二色が岡と過去の調査位置図 (1/5,000) 5</p> <p>第5図 トレンチ配置図 (1/600) 9</p> <p>第6図 T 1 (1/50) 10</p> <p>第7図 T 2 (1/50)・出土遺物 (1/4) 11</p> <p>第8図 T 3 (1/50)・出土遺物 (1/4) 12</p> <p>第9図 T 4 (1/50) 13</p> <p>第10図 T 5 (1/50) 14</p> <p>第11図 T 6 (1/50)・出土遺物 (1/4) 15</p> <p>第12図 「正徳の絵図」と園路1 (★印) 16</p> <p>第13図 「享保の絵図」とT 6 16</p> <p>第14図 T 7 (1/50)・出土遺物 (1/4) 16</p> <p>第15図 T 8 (1/50) 17</p> <p>第16図 T 9-1・T 9-2 (1/50) 及び出土遺物 (1/4) 18</p> <p>第17図 T 10 (1/50) 18</p> <p>第18図 T 11 (1/50) 19</p> <p>第19図 T 12-1・T 12-2 (1/50) 及び出土遺物 (1/4) 20</p> <p>第20図 「享保の絵図」とT 12-1・T 12-2・ T 13、園路2・3 検出地点 (★印) 20</p> <p>第21図 T 13 (1/50) 21</p> <p>第22図 T 14 (1/50)・出土遺物 (1/4) 22</p> <p>第23図 T 15 (1/50)・出土遺物 (1/4) 23</p> <p>第24図 「享保の絵図」とT 14~T 16、 園路4~6 検出地点 (★印) 24</p>	<p>第25図 T 16-1・T 16-2 (1/50) 24</p> <p>第26図 T 17 (1/50) 25</p> <p>第27図 T 18 (1/50) 26</p> <p>第28図 T 19 (1/50) 26</p> <p>第29図 T 20 (1/50)・出土遺物 (1/4) 27</p> <p>第30図 「享保の絵図」とT 17・T 20、園路7・8 検出地点 (★印) 27</p> <p>第31図 T 21-1・T 21-2 (1/50) 28</p> <p>第32図 「享保の絵図」にみえる鳥居 28</p> <p>第33図 岡山後楽園築庭前の地形推定図 (1/6,000) 31</p> <p>第34図 浄化槽地点の調査における 東壁土層断面図 (1/100) 31</p> <p>第35図 洪水砂の堆積と造成の状況 (1/1,500) 33</p> <p>第36図 二色が岡周辺と「地下ケ図」の比較 (1/1,500) 33</p> <p>第37図 土層断面模式図と層序関係 (縦: 1/100、横: 任意) 34</p> <p>第38図 二色が岡における園路路盤模式図 35</p> <p>第39図 東広場調査地園路の礫組成 36</p> <p>第40図 江戸時代の遺構 (園路1~8・平坦面1) 検出地点と「享保の絵図」(1/600) 37</p> <p>第41図 絵図からみる、園路の変遷 (1/1,500) 38</p> <p>第42図 「享保の絵図」の貼紙 (部分) 44</p> <p>第43図 「享保の絵図」茂松庵前の谷間の桜 (部分) 46</p>
--	--

巻頭図版目次

巻頭図版1

- 1 二色が岡と花葉の池 (北東から)
- 2 T 2 旧護岸検出状況 (北東から)

- 3 T 4 建築部材出土状況 (南から)

巻頭図版2

- 1 T 6 盛土検出状況 (北東から)

2 T13 園路3検出状況(南東から)

巻頭図版3

1 T15 園路5検出状況(北西から)

2 T20 園路8検出状況(北東から)

巻頭図版4

1 「後楽園地下ヶ絵図」(年未詳)

2 「上道郡図」(万治4年)

3 「御後園絵図」(元禄初期頃)

4 「御後園指図」(元禄2年頃)

5 「後楽園図 御茶屋廻り之図」(元禄3年頃)

巻頭図版5

1 「御後園地割御絵図」(正徳2年頃)

2 「御茶屋御絵図」(享保元年頃)

巻頭図版6

1 「御後園絵図」(明和8年)

2 「御後園絵図」(文久3年)

3 「備前国岡山後楽園真景図」(明治16年)

4 「岡山後楽園之図」(明治30年)

図版目次

図版1 1 T1と現護岸・大立石(南東から)

2 T1(南西から)

3 T1(北西から)

4 T2と現護岸(南東から)

5 T2 旧護岸検出状況(東から)

6 T2 旧護岸と現護岸(南西から)

図版2 1 T3と現護岸(北西から)

2 T3 西壁土層断面(南東から)

3 T3 東壁土層断面(北から)

4 T4(南東から)

5 T4と現護岸(北西から)

6 T4 建築部材部分(西から)

図版3 1 T5(南東から)

2 T5 南壁土層断面(北東から)

3 T5と現護岸(北西から)

4 T6 奥が茂松庵(北から)

5 T6 東壁土層断面 盛土部分
(東から)

6 T6 園路1(北東から)

図版4 1 T7(北から)

2 T7 南東壁土層断面(北西から)

3 T8(南西から)

4 T8 南東壁土層断面(北から)

5 T8 土坑2(北西から)

6 T9-1(北東から)

7 T9-2(南西から)

図版5 1 T10(北から)

2 T10 盛土内偽礫検出状況(南西から)

3 T11(北西から)

4 T11 北壁土層断面(西から)

5 T12-1(南から)

6 T12-1 東壁土層断面(南西から)

7 T12-2(北西から)

8 T12-2 東壁土層断面(西から)

図版6 1 T13(西から)

2 T13 南壁土層断面 園路部分
(北から)

3 T13 南壁土層断面 洪水砂堆積状況
(北西から)

4 T14(南西から)

5 T14 園路4(北西から)

6 T14 北西壁土層断面(南から)

図版7 1 T15 奥に地藏堂(西から)

2 T15 南壁土層断面(北から)

3 T16(西から)

図版8 1 T16-1(南西から)

2 T16-1 園路6西半部分(北西から)

3 T16-2(西から)

4 T16-2 園路6東半部分(南東から)

5 T17(北から)

	6	T17 園路7 (北東から)
	7	T17 西壁土層断面 園路7部分 (東から)
図版9	1	T17と現園路 (南東から)
	2	T18・T19 作業風景 (南西から)
	3	T18 (南から)
	4	T19 (北西から)
	5	T20 (南東から)
	6	T20と現園路 (北東から)

	7	T20 南西壁土層断面 (東から)
	8	T20 専門委員による現地指導風景 (南東から)
図版10	1	T21-1・T21-2 作業風景 (南から)
	2	T21-1 第5層検出状況 (南から)
	3	T21-1 (南から)
	4	T21-2 (南から)
	5	出土遺物

表 目 次

表1 調査一覧	6	表3 花粉分析結果	29
表2 文化財保護法に基づく文書一覧	8	表4 岡山後楽園と二色が岡周辺の出来事	41

写 真 目 次

写真1 T1 (南東から)	10	写真10 明治末年頃 花葉の池の石組護岸 (南西から) [渡辺家資料]	39
写真2 T2旧護岸(北東から)	11	写真11 昭和9年の水害から復旧後 花葉の池の石組 護岸 (南西から) [渡辺家資料]	39
写真3 石材に穿たれた角穴(北から)	12	写真12 茂松庵前の谷間を眺める (2023年11月)	47
写真4 A地点の池底調査	14	写真13 茂松庵から花葉の滝を眺める (2023年11月)	47
写真5 B地点の池底調査	14	写真14 栄唱の間前から二色が岡を眺める (2023年11月)	47
写真6 花粉分析プレパラート内の状況	30	写真15 栄唱橋南詰め付近の二色が岡 (2008年4月)	48
写真7 虫明ユニット、礫サンプル(断面)	36		
写真8 路盤に含まれる礫 (1～3:虫明産出 4:旭川流域産出)	36		
写真9 大正頃の茂松庵とT14付近 (南東から) [渡辺家資料]	38		

第1章 地理的・歴史的環境

岡山後楽園は特別名勝に指定されている近世大名庭園で、岡山県中央南部の岡山市街地に位置している。ここを貫流する旭川の左岸に接し、南には岡山城の天守閣を見上げる。

旭川は岡山県三大河川の一つで、岡山県の中央部を150km近く南流し、流域面積1,810平方kmを誇るもので、その源は真庭市蒜山高原北端の朝鍋鷲ヶ山に発し、吉備高原を通過して岡山市北区玉柏付近で龍ノ口山塊を抜けると岡山平野を流下して、岡山市中区江並で瀬戸内海へと注ぐ。現在の平野部のうち、河口に近い児島湾周辺部分は近世以降の干拓によるものであるが、操山の南麓付近より北側は沖積作用によって形成された平野である。龍ノ口山の西麓から網目状に分流した流れによって、大小様々な微高地をつくりながら形成された岡山平野は、縄文時代の終わり頃から急速に拡大し、弥生時代以降多くの遺跡が立地することとなる。

岡山平野で人々の活動がみられるようになるのは、縄文時代になってからである。前期の朝寝鼻貝塚や、中期の津島岡大遺跡などは半田山の丘陵部周辺に生活基盤を求め、後期には徐々に安定した平野部への進出がみられるようになり、百間川沢田遺跡では炉や貯蔵穴などがみつき、安定した集落が営まれた可能性がある。水田農耕は旭川西岸でいち早く始まる。縄文時代晩期末には津島江道遺跡で小区画水田が営まれたのに続き、弥生時代になると津島遺跡や北方下沼・地藏・横田遺跡などで急速に広がっていく様子が見えてくる。中期になると南方遺跡一帯に大集落が形成され、磨製石斧や木製品の生産を担っており、この時期の拠点集落として機能した。旭川東岸では、百間川遺跡群の微高地周縁の低位部において前期から後期まで連続と水田の経営が行われ、井堰や用水路などの灌漑設備をもつ生産性の高いものであった。このような基盤が、後期の百間川原尾島遺跡で見られるような、石器・鉄器・土器・塩などの手工業生産を発展させたと考えられる。しかし弥生時代の末には旭川の大規模な洪水によって、下流域の天瀬遺跡にまで及ぶ広い範囲で、多くの集落や水田に深刻な打撃をもたらすこととなった。

古墳時代になると、海を臨む操山丘陵の南麓に網浜茶臼山古墳や操山109号墳などの80m級の前方後円墳が築かれ、続いて150m級の金蔵山古墳や湊茶臼山古墳が造られる。一方、平野部には神宮寺山古墳が築造されるものの、その後の造墓活動は低調となる。後期になると操山や龍ノ口山塊上で、群集墳が盛んに造られる。旭川東岸では、7世紀になって上道氏の奥津城とされる巨石を用いた唐人塚古墳が築かれ、続いて備前国庁（岡山市中区国府市場付近）にほど近い場所に古代寺院の賞田廃寺、幡多廃寺、網浜廃寺などを擁することで備前国の政治の中心地として栄え、その後の発展の基礎となる。平安時代に藤原内麻呂の遺領として始まった「鹿田荘」は室町時代まで存続し、藤原氏の氏長者に代々受け継がれた「殿下渡領」として知ら



第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)



- | | | | | |
|----------|-----------|----------|-------------|------------|
| 1 岡山後楽園 | 6 津島江道遺跡 | 11 天瀬遺跡 | 16 幡多廃寺 | 21 金蔵山古墳 |
| 2 岡山城本丸 | 7 北方遺跡群 | 12 鹿田遺跡 | 17 百間川一の荒手 | 22 湊茶臼山古墳 |
| 3 石山城跡 | 8 津島遺跡 | 13 新道遺跡 | 18 百間川遺跡群 | 23 網浜茶臼山古墳 |
| 4 朝寝鼻貝塚 | 9 南方遺跡 | 14 唐人塚古墳 | 19 百間川原尾島遺跡 | 24 操山109号墳 |
| 5 津島岡大遺跡 | 10 神宮寺山古墳 | 15 賞田廃寺 | 20 百間川沢田遺跡 | 25 網浜廃寺 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

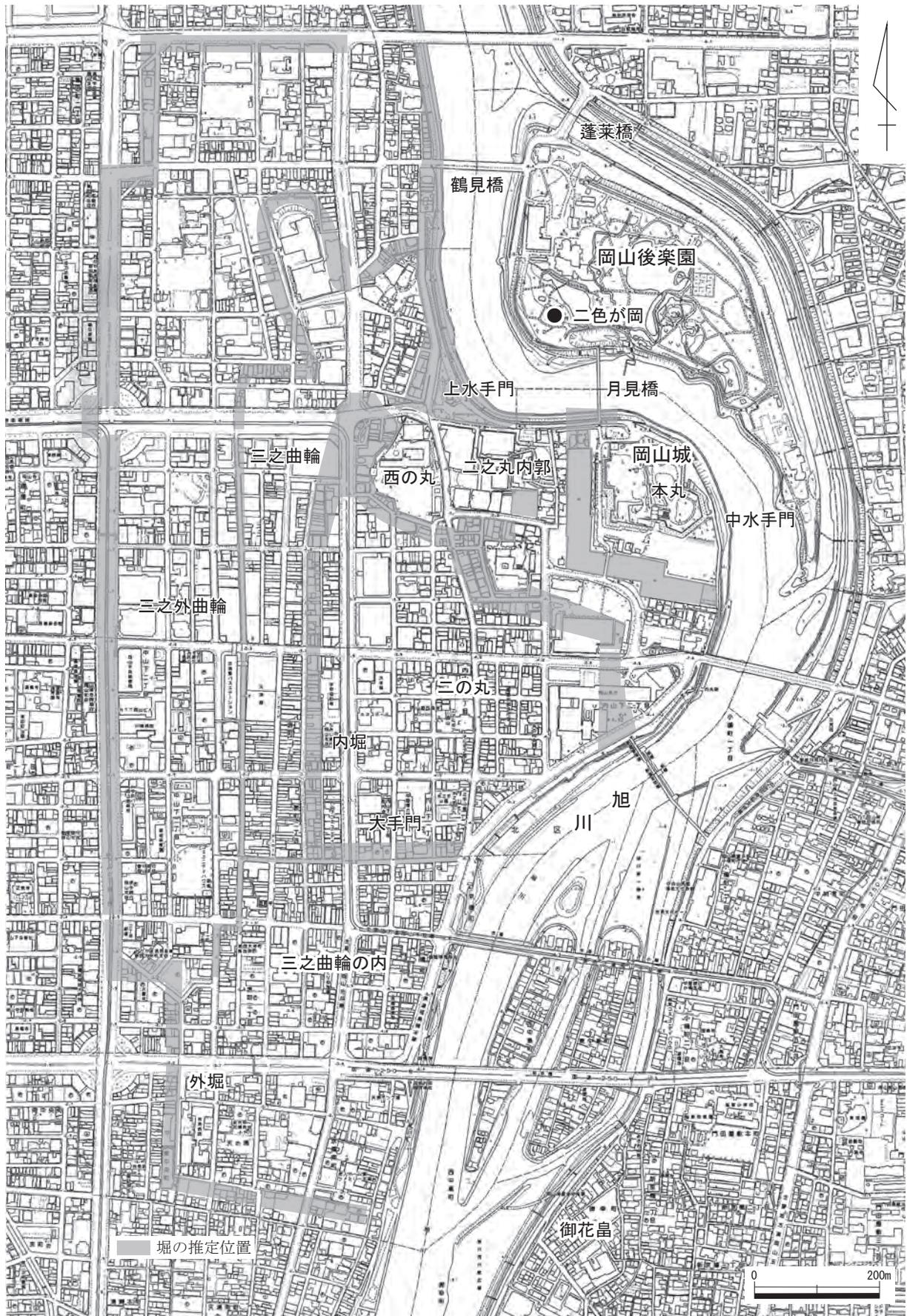
れる。荘園の実態解明のため鹿田遺跡や新道遺跡などの発掘調査成果の蓄積が期待されている。

室町時代の初めに御野郡伊福郷の地頭として補任された松田氏は、金川城を居城として旭川西岸を支配下におさめ、室町時代後期には浦上氏と備前国を二分する。しかしこの松田・浦上氏を倒して備前国を統一したのが宇喜多直家である。直家は松田氏の配下であった金光備前から石山の居城を奪い、城の改造を施すなどしたが、岡山城下の整備は、直家の子、秀家によって本格的に始まる。秀家は城の本丸を石山から現在の場所へと移し、慶長2（1597）年には三層六重の天守が完成する。また旭川の治水を進めて城の本丸を取り囲むように付け替えを行うことで、旭川は今ある一条の流路となった。山陽道は古都宿のあたりから南下するように付け替えるなど、今の岡山城下町の中核部分が形成されたのもこの時期である。関ヶ原の合戦後、新たに入封した小早川秀秋は、外堀の普請を行い、城下町の外郭が整うものの、在城わずか2年で病没する。その後、備前に封じられた池田忠雄が外堀外側の整備を行うことで、城下町の基本的な構想は完成した。大名庭園としては、忠雄が城の東側に、「御花畠」を造営するものの、その子、光政は質素儉約を信条としたことから、これを嫌って破却し、中原の旭川の河原に遊休の地を求めるのみであった。だが光政の子、綱政は地方で大名庭園を築庭する時流もあり、旭川を挟んだ城の背後を選んで、岡山後楽園を造った。

岡山後楽園は、貞享3（1686）年に発意した綱政が、翌年に郡代津田永忠に命じて築かせたとされる、回遊式の庭園である。ここは度重なる旭川の洪水被害を受けた場所ではあるが、洪水時にあふれ出る水を流す放水路としての百間川を築造することで、その損害が少なくなったことから築庭が可能となった。綱政は、津田永忠に沖新田の開発を延期させて築庭を優先させ、貞享4（1687）年12月に鋤初めを行い、元禄13（1700）年には、その敷地の拡大を終えたとして、一応の完成とされる。この庭園は「御後園」もしくは「御茶屋」などと呼ばれ、歴代の藩主の好みによってしばしば手が加えられた。唯心山は綱政の子、継政により築かれ、継政の孫にあたる治政は園内を芝生に改変するなどして、今にみる佳景が形作られていく。ここは藩主の私的な空間であるが、客人を招くなどにも利用され、特に継政以降、藩主が江戸に逗留している年には、毎月6回、身分と男女を区別してではあったが、領民に入園を許したことの意義は大きく、画期的であった。これが後に広く親しまれる庭園となった所以であろう。二色が岡は、藩主の居間である延養亭の南側にあたり、小高い丘に建つ茶室の花葉軒や地藏堂を、曲線が描く園路をたどって巡る。ここには山桜を主体とした植栽が彩る、春と秋の色付きの風景から二色が岡と名付けられたが、次第にその景観は失われ、江戸時代の終わり頃には桜がほとんどなくなり、楓と松が主体であったことが絵図から知られる。

明治維新後、居を岡山後楽園に移した池田家であったが、明治17（1884）年に岡山県が購入を決め、譲渡されることとなった。その後は一般に公開されることとなり、園内の整備が進められる。大正11（1922）年には名勝に指定され、遊歩道の整備などが行われるものの、昭和9（1934）年の室戸台風や昭和20（1945）年の岡山空襲において甚大な被害を受ける。しかし絵図や古写真などの資料の豊富さとともに、県民の理解と協力のもと、被災のたびに復興を遂げ、昭和27（1952）年には特別名勝に、昭和62（1987）年には岡山城跡とともに史跡に指定された。これにより学術的価値が担保され、江戸時代の景観を今に伝えている。岡山県では園内の整備事業をすすめており、藩主の好んだ四季折々の景色が復元されることで、岡山後楽園の魅力がさらに増すことが期待される。

第1章は、既刊の岡山後楽園、岡山城関連の報告書の地理的・歴史的環境及び、『岡山後楽園史』通史編（後楽園史編纂委員会編、2001年刊行）を参照して、執筆した。（團）



第3図 岡山城と岡山後樂園 (1/9,000)

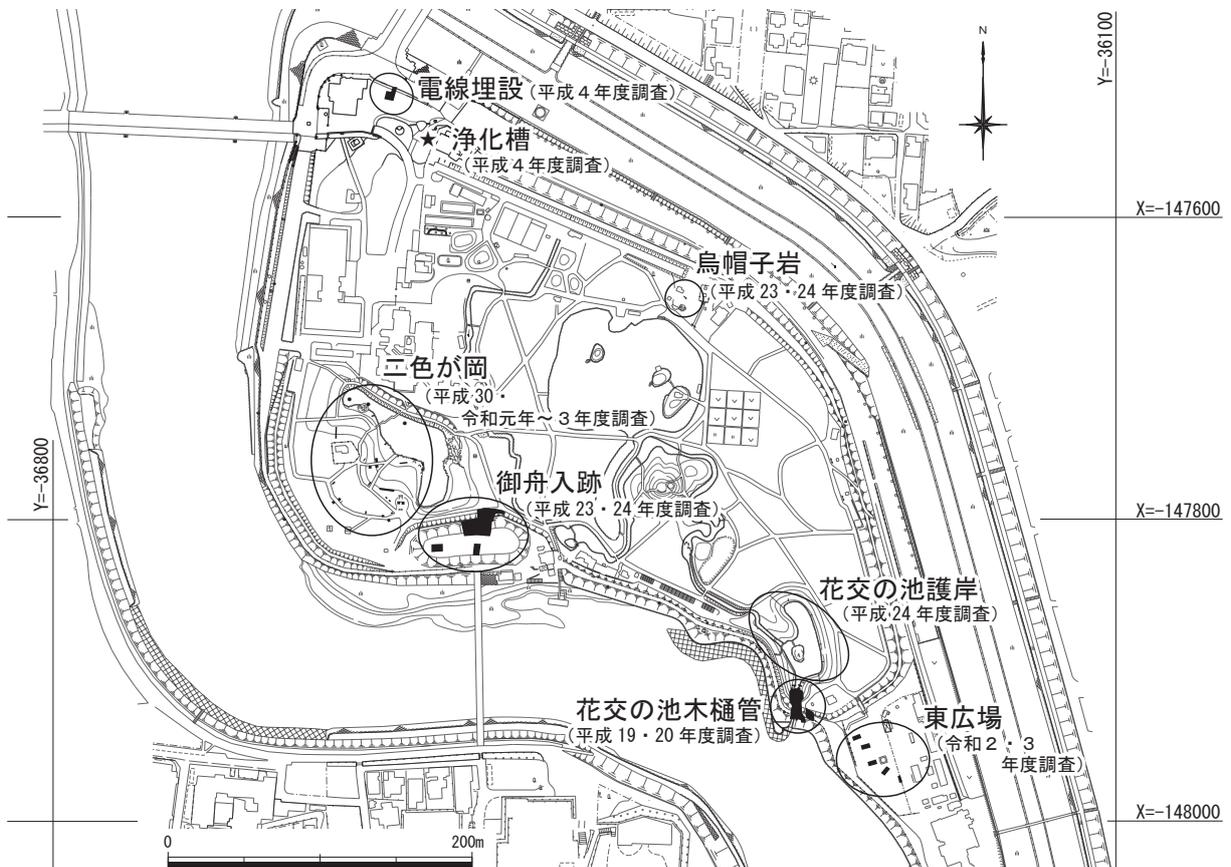
第2章 確認調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 確認調査及び報告書作成に至る経緯

県土木部都市局都市計画課は、『特別名勝岡山後楽園保存管理計画書』（平成20年3月）記載の二色が岡ゾーン景観復元の事業化に当たり、平成29年7月に史跡保護について県教育庁文化財課と協議を開始した。当事業は『御茶屋御絵図』（享保元年）を基にして、主に不要木の伐採と新たなサクラ・カエデ・マツの植栽による復元整備であり、その基礎資料を得るための確認調査が必要であることから、協議の結果、都市計画課の依頼を受けて確認調査を行うことになった。

また、平成31年2月には植樹に関する協議があり、文化財課としては、植樹の位置や掘削深度に関して、現在は認められないが絵図に表現されている旧園路等が残存する可能性があり、その遺構に影響を及ぼさないよう配慮することと、そのための事前調査の必要性について理解を求めた。以降協議を重ね、都市計画課の依頼を受けて旧園路等に関する3回の確認調査の実施に至った。

以上4回の調査成果については年度ごとに概要を報告していたが、令和3年7月からの都市計画課との協議の結果、令和5年度に正式な調査報告書を作成し刊行することになった。（柴田）



第4図 二色が岡と過去の調査位置図 (1/5,000)

第2節 確認調査及び報告書作成の経過

確認調査は、平成30～令和3年度の4か年にわたり25か所のトレンチを設定して、89.1㎡を対象に実施した。目的は二色が岡の江戸時代の遺構を保存をすることで、特別名勝及び史跡という性格から、調査は必要最低限の掘削範囲と深度をもって行った。合わせて庭木を損ねないことや、景観に配慮した緑色の保護シートや土嚢を使用することなどが求められた。令和3年度の調査は新型コロナ感染拡大の緊急事態宣言が発出された時期と重なり、閉園のなかでの調査となった。平成30年度は花葉の池の底面深度及び、二色が岡に接する花葉の池南面の護岸の時期や構造、元禄年間に描かれた「御後園絵図」と「御後園指図」に見える池端の建造物、地蔵堂の鳥居の基礎と確認の対象は多岐にわたった。令和元年度は、主に享保元年頃の「御茶屋御絵図」（以下、絵図）にみえる江戸時代の園路までの深さ等を確認するための調査を実施した。トレンチの配置は絵図を参照して設定したところ、築庭当初と考えられる園路を良好な状態で検出した。このことから、絵図の測量精度が高いことが判明し、これを基に、令和2年度は絵図にみえる花葉軒（今の茂松庵）北側に描かれる広場を、令和3年度には現在の園路と重複する部分での江戸時代の園路までの深さ等を確認した。

報告書作成は令和5年6月から行い、翌年3月末に完了した。平成30～令和2年度の3か年の確認調査の成果は、『岡山県埋蔵文化財報告』49～51（令和元～3年刊行）において、各トレンチの平・断面図を掲載して報告を完了していたが、整理作業のなかで所見を見直す必要が生じた部分もあった。これについては、訂正を加えて本書で報告している。（團）

表1 調査一覧

調査年度	面積	トレンチ名	担当者
平成30年	18.0㎡	T1～T5・T21、A～C地点	松尾
令和元年	43.4㎡	T9・T11・T12・T15・T18・T19	松尾・後藤
令和2年	20.2㎡	T6・T7・T13・T16・T17	團
令和3年	7.5㎡	T8・T10・T14・T20	團

第3節 日誌抄

平成30年度（確認調査）

平成31年

- 1月15日（火） 資材搬入、調査開始
花葉の池内の底打ち調査実施、終了
- 1月24日（木） 資材搬出、調査終了

令和元年度（確認調査）

令和2年

- 1月14日（火） 資材搬入、調査開始
- 1月20日（月） 埋蔵文化財専門委員現地指導
- 1月22日（水） 資材搬出、調査終了

令和2年度（確認調査）

令和3年

- 2月15日（月） 資材搬入、調査開始

2月25日（木） 資材搬出、調査終了

令和3年度（確認調査）

令和4年

- 2月1日（火） 資材搬入、調査開始
- 2月9日（水） 埋蔵文化財専門委員現地指導
- 2月10日（木） 資材搬出、調査終了

令和5年度（報告書作成）

令和5年

- 6月1日（木） 報告書作成作業開始
- 10月6日（金） 岡山大学鈴木茂之氏による現地指導及び石材鑑定

令和6年

- 3月29日（金） 報告書作成作業終了

第4節 確認調査及び報告書作成の体制

<p>平成30年度 岡山県教育委員会 教育長 岡山県教育庁 教育次長 文化財課 課長 参事（文化財保存・活用担当） 総括副参事（埋蔵文化財班長） 主幹 主任 岡山県古代吉備文化財センター 所長 次長（総務課長事務取扱） 参事（文化財保護担当） <総務課> 総括主幹（総務班長） 主任 主任 <調査第一課> 課長 総括副参事（第一班長） 主幹 主幹</p>	<p>鍵本 芳明 日比謙一郎 大西 治郎 横山 定 柴田 英樹 上梶 武 原 珠見 向井 重明 高田 亮 大橋 雅也 甲元 秀和 浦川 徳子 東 恵子 高田恭一郎 金田 善敬 河合 忍 松尾 佳子 （確認調査担当）</p>	<p><調査第三課> 主 事 令和2年度 岡山県教育委員会 教育長 岡山県教育庁 教育次長 文化財課 課長 参事（文化財保存・活用担当） 総括参事（埋蔵文化財班長） 主幹 主 事 岡山県古代吉備文化財センター 所長 次長（総務課長事務取扱） 参事（文化財保護担当） 総括参事 <総務課> 課長 総括副参事（総務班長） 総括主任（総務班長） 主任 主任 <調査第一課> 課長事務取扱 総括副参事（第一班長） 主幹 主 幹</p>	<p>後藤 寛子 （確認調査担当） 鍵本 芳明 高見 英樹 小林 申明 大橋 雅也 柴田 英樹 河合 忍 九富 一 小見山 晃 佐々木雅之 （～10月14日） 亀山 行雄 高田恭一郎 甲元 秀和 （10月15日～） 甲元 秀和 （～10月14日） 多賀 克仁 （10月15日～） 多賀 克仁 （～10月14日） 井上 裕子 高田恭一郎 小林 利晴 團 奈歩 （確認調査担当） 和田 剛</p>
<p>令和元年度 岡山県教育委員会 教育長 岡山県教育庁 教育次長 文化財課 課長 参事（文化財保存・活用担当） 総括副参事（埋蔵文化財班長） 主幹 主任 岡山県古代吉備文化財センター 所長 次長（総務課長事務取扱） 参事（文化財保護担当） <総務課> 総括主幹（総務班長） 主任 主任 <調査第一課> 課長 総括副参事（第一班長） 主幹 主 幹</p>	<p>鍵本 芳明 高見 英樹 大西 治郎 横山 定 柴田 英樹 河合 忍 原 珠見 向井 重明 佐々木雅之 大橋 雅也 甲元 秀和 東 恵子 多賀 克仁 高田恭一郎 金田 善敬 團 奈歩 松尾 佳子 （確認調査担当）</p>	<p>令和3年度 岡山県教育委員会 教育長 岡山県教育庁 教育次長 文化財課 課長 副参事（文化財保存・活用担当） 総括主幹（埋蔵文化財班長） 主幹 主 事 岡山県古代吉備文化財センター 所長 次長（総務課長事務取扱）</p>	<p>鍵本 芳明 池永 亘 小林 申明 尾上 元規 河合 忍 松尾 佳子 九富 一 大橋 雅也 浅野 勝弘</p>

第2章 確認調査及び報告書作成の経緯と経過

参事 (文化財保護担当)	亀山 行雄	副課長	尾上 元規
総括参事	高田恭一郎	総括副参事 (埋蔵文化財班長)	河合 忍
<総務課>		主任	藤井 翔平
総括主幹 (総務班長)	多賀 克仁	主事	金田 涼
主任	井上 裕子	岡山県古代吉備文化財センター	
<調査第一課>		所長	奥山 修司
課長事務取扱	高田恭一郎	次長	柴田 英樹
総括副参事 (第一班長)	小林 利晴	総括参事	弘田 和司
副参事	團 奈歩	<総務課>	
	(確認調査担当)	課長	福池 光修
主幹	和田 剛	副参事	絹輪 桂子
		主任	中江 理恵
		主任	西山祐太郎
令和5年度		<調査第二課>	
岡山県教育委員会		課長事務取扱	弘田 和司
教育長	鍵本 芳明	総括副参事 (第二班長)	米田 克彦
岡山県教育庁		副参事	團 奈歩
教育次長	國重 良樹		(報告書作成担当)
文化財課			
課長	浜原 浩司		

表2 文化財保護法に基づく文書一覧

特別名勝・史跡の現状変更許可申請 (法第125条)

番号	都計申請文書番号 日付	内容 (標題)	申請者	期間	文化庁許可 文書番号	日付	許可条件
1	都計第316号 平成30年10月11日	現状変更 (亭舎修理等)	岡山県知事 伊原本隆太	許可日～ 平成31年3月31日	30 受文庁 第4号の50	平成30年 11月16日	掘削を伴う工事については、岡山県教育委員会職員 (埋蔵文化財担当) の立会いを求めること。 上記の結果、重要な遺構が検出された場合は、設計変更により、その保存を図ること。
2	都計第349号 令和元年10月10日	現状変更 (遺構調査)	岡山県知事 伊原本隆太	許可日～ 令和2年3月31日	元受文庁 第4号の 1127	令和元年 11月15日	
3	都計第383号 令和2年11月13日	現状変更 (遺構調査)	岡山県知事 伊原本隆太	許可日～ 令和3年3月31日	2 文庁 第1441号	令和2年 12月18日	
4	都計第358号 令和3年11月8日	現状変更 (遺構調査)	岡山県知事 伊原本隆太	許可日～ 令和4年3月31日	3 文庁 第1892号	令和3年 12月17日	

埋蔵文化財発見通知 (法第100条第2項)

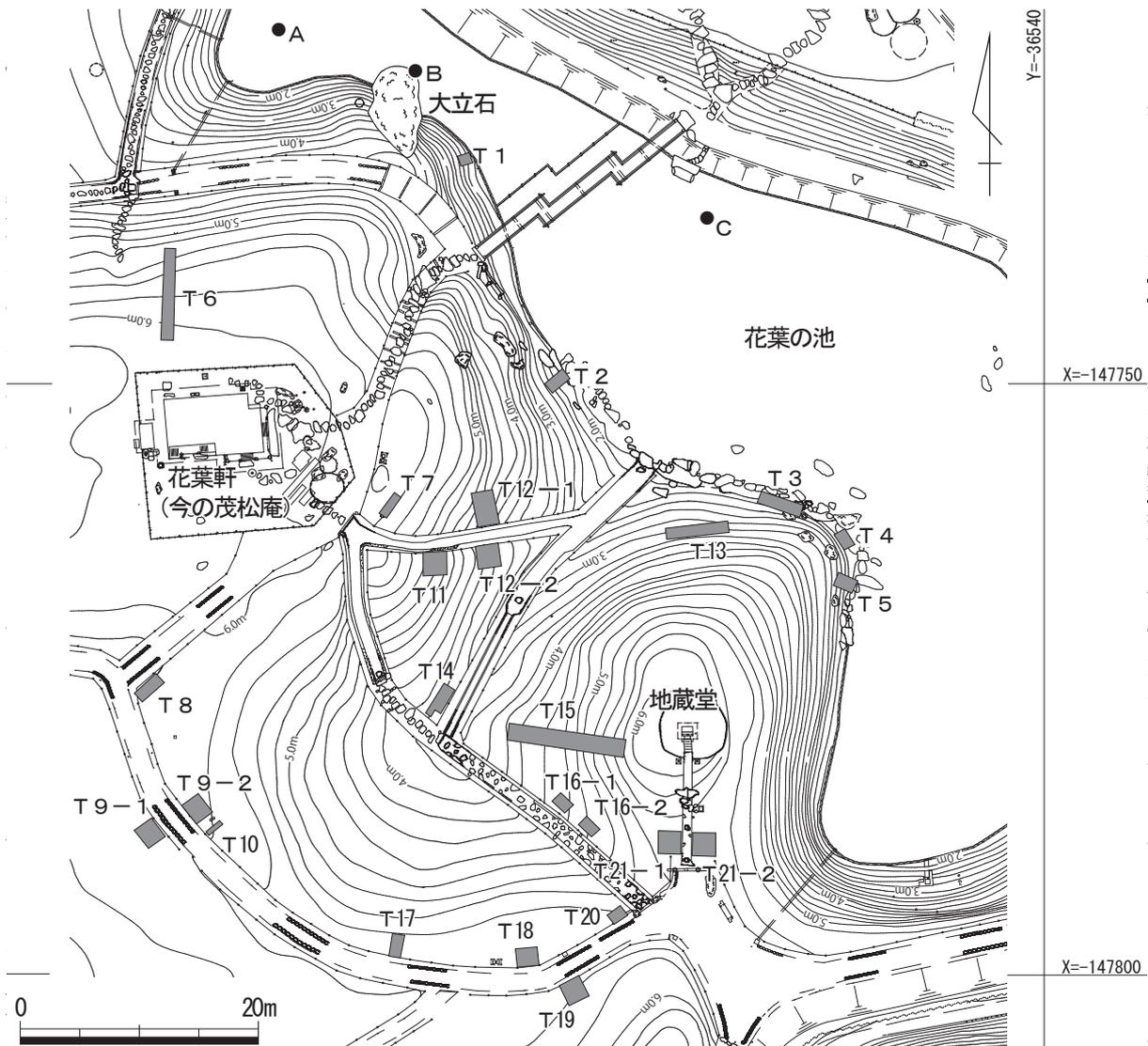
番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文理 第1633号 平成31年2月1日	瓦・陶磁器 計 整理箱1箱	岡山市北区後楽園 岡山後楽園 江戸庭園	平成31年 1月15～24日	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター
2	教文理 第1652号 令和2年1月24日	瓦・陶磁器・土師器・ 金属器 計 整理箱1箱	岡山市北区後楽園 特別名勝岡山後楽園・ 史跡岡山城跡 中世～近世 城館跡	令和2年 1月14～22日	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター
3	教文理 第1732号 令和3年2月26日	土師器・須恵器・ 陶磁器・瓦 計 整理箱1箱	岡山市北区後楽園 特別名勝岡山後楽園 近世庭園 史跡岡山城跡 中世、近世 城館跡	令和3年 2月15～25日	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター
4	教文理 第1760号 令和4年2月15日	土師器・須恵器・ 陶磁器・瓦・鉄製品 計 整理箱1箱	岡山市北区後楽園 特別名勝岡山後楽園・ 史跡岡山城跡 近世庭園、城館	令和4年 2月1～10日	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター

第3章 確認調査の成果

第1節 二色が岡の調査

1 概要

二色が岡での江戸時代の遺構の保存状態を確認するため、目的に応じた箇所計25か所のトレンチを設けた。二色が岡の北東部、花葉の池に接するT1～T5の調査では、現在の石組護岸は昭和以降の改修によるものであり、江戸時代の絵図にみえないことから、T2で検出した石組護岸は明治時代の造作であると考えられる。元禄年間の絵図にみえる花葉の池の汀にある建造物については、そ



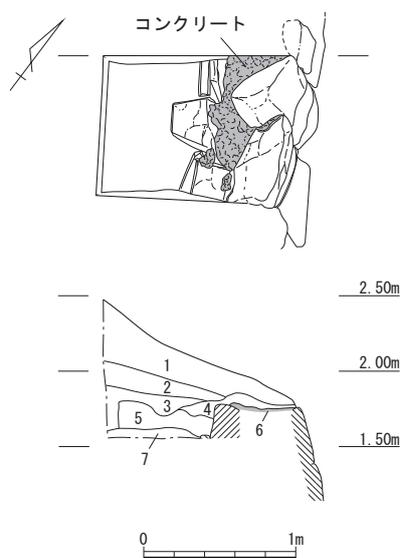
第5図 トレンチ配置図 (1/600)

の存在を確認することができなかった。これは花葉の池汀付近が度重なる洪水被害により大きく改変されたことによる。二色が岡西半の茂松庵周辺にあたる比較的緩やかな地形を呈する箇所に設定したT6～T10では、南西側を広範囲に平地にする造成を確認し、これは築庭より前に行われた可能性が高い。また、T6・T12-1・T20では、江戸時代の園路の造作に伴う盛土による造成がみられた。園路は8か所で検出し、これが築庭間もない「正徳の絵図」・「享保の絵図」に描かれる園路と一致する地点であり、他の絵図との比較からその変遷の一端が窺えた。また、現在に至るまで、その位置を踏襲していると考えられる園路についても、若干の改変を受けている部分はあるものの、現園路の下に良好な状態で遺存していると考えられる結果となった。地蔵堂の鳥居についての遺構は確認できなかったが、硬化面の存在などから、何らかの造作が江戸時代になされていたようである。景観復元計画に必要な二色が岡における江戸時代の遺構までの深さや位置情報を得られただけでなく、その保存状況が良好で、「正徳の絵図」・「享保の絵図」の測量精度が高いことも確認した。(團)

2 花葉の池周辺の調査

T1 (第5・6図、図版1-1～1-3、写真1)

T1は、花葉の池の石組の現護岸に接して設定した1.0m四方のトレンチで、江戸時代の池汀を確認するために設けたものだが、現護岸の裏込めを確認するにとどまった。現護岸の裏込めには、40



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂 (表土)
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 微砂
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂に
灰白色 (7.5Y7/1) シルト混、粘土塊含
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 微砂
- 6 コンクリート 円礫 (1～2 cm大)、砂混
- 7 灰色 (7.5Y5/1) シルト混粘土

第6図 T1 (1/50)

～50cm大の角礫が認められ、角礫の間はコンクリート (第6層)で充填されていることから、近・現代の造作と思われる。土層断面の観察から、第5・7層も近・現代であると考えられ、江戸時代の層を検出するに至らなかった。裏込めの角礫は石材や配列が後述するT2で検出した石組護岸に似ることから、明治時代の旧護岸の可能性はある。これを裏込めとして利用し、現護岸を造ったと考えられる。調査の結果、江戸時代の池汀の構造を明らかにできなかった。(松尾)



写真1 T1 (南東から)

T2 (第5・7図、巻頭図版1-2、図版1-4～1-6、写真2)

T2は、2.0×1.0mのトレンチで、T1と同様に江戸時代の池汀を確認するために設けた。現在のT2付近の池汀に石組護岸はなく、二色が岡へむけて緩やかに立ち上がり、自然石が配されている。

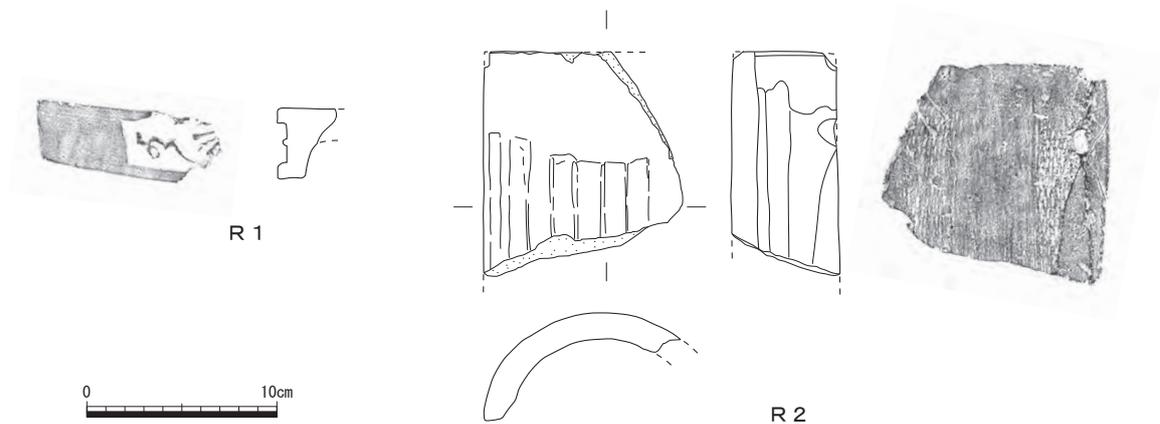
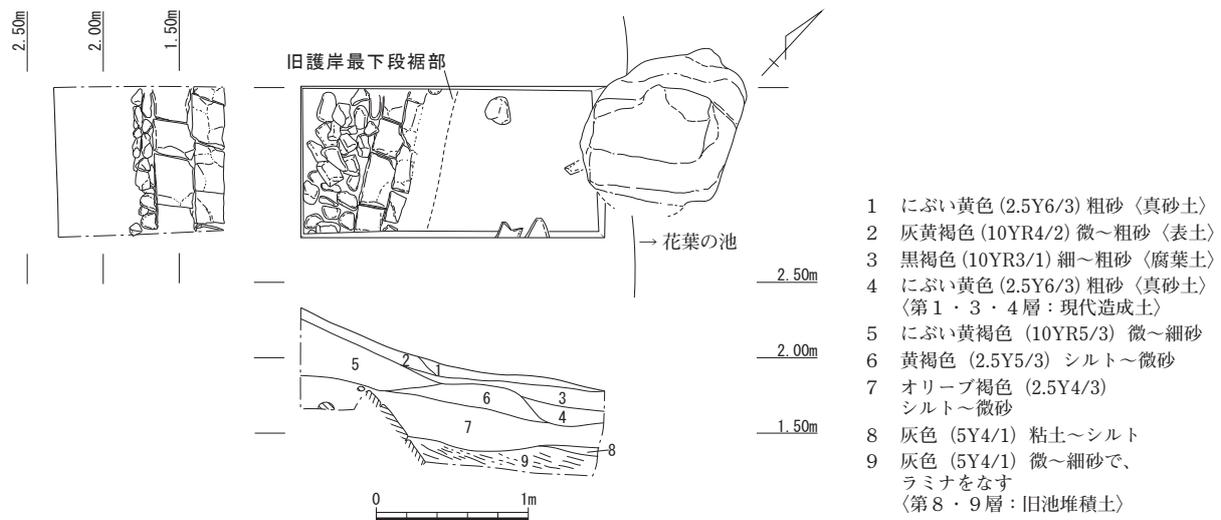
調査の結果、トレンチ西端で、現在のものと異なる石組の護岸を検出した。使用石材や加工が異なり、旧護岸が埋没した状況が看取できる。この旧護岸は、花崗岩の切石を二段とその上に河原石（10～15cm大）が認められ、河原石は花崗岩切石の前面に揃うように積まれ、かつ裏込めとしての使用も想定された。切石は二段のみの検出に留めたが、下方にもう一段存在し、この最下段は池側に約20cm張り出している。第8・9層は旧池堆積土。第7層のオリブ褐色微砂～シルトにより旧護岸が埋没した。この埋没時期を示すような遺物の出土はないが、表土直下で出土した遺物には、瓦R1・R2がある。ともに表面にはキラコがみられ、炭素の吸着は良好で一部が銀化していることから、明治時代以降の特徴をもつと考えられる。

旧護岸の造られた時期は、江戸時代の絵図に石組の護岸とみえる表現がないことと、明治時代の写真のなかに同様の構造を持つものが写っている（写真10）ことから、明治時代以降と考えるのが妥当であろう。また、土層断面から近代以降に池汀が複数にわたる改変を受けていると考えられる。

（松尾）



写真2 T2旧護岸（北東から）



第7図 T2 (1/50)・出土遺物 (1/4)

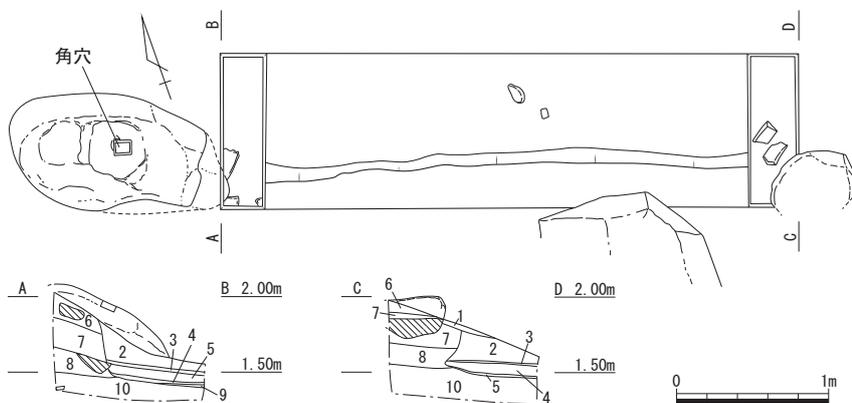
T3 (第5・8図、図版2-1~2-3、10-5、写真3)

T3は、地蔵堂の北側で花葉の池の汀に位置するトレンチで、元禄年間の絵図に描かれている月見台あるいは建物(巻頭図版4-3・4-4)などの建造物に伴う柱穴等の遺構を確認するために設定した。規模は4.0×1.0mを測る。表土と現代造成土である第1~5層を除去して検出を行ったが、明確な遺構は確認できなかった。また、東西両端を幅0.3m、標高1.3mまで掘り下げたところ、旧池堆積土である第9・10層が認められた。第10層からは細片のため図示し得なかったが、明治時代以降の特徴をもつ瓦が出土していることから、第10層の上限の時期を示すと思われる。このことから、建物柱穴の可能性が指摘されていた角穴(10×10cm、深さ15cm)のある石材(写真3)の配置は、江戸時代まで遡る可能性は低いと考える。なお、この旧池堆積土はT2(第8・9層)・T4(第9・10層)・T5(第10・11層)でも認められることから、現在みられるような花葉の池南西の池汀は、近現代以降の造作である可能性が高い。

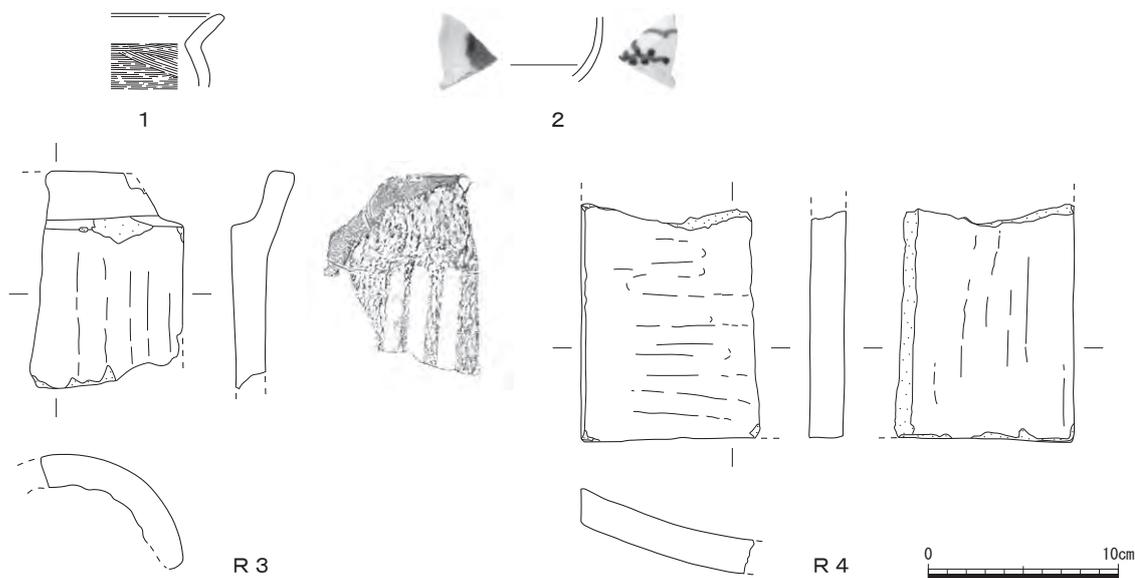
遺物のうち図示できたものは、1・2と、瓦R3・R4がある。いずれも現代造成土にあたる第2



写真3 石材に穿たれた角穴(北から)



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色(10YR3/2)微砂<表土> | 6 灰黄褐色(10YR4/2)微砂 |
| 2 黄褐色(2.5Y5/3)粗砂<真砂土> | 7 灰黄褐色(10YR5/2)微~細砂 |
| 3 黒褐色(2.5Y3/1)細砂<腐葉土> | 8 灰黄褐色(10YR6/2)微砂~シルト |
| 4 灰黄褐色(10YR6/2)粗砂<真砂土> | 9 灰色(7.5Y4/1)細砂 |
| 5 黒褐色(2.5Y3/1)細砂<腐葉土> | 10 灰色(5Y4/1)粘土~シルト |
| <第2~5層:現代造成土> | <第9・10層:旧池堆積土> |



第8図 T3 (1/50)・出土遺物(1/4)

～5層から出土している。1は、土師器鍋の口縁部である。二色が岡周辺で想定される中世前半期の包含層や遺構の広がりを感じさせるもので、築庭前の土地利用を考える一助となる。R3は丸瓦で、内面に縦方向の板状圧痕がみられる。時期は、17世紀末～18世紀第3四半期頃の岡山城6式のものと考えられる。染付の椀2は、幕末～明治にかけての時期のものであろう。R4は平瓦で、外面にキラコが観察でき、明治時代以降のものと考えられる。現代の造成土からの出土ではあるが、近代の池汀の改修を示すものである。(松尾)

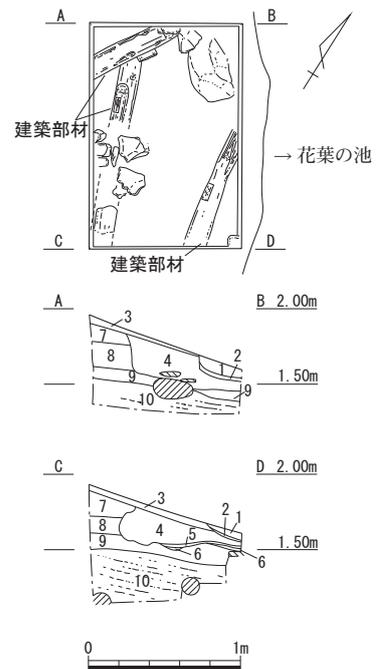
T4 (第5・9図、巻頭図版1-3、図版2-4～2-6)

T4は1.5×1.0mのトレンチで、T3の東側に位置している。江戸時代の池汀を確認するために設けた。現在の池汀には自然石が配され、二色が岡へと緩やかに立ち上がる。表土下に現代造成土がみられるが、さらに掘り下げたところ、旧池堆積土である第9・10層内から建築部材と思われる木材の一部を検出した。直径約15cmの丸太材3本を確認し、貫通する10×5cmのほぞ穴を加工しているものが認められる。木材の配置が不規則であることから、何らかの理由で投棄されたものと思われる。なお、尼崎博正氏(特別名勝岡山後楽園保存管理委員会委員)から、池の護岸を造作する際に、足場として廃材を利用する例があることをご教示いただいた。津山市に所在する衆楽園に類例がある。部材が投棄された年代がわかるような遺物は出土していないものの、第10層の旧池堆積土には微砂の斜行ラミナが観察できる点がT2の第9層と共通しており、これを同一層と考えるならば、明治時代以降の堆積土となり、建築部材は近代以降の池汀の造作に伴うものと考えられる。また、旧池堆積土がトレンチ全体で見られることから、近代以降の池汀が、現在よりも南西方向に入り込むものと考えられる。調査の結果、T4付近では、近代以降の大幅な改変が認められた。(松尾)

T5 (第5・10図、図版3-1～3-3)

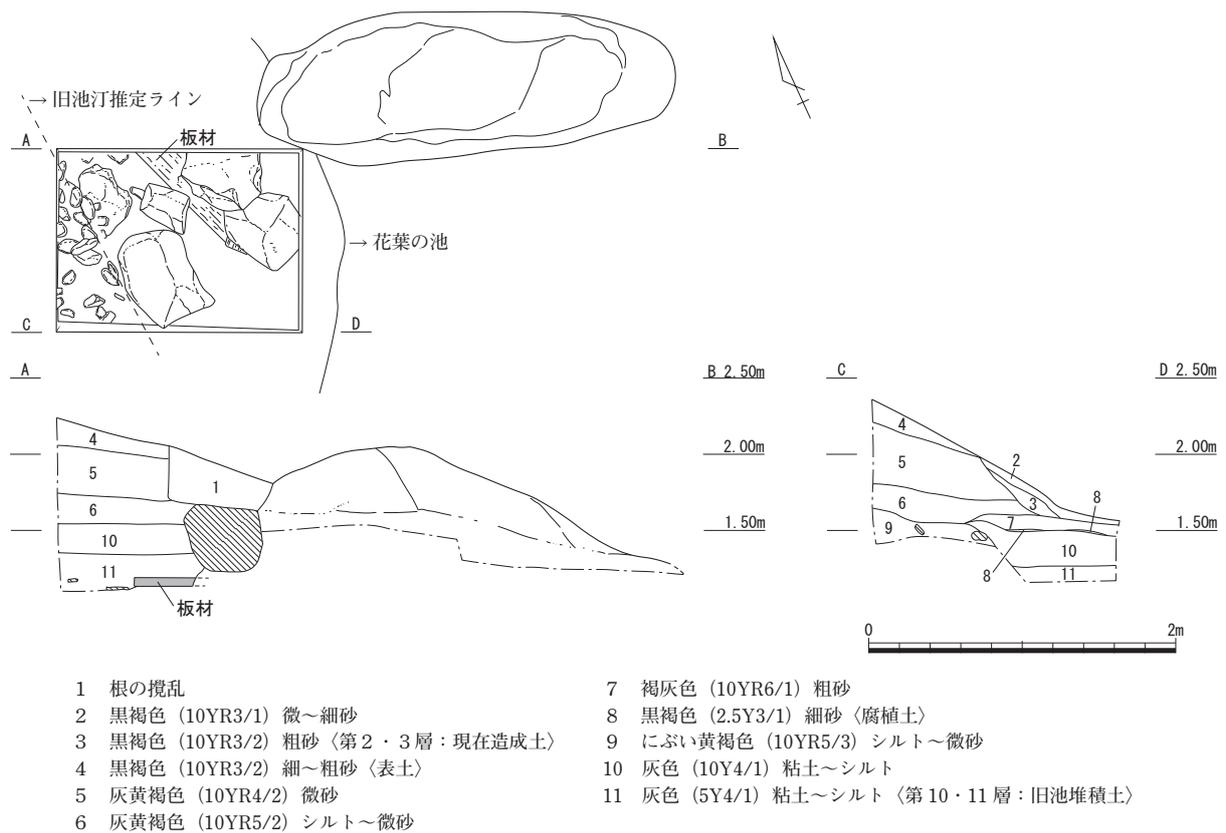
T5はT4の南側で、江戸時代の花葉の池の汀を確認するために設けたトレンチで、規模は1.6×1.2mを測る。ここでは、木材と50cm程度の角礫、西端で河原石と花崗岩を検出した。検出した木材は厚さ約6cmの板材で、旧池堆積土である第11層内で検出した。旧池堆積土は、T3の第10層に類似し、明治以降の堆積と考えられる。西端の河原石と花崗岩はT2で確認した石組の旧護岸の石材と類似しているが、石材は散乱したような状態で検出している。なお角礫は木材よりも上の標高で確認している。

T5にT2のような石組の旧護岸があったとすれば、T5周辺の池汀は明治時代に石組の護岸が造作されたが後に撤去され、自然石を配するように大きく改変されている可能性が考えられる。土層断面A-B・C-Dから類推される明治時代の池汀は、点線で図示しているように南北方向に延び、現在のものよりも約1m、西に入り込むこととなる。出土遺物はなく、これら改変の詳細な時期については不明な点が多い。(松尾)



- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂 (真砂土)
- 2 黒褐色 (2.5Y3/1) 粗砂 (腐葉土)
- 3 黒褐色 (10YR3/2) 細～粗砂 (表土)
- 4 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 (真砂土)
- 5 灰色 (7.5Y5/1) 細砂 (腐葉土)
- 6 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂 (真砂土)
(第1・2・4～6層：現代造成土)
- 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 微砂
- 8 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト～微砂
- 9 灰色 (10Y4/1) 粘土～シルト
- 10 灰色 (5Y4/1) 粘土～シルトに
灰色 (5Y4/1) 微砂のラミナ
(第9・10層：旧池堆積土)

第9図 T4 (1/50)



第10図 T 5 (1/50)

3 池底の調査

A～C地点 (第5図、写真4・5)

A・B・C地点の3か所で、花葉の池の池底までの深さを確認するために、ピンポールによる底打ち調査を実施した。池の水を抜いた状態で、堆積土の厚さを確認する手法を取った。池汀から離れたA・C地点では1m以上の深さがあるが、明確にすることはできなかった。大立石の際にあたるB地点では、約80cmを測る。T1～T5の調査成果から、近代以降の堆積土は40cm以上あることが判明しており、この時期の堆積が多分にあると考えられる。一般公開中の庭園であることから、池底の調査については、このような底打ち調査の実施のみにとどまった。(松尾)



写真4 A地点の池底調査



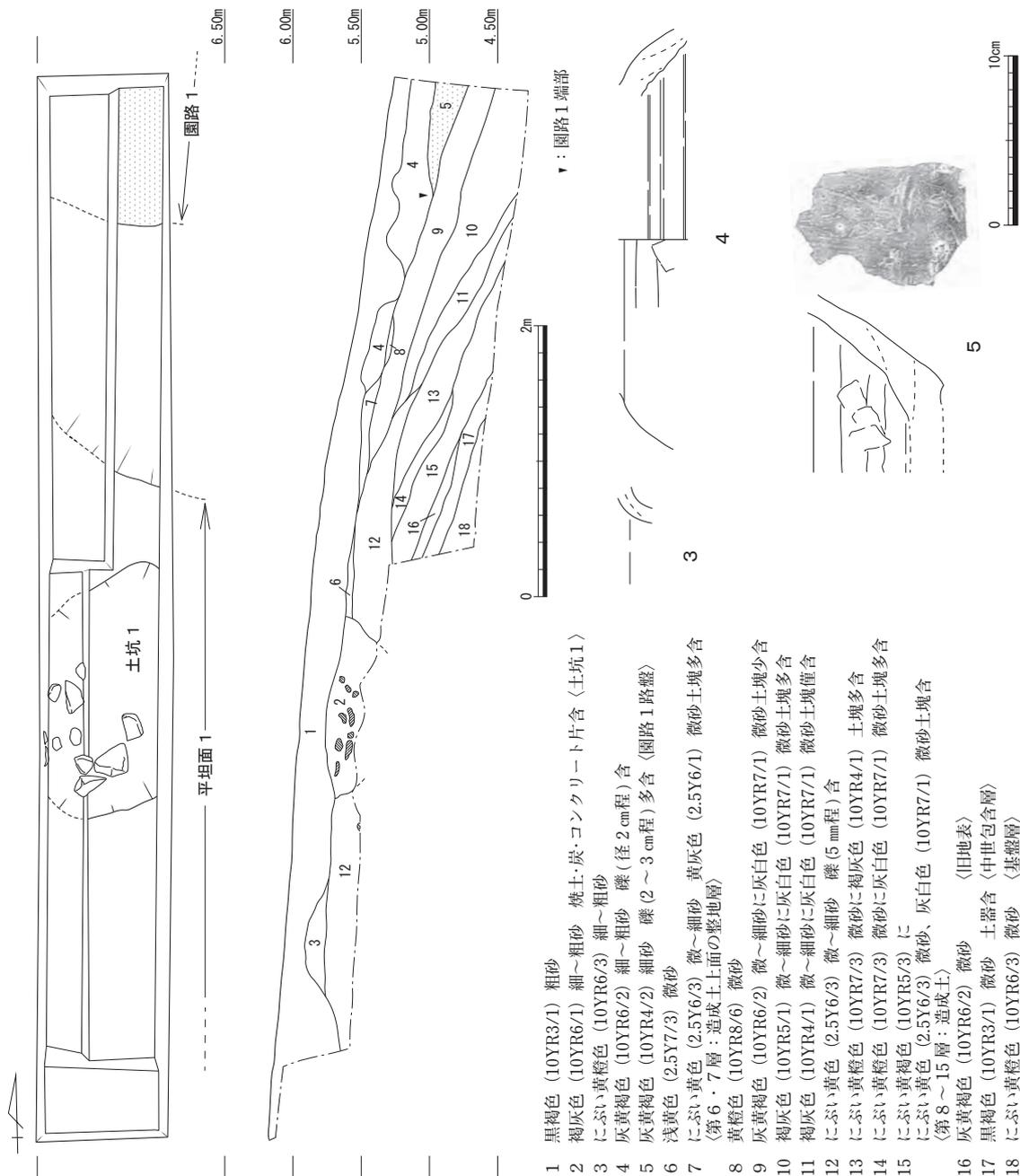
写真5 B地点の池底調査

4 二色が岡西半の調査

T6 (第5・11~13図、巻頭図版2-1、図版3-4~3-6・10-5)

茂松庵(江戸時代の花葉軒)の北側斜面に設定した南北方向のトレンチで、8.0×1.0mを測る。この付近は「正徳の絵図」・「享保の絵図」では黄色で塗られ(巻頭図版5-1・5-2)、花葉軒に接する空閑地を想定してトレンチを設けた。結果、土坑1基、平坦面1か所、園路1か所を確認した。

平坦面1は、表土を除去した標高5.6~5.8m付近で検出した、主に第12層を基盤とする堅緻な層の広がりである。この第12層は標高4.6~4.9m付近の南から北へ傾斜する旧地表(第16層)上に、厚さ約60~80cmの灰白色微砂土塊を層状に含む盛土上面に形成され、絵図から想定される空閑地の箇所と一致する。盛土は、第12層を挟む形で、上層の第9~11層と下層の第13~15層の二単位からなる。



第11図 T6 (1/50)・出土遺物 (1/4)



第12図 「正徳の絵図」と園路1 (★印)



第13図 「享保の絵図」とT 6

平坦面の一部では第6・7層による整地の痕跡もみられる。この造成の時期が明確となるような遺物は出土していない。しかし、上層盛土上面に園路1が敷設されており、上層の盛土は、築庭当初の造成である可能性が高い。下層の盛土と平坦面1は、造成の工程単位の差と捉えるならば築庭当初であるが、時期差とするならば、旧地表下層の第17層から備前焼3～5が出土しており、5が15世紀末～16世紀初頭頃のものと考えられることから、これを上限とした築庭までの期間における造成といえる。また、これらの遺物から、築庭前の中世後半期の集落の存在が想定される。

園路1は、トレンチ北端で検出した、長辺2～3cm程度の角のない礫を多く含む特徴的な層（第5層）で、厚い部分で約20cmを測る。このような層はT13～T16など、「享保の絵図」にみえる園路と一致する箇所で見られることから、ここでも同様に園路路盤と考えた。北へ傾斜する盛土を基盤として、路面が平らになるように敷設される。これは平坦面1に取り付く園路と考えられ、「正徳の絵図」（第12図）には、一致する位置に北西から南東へ延びる園路（塗りつぶされている）がみえることから、これに該当する可能性がある。しかし「享保の絵図」（第13図）には、もはやみえない。

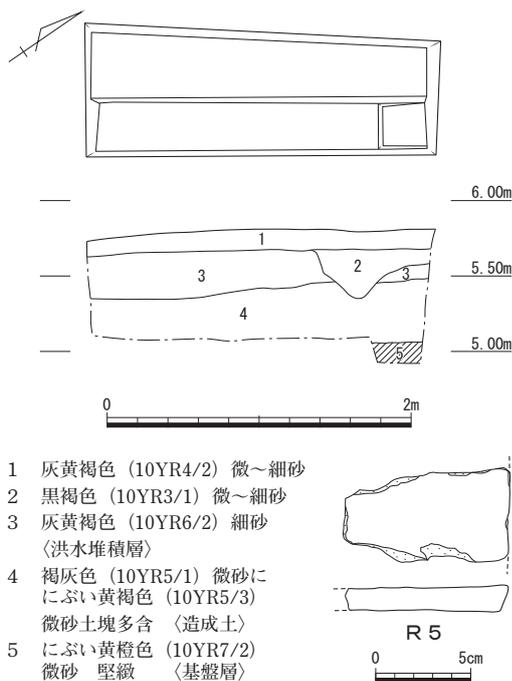
土坑1は、長辺160cm、深さ30cm以上の規模で、平坦面1の上面で検出した。埋土に多くの焼土を

含むが、壁面に被熱痕跡はない。コンクリート片を含む事から、昭和20年6月の岡山空襲に伴う片付けの可能性が高いと考えられる。（團）

T 7（第5・14図、図版4-1・4-2）

茂松庵の東側、東西に延びる現園路の北側に設定した、2.5×1.0mのトレンチである。当初現園路の下層に遺存すると想定される江戸時代の園路の状態を確認するために設定したが、樹木の繁茂に阻まれ、現園路から離れた地点に設けることとなった。

掘り下げの結果、表土下の第3層は19世紀代と考えられる薄手の平瓦R5を含み、埋土の状況から洪水による自然堆積層と考えられる。第4層はにぶい黄褐色を呈する微砂土塊を多く含む人為的な層で、盛土であると判断した。厚さ約30～40cmを測り、これにより標高5.5m付近を平地に造成する。その下層で基盤層上面を標高約5.0mで確認している。これらのこと



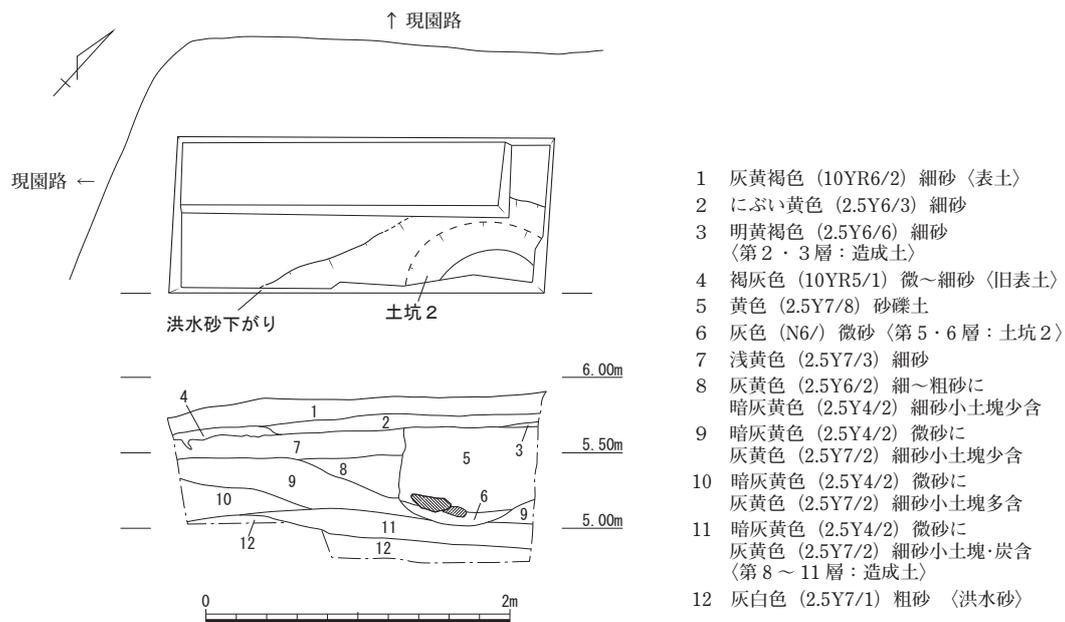
第14図 T 7 (1/50)・出土遺物 (1/4)

から、花葉軒の東側にも盛土による造成が及んでいたことがわかる。盛土が単一層であることがT 6とは異なる。この盛土からの出土遺物はなく、造成の時期は明確でない。(團)

T 8 (第5・15図、図版4-3~4-5)

茂松庵の南側の平地部分で、分岐する現園路の隅に設定した2.5×1.0mのトレンチである。江戸時代の園路の状態と、造成の有無を確かめるために設定したものである。結果、江戸時代の園路を確認することはできなかったが、造成が行われていることがわかった。ここでは標高4.9~5.1m付近で、第12層の洪水による粗砂の堆積(以下、洪水砂)が東側に向かって下がる旧地形と、その上面に厚さ約40~60cmの第8~11層を検出した。これらの層は砂質を主体としながらも、淘汰の悪い暗灰黄色や灰黄色の小土塊を不均質に含むことから盛土であると理解され、これによって標高5.5m付近で平地にする造成が行われている。出土遺物がなく、造成の時期を明確にはできない。江戸時代の園路を検出できなかったことから、現園路が踏襲し、下層に遺存する可能性が考えられる。

土坑2は、表土直下の造成土(第2・3層)下面から掘り込んだ土坑で、底面の灰色微砂の埋土上層は人頭大の角礫がみられ、全体を砂礫土により埋められている。遺物は出土していないが、埋土の状況からも昭和以降のものと考えられ、樹木を抜去した植栽痕の可能性もある。(團)

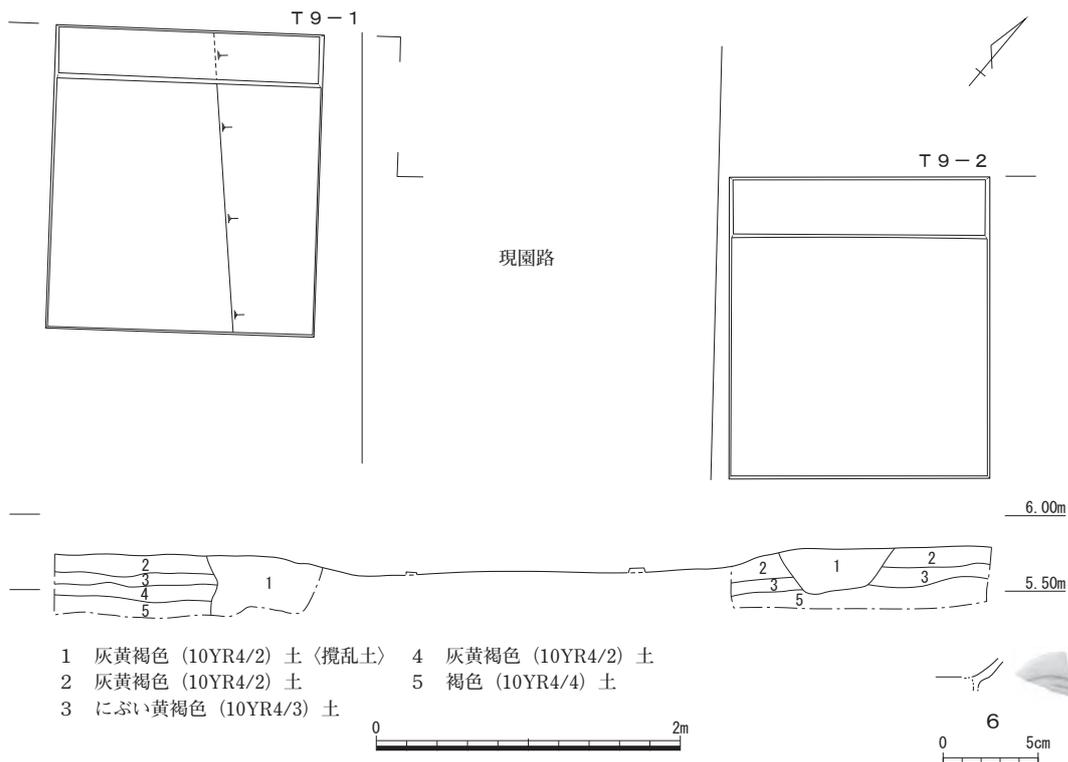


第15図 T 8 (1/50)

T 9-1・T 9-2 (第5・16図、図版4-6・4-7)

T 9-1・T 9-2は、現園路を挟む形に設定したトレンチで、現園路が踏襲したとみられる江戸時代の園路の状況を確認するためのものである。灰黄褐色土である表土を除去した状況で平面的に確認し、北西辺にサブトレンチを入れて土層の断面を観察した。結果、江戸時代の園路は調査地内に存在しないと考えられる。なお、T 9-1の北東約3分の1は現代の埋設物等により攪乱を受けていた。以上のことから現園路のほぼ真下に旧園路が敷設されていた可能性が高いと考える。

遺物は、側溝の掘り下げ中に染付の椀6が1点、出土している。近代以降のものと考えられ、江戸時代の遺物は出土していない。(松尾)



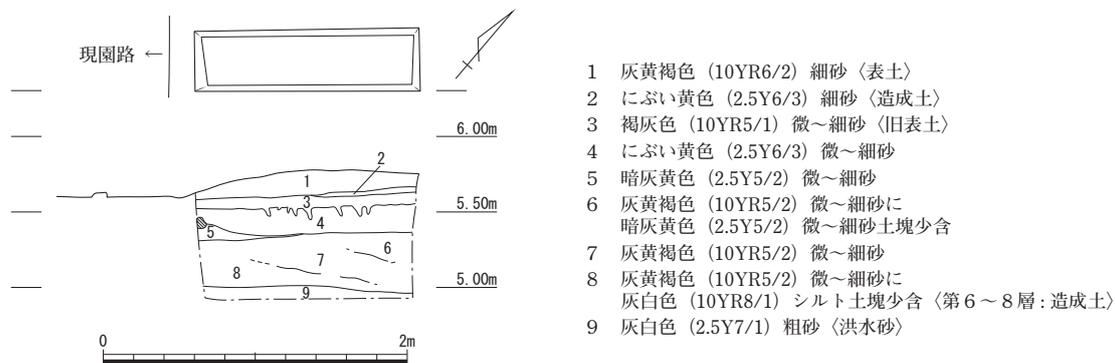
第16図 T9-1・T9-2 (1/50) 及び出土遺物 (1/4)

T10 (第5・17図、図版5-1・5-2)

茂松庵の南側、令和元年度に調査を行ったT9-2に隣接して設けた、1.5×0.4mのトレンチである。T9-2調査結果を受け、江戸時代の園路が現園路の下にあることの追認とともに、造成の及ぶ範囲を確かめるために設定した。

ここでは標高5.0m付近で洪水砂 (第9層) を確認した。その上層にある第6・8層には偽礫を含み、北東方向への傾きがみられるなど、T8の盛土と類似する。よって第6～8層は厚さ30～40cmを測る盛土で、標高5.3m付近に上面の高さを揃えて平地にする造成が行われたと考えられる。

出土遺物はなく時期は明確でないが、造成が二色が岡の南西にも及ぶことがわかった。また、江戸時代の園路路盤にみられる礫混じりの堆積は確認できなかったが、盛土上面が現園路より30cm下面にあることから、江戸時代の園路が、現園路下層で良好な状態で遺存する可能性は高い。(團)



第17図 T10 (1/50)

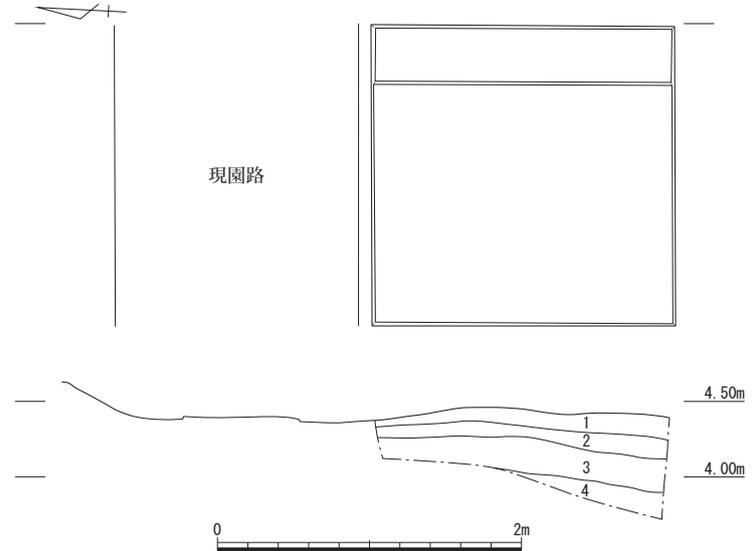
5 二色が岡東半の調査

T11 (第5・18図、図版5-3・5-4)

T11は、茂松庵の東側で東向きの斜面に位置し、現園路に接して設けた2.0m四方のトレンチである。この現園路の位置には江戸時代を通して絵図に園路がみえることから、江戸時代の園路を検出し、その状況を確認する目的で設定したものである。

灰黄褐色土である表土を除去した状況で平面的に遺構の有無を確認し、東辺にサブトレンチを入れて土層の断面を観察した。第3層は礫を含むものの、しまりのない微砂の堆積層であり、他のトレンチで検出している園路路盤の堆積とは異なる。

調査の結果、旧園路は調査地内に存在しないと考えられることから、現園路のほぼ真下に旧園路が敷設されていた可能性が高いと考える。遺物は出土していない。(松尾)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土に礫(0.5～3cm)多含
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 4 褐色 (10YR4/4) 土

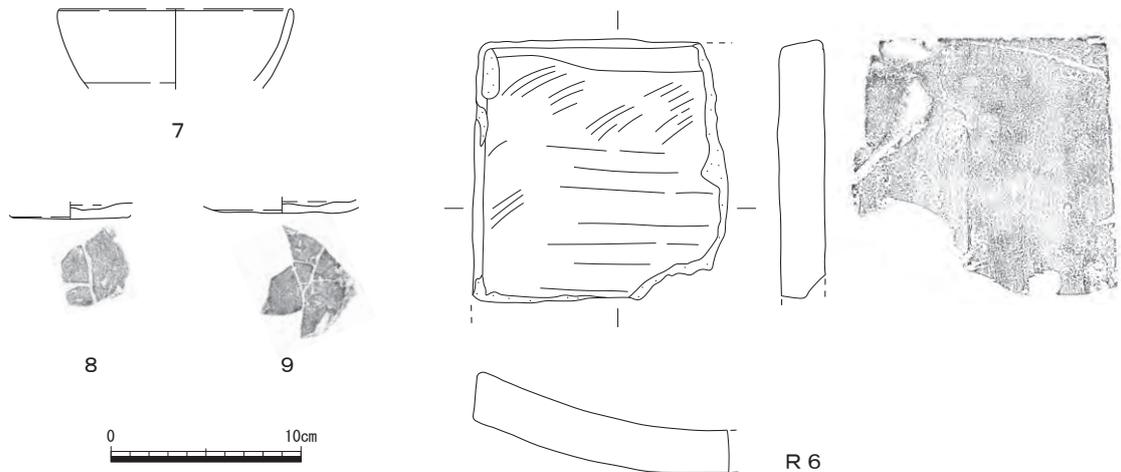
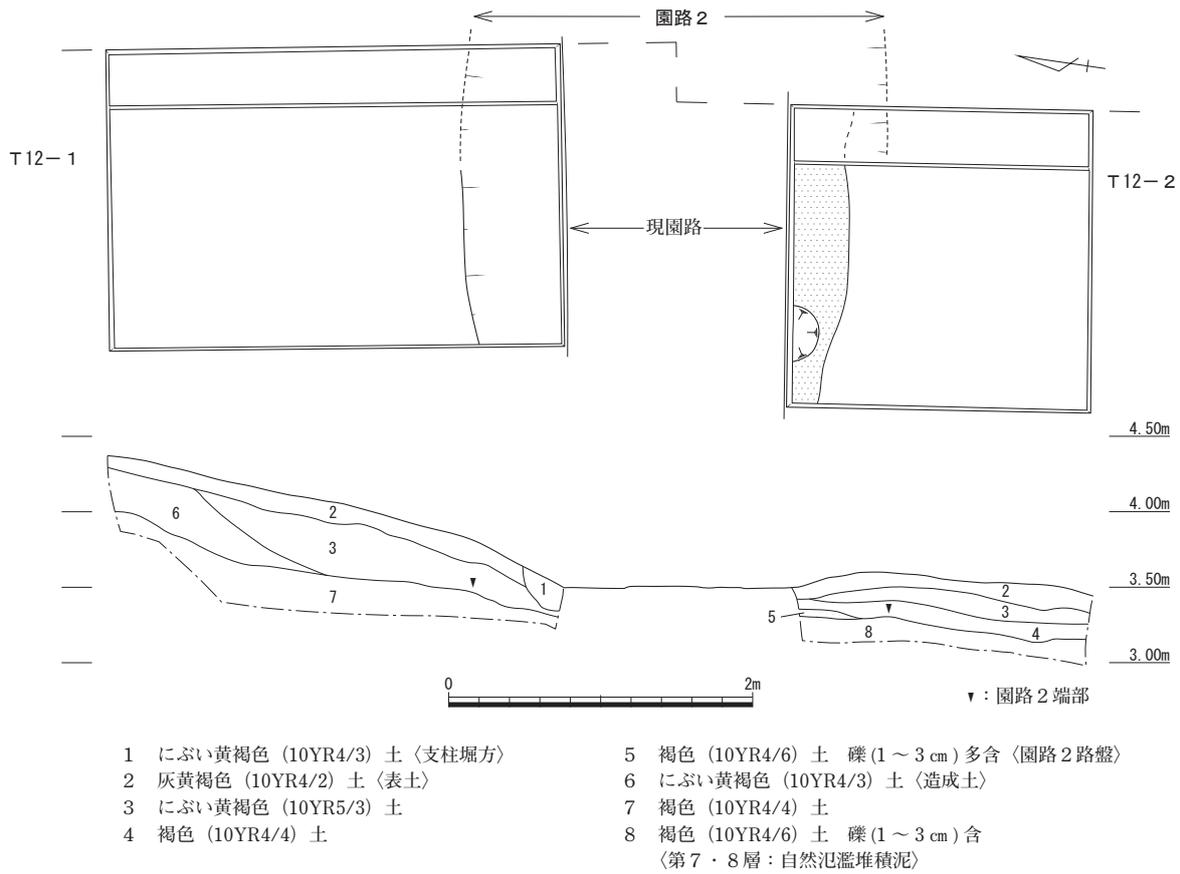
第18図 T11 (1/50)

T12-1・T12-2 (第5・19・20図、図版5-5～5-8・10-5)

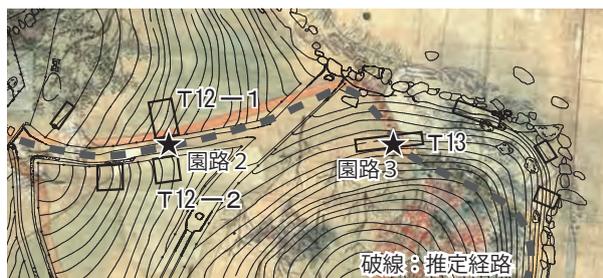
T12-1・T12-2は、茂松庵の東側、東向き斜面に位置し、T11の約3m東側に現園路を挟んで設定した。規模はT12-1が3.0×2.0m、T12-2が2.0m四方である。T11同様に、江戸時代の園路の状態を確認する目的のトレンチとなる。調査は、第2層の灰黄褐色土である表土を除去して平面確認を実施し、サブトレンチでの断面観察を行った。断面観察の結果、遺物を包含し、盛土と考えられる第6層と、自然氾濫による堆積の第7・8層上面にある路肩の痕跡(▼印)、現園路側に堆積する礫を含む第5層の存在等から、現園路面下に園路2が敷設されていた可能性がある。

第6層は一番厚い部分で約40cmを測り、西から東側への傾斜を持つ堆積である。陶器の椀7、土師器皿9と、平瓦R6などが出土していることなどから、調査時より盛土と判断していた。約8m西側に位置するT7でも同様に盛土が検出されており、第6層は盛土の東端と考えられる。

園路2は第5層にあたり、厚さ約5cmでT12-2の北辺側全体に、現園路に沿って幅約20～40cmの範囲で検出した。長径1～3cm大の礫を多く含み、T13～T16にみられる江戸時代の園路と同様の特徴を持つ層で、やや凸状に堆積した状況が見られる。第7・8層は、2.7m幅の範囲を掘り下げられ、そこに第5層が堆積する状況が見られる。このことから、凹部分が園路の造作に関連すると考えられ、路肩を持つ園路の構造が想定される。園路路盤の状況から江戸時代のものと考えられ、現園路が踏襲していることがよくわかる。園路2は現園路よりも15～20cm下層で検出されていることから、江戸時代の旧園路が現園路下層に良好な状態で遺存していることがあきらかとなった。



第19図 T12-1・T12-2 (1/50) 及び出土遺物 (1/4)



第20図 「享保の絵図」とT12-1・T12-2
・T13、園路2・3検出地点 (★印)

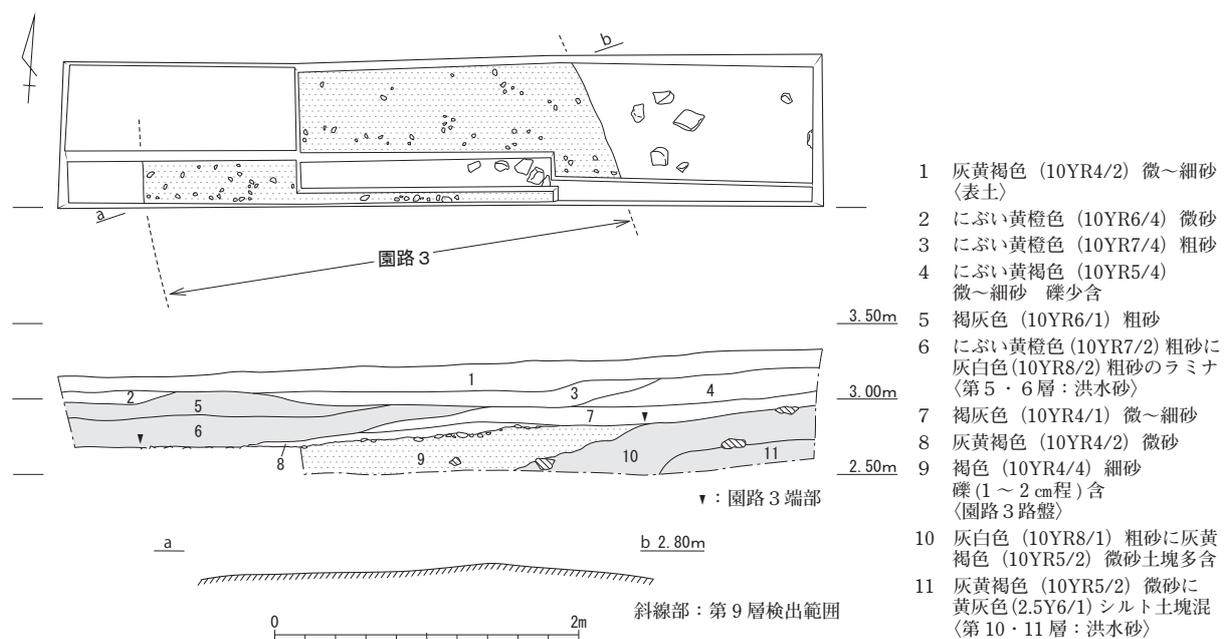
出土遺物のうち、7は肥前産の陶器の碗で、17世紀後半～18世紀初頭の時期のものである。この遺物から、この地点の盛土の時期が、築庭当初に近い時期のものであると考えられる。8・9は土師器皿の底部で、糸切りの痕跡がみられる。R6は、凹面にコビキA類の痕跡を残すもので、厚さが2.4cmを測ることから、岡山城2式のものであろう。(松尾)

T13 (第5・20・21図、巻頭図版2-2, 図版6-1~6-3)

地藏堂の北側、花葉の池に面する北側斜面に位置する5.0×1.0mのトレンチである。現在は巡っていない園路が、18世紀代の正徳・享保・明和の3つの時期の絵図にみえ、これは地藏堂の南側から花葉の池端を巡るものである。この園路の状況を確認するために設定したトレンチとなる。結果、江戸時代の園路が良好な状態で遺存することがわかった。

園路3は、表土下約50cmで確認した。長辺2~3cm程度の角のない礫を上面に多く含む特徴的な第9層は、厚さ約30cm以上の堆積であり、幅約3mでの範囲で検出した。北西-南東方向に延びる。この第9層の検出した方向が絵図が示す園路の方向と一致することや、上面に礫が多く検出される様子などから、江戸時代の園路路盤に相当すると考えられる。第9層上面は、断面では東側で標高2.9m、西側で標高2.7mで、西側へ向かって傾斜しているが、a-b断面に示したように、検出範囲に直交した第9層上面の標高は2.6~2.7mで、あまり高低差を持たず、中央部分がやや高まりを呈する様子が見られる。園路3の基盤となる第10・11層は、20cm程度の角礫や多くの偽礫を含むことから、洪水由来の堆積であり、状況から大規模な洪水によるものと推測される。これは、二色が岡を覆った延宝2(1674)年の洪水や、承応3(1654)年の洪水に由来する可能性も考えられる。また路盤が厚さ30cm以上の土を入れる大がかりな造作であるのは、基盤が洪水由来の堆積で脆弱であることに起因するのかもしれない。園路3は地形の高い東側から第7・8層により埋没した後、西側は第5・6層によって覆われる。この第5・6層は粗砂を主体とした厚さ40cmの堆積で、ラミナが見られることから洪水由来の堆積と考えられるものである。この層により、園路3は完全に埋没し、その機能は停止する。園路3は、「明和の絵図」(明和8(1771)年)にはみえるものの、「文久の絵図」(文久3(1863)年)には明確に描かれていない園路であり、この間の洪水により埋没した可能性がある。その後現在に至るまで、地藏堂の北側に園路を巡らすことはない。このように洪水砂に覆われて検出された園路は、二色が岡ではここのみである。築庭後の二色が岡や花葉の池の汀における洪水被害の状況がよくわかる地点である。

(團)



第21図 T13 (1/50)

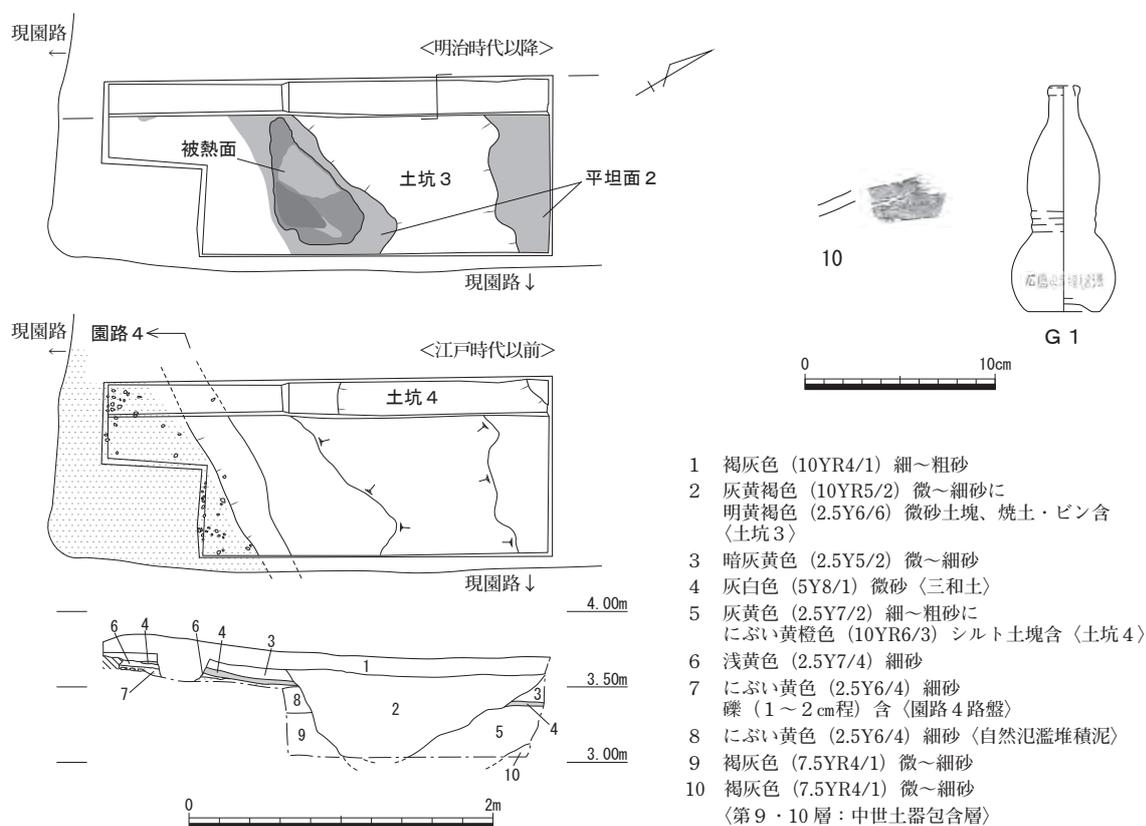
T14 (第5・22・24図、図版6-4~6-6・10-5)

T14は、地藏堂と茂松庵の間に入る谷奥の南西斜面側に位置し、分岐する現園路の角に、2.3×1.2 mと0.6 m四方の範囲で設けた、江戸時代の園路の状況を確認するためのトレンチである。

園路4は、トレンチ南西隅において表土下約10cm、洪水による堆積層上面で確認した。直径1~3 cm大の礫を含む、厚さ3~5 cm程度の堆積(第7層)は凸状に盛り上がり、東西方向へ延びるもので、「正徳の絵図」・「享保の絵図」に描かれる園路の方向にも一致することから、園路路盤に相当すると考えられる。また、T14の南、現園路に接し、網点で図示した範囲には現状でも地表面に礫の散布が明瞭に見られ、園路4が敷設されたと推定される範囲とも一致する。このことから、江戸時代の園路の一部は現園路によって削平を受けていると推測され、同様な状況はT20でもみられる。

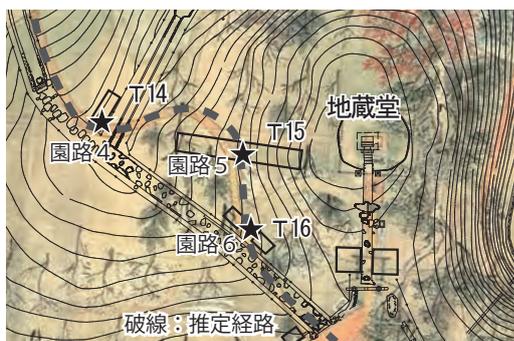
土坑4は、サブトレンチ底面で平面を確認した。径1.4 m、深さ0.4 mを測る大型のもので、土師器皿10が出土している。後述する平坦面2の下層で検出したことから江戸時代の遺構であり、規模や平面形などから、植栽痕の可能性が考えられる。また、その下層の第9・10層からは中世のものと考えられる土師器細片が出土している。遺構となるかは判然とせず、包含層となるか。

近代以降の遺構として、土坑3・平坦面2・被熱面を検出した。平坦面2はトレンチ北東側で検出した厚さ2~3 cm程度の硬化した灰白色土(三和土)の広がり、一部は園路4上面でもみられた。T14が接する南東側の園路は江戸時代の絵図にはみえないが、大正時代頃の写真(写真9)の様子から、南東側の園路は近代以降に新しく敷設されたと考えられ、これに伴うと推測される。この平坦面2の上面で被熱面を検出したが、何に起因するものか不明である。土坑3は、三和土を切る不整形の大型土坑で、ガラス瓶G1が出土している。戦後の昭和20年代以降のものと考えられる。(團)



第22図 T14 (1/50)・出土遺物 (1/4)

レンチを設定して土層断面の観察を実施した。トレンチ東端から約4 mの地点で、第6層（灰黄褐色細砂～シルト）上面において幅1.5m、厚さ2～3 cmの小礫層（第5層）を検出した。この層を平面的に確認するため、幅50cm、長さ2.5mの範囲で掘り下げたところ、明瞭な小礫層はないものの基盤となる第6層とは明らかに異なる礫混じり土（第5層相当）が、トレンチ中央付近を南東から北西方向へと1.5mの幅で延びていることを確認した。この第5層は園路路盤に相当すると考えられ、路盤東端線より東約1 mで平行するラインは園路の路肩を表している。旧園路路盤上面の標高は、東端が約4.4m、西端が約4.1mを測るが、園路に直行する a

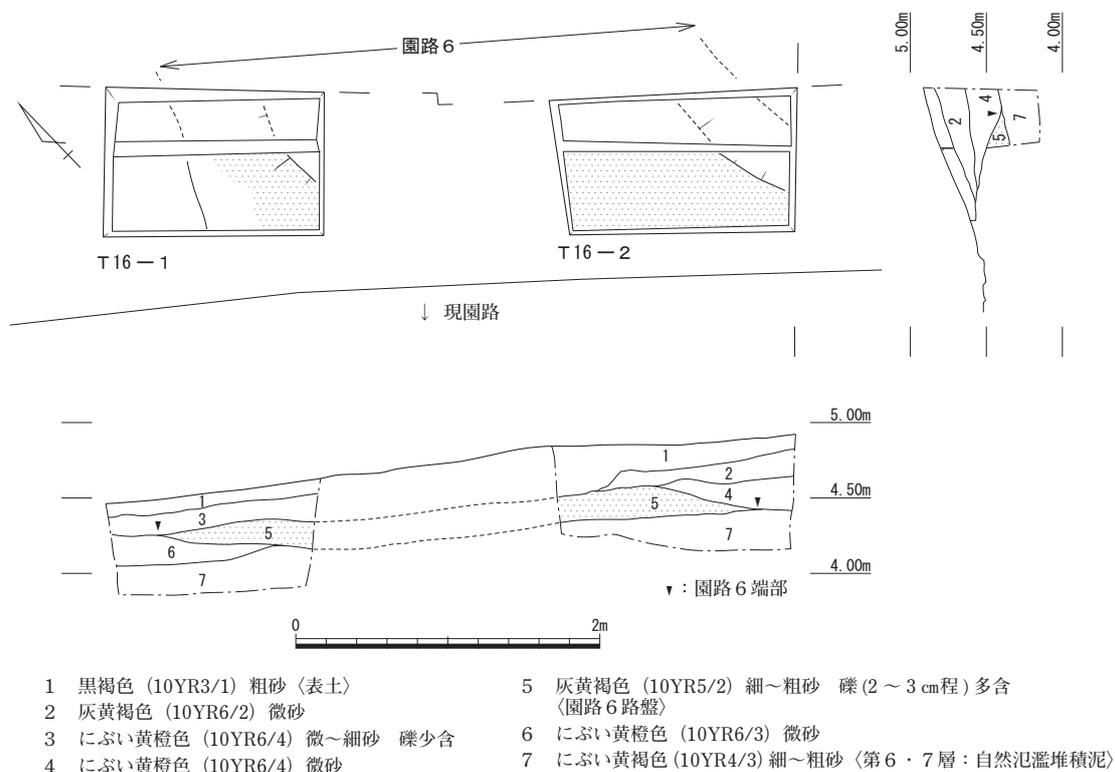


第24図 「享保の絵図」と T14～T16、園路4～6 検出地点（★印）

b 断面では傾斜は緩やかであることがわかる。絵図に描かれているこの付近の園路は南東から北西方向へと弧状に表現されており、今回確認した園路路盤の検出状況と一致する。出土遺物には、園路5の基盤となる第6層から出土した平瓦 R7 が1点ある。外面の炭素の吸着は弱く、凹面には縦方向の板状圧痕が見られる。岡山城4式の瓦と考えられ、第6層が17世紀前半以降に堆積したものと思われる。この第6層と第7層は、土の状況から洪水氾濫による堆積泥であり、第8層は洪水砂である。（松尾）

T16-1・T16-2（第5・24・25図、図版7-3・8-1～8-4）

地蔵堂の南西部分に現園路に接して設けた2つのトレンチで、各1.5×1.0mの規模を測る。T15で検出した園路5の延伸の状況を確認するために設定した。杉木立に阻まれたことから、トレンチを2



第25図 T16-1・T16-2 (1/50)

か所に分かつこととなった。調査の結果、江戸時代の園路と考えられる園路6を確認した。

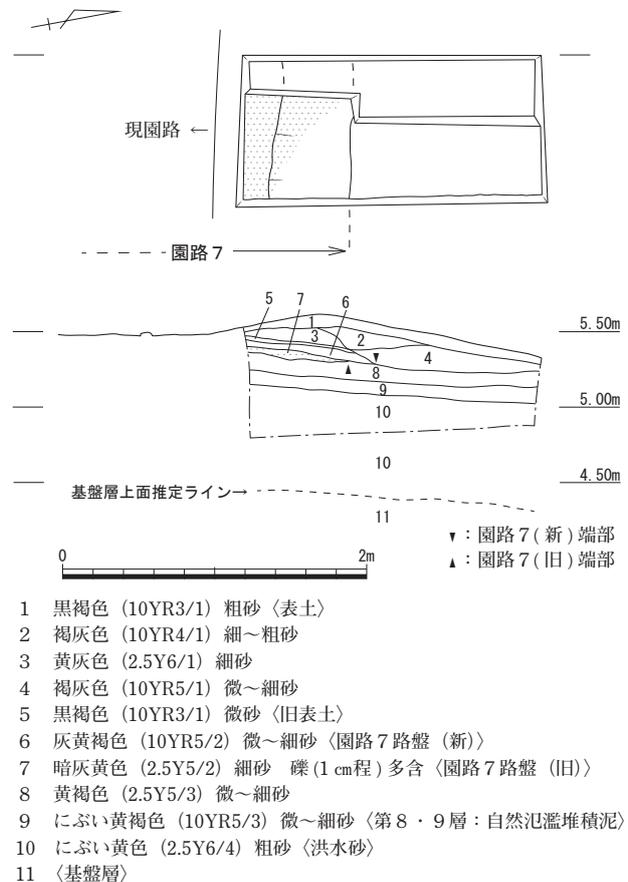
園路6は、トレンチ北東側では表土下約20~30cmで、南西側では表土直下で確認した。長径が1~2cm大の角のない礫を多く含む第5層は、厚さ約15~20cmを測り、凸状に盛り上がる。規模は、上端幅約2m、下端幅約3.5mを測り、南北方向に延びる。遺物は出土していないが、「正徳の絵図」・「享保の絵図」にみえる花葉軒から地蔵堂へ曲がりながら続く園路と位置・方向ともに一致することから、園路路盤であると考えられる。園路6の上面の標高は、東側4.6m、西側4.35mで、西側へ向かって傾斜しているが、T13やT15同様に園路に対して斜めにトレンチが設定されていることに起因するもので、路面はほぼ平坦になるよう造作されていると考えられる。園路6の路盤は他の路盤に比べて礫が多く含まれており、基盤となる第6・7層とは土質の違いが明瞭であった。園路6の南側は現園路により切り下げられ、削平を受けていると考えられるが、全体として遺存状況は良いと思われる。

園路6は「明和の絵図」(明和8(1771)年)には見えないことから、これ以前に埋没したと考えられ、園路のなかでは早い時期にその機能を停止している。地蔵堂のある斜面の高い側から、均質的な第2・4層によって埋没しており、自然堆積によると考えられる。「明和の絵図」には園路4と園路6付近を繋ぐように直線的な園路が描かれており、土砂の流入によって園路が機能しなくなったことで直線的な園路に付け替えが行われたことが推測される。(團)

T17 (第5・26・30図、図版8-5~8-7・9-1)

二色が岡の南側に敷設された現園路の北側に接して設けたトレンチで、2.0×1.0mの規模を測る。この現園路は、江戸時代の絵図を通して描かれるものを踏襲していると考えられ、この下での江戸時代の園路の状況を確認するために設定したトレンチである。結果、園路7を検出し、それが良好な状態であることを確認した。

園路7は、トレンチ南端の表土下約10cmで確認した。直径1~2cm程度の礫を多く含む、厚さ5cm程度の第7層の広がり平面で検出し、東西方向へ延びることを確認した。礫を含む特徴的な土層は、T13~T16の園路路盤にみられるものである。また、その直上の第6層は、厚さ約4~8cmで凸状の堆積を呈し、それを被覆する黒褐色を呈する第5層は旧表土と考えられる。また、検出状況からこれらは旧園路の北辺部分にあたると思われる。園路7は礫を主体とする第7層上面に盛土を行っており、他の江戸時代の園路と造作が異なることから、盛土による改修が考えられる。付近のT8~T10で園路を検出していないことから、現園路は旧園路をほぼ踏襲しているものの、場所によっては若干の差が生じる部分があるのだろう。江戸時代の



第26図 T17 (1/50)

園路は、現園路の下に良好な状態で遺存していると考えられる。

第8～10層は洪水による自然堆積層で、第8・9層は微砂、第10層は粗砂が主体である。ピンポールによる底打ち調査で海拔高4.4～4.5m付近において堅緻な層に当たることから、第10層の洪水砂は厚さ約70cm程度と想定される。遺物は出土しておらず、堆積の時期は不明である。 (團)

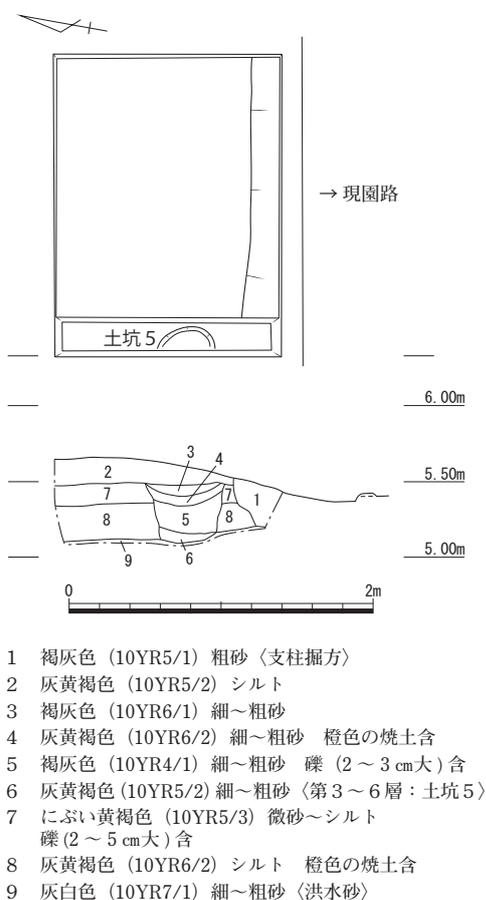
T18 (第5・27・30図、図版9-2・9-3)

T18は、二色が岡の南側を巡る園路に接して設けたトレンチである。灰黄褐色土である表土を除去した状況で平面的に確認し、サブトレンチを入れて土層の断面を観察した。旧園路は調査地内に存在しないと考えられる。なお、T18南辺は現代の埋設物等により攪乱を受けていた。以上から現園路のほぼ真下に旧園路が敷設されていた可能性が高いと考える。表土直下で土坑5を1基確認したが、出土遺物はない。時期については不明であるが、T17やT20などの周辺のトレンチでは表土直下で江戸時代の園路が確認されていることから、江戸時代の遺構である可能性が考えられる。 (松尾)

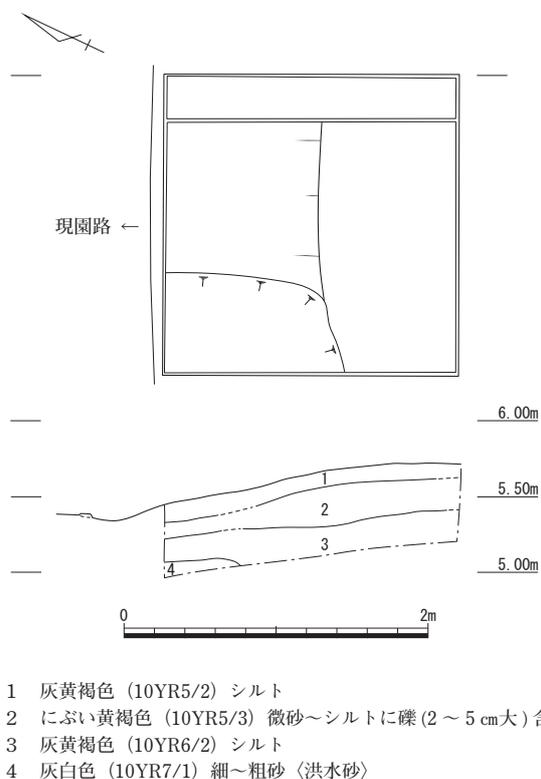
T19 (第5・28・30図、図版9-2・9-4)

T19は、現園路を挟んでT18の南側に設けたトレンチである。灰黄褐色土である表土を除去した状況で平面的に確認し、サブトレンチを入れて土層の断面を観察した。旧園路は調査地内に存在しないと考えられる。北西の一部は現代の埋設物等により攪乱を受けていた。以上のことから現園路のほぼ真下に旧園路が敷設されていた可能性が高いと考えられ、その状況はT18と同様である。

表土である第1層の下面の標高が現園路より約10cm低くなることから、江戸時代の園路が現園路に削平されることなく、良好な状態で遺存している可能性が考えられる。 (松尾)



第27図 T18 (1/50)

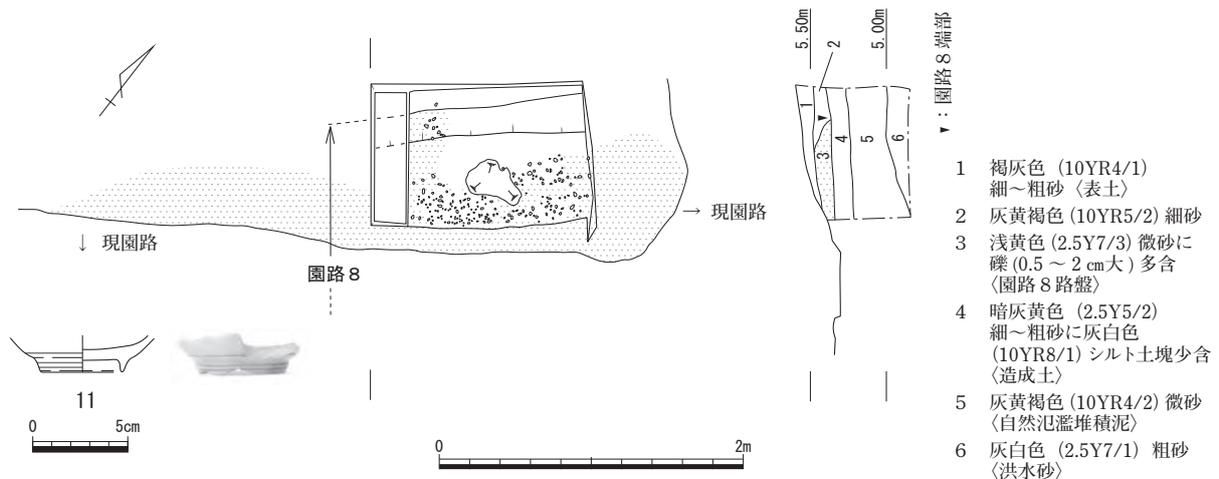


第28図 T19 (1/50)

T20 (第5・29・30図、巻頭図版3-2、図版9-5~9-8)

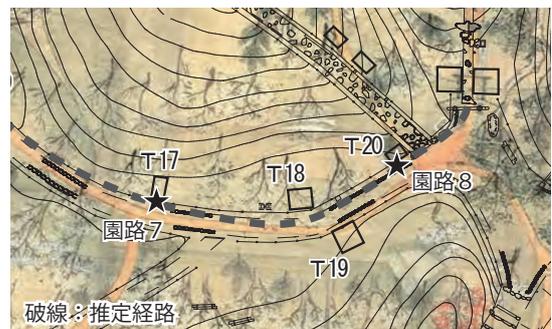
地藏堂の南側の平地部分で、分岐する現園路の角に位置する1.4×1.0mのトレンチである。現園路は江戸時代のを踏襲していると考えられるものであり、その状況などを確認するために設定した。調査の結果、それを裏付けるように園路8を検出した。

園路8は、表土直下で確認した。直径1~2cm大の礫を多く含む厚さ10cmの第3層は、凸状に堆積している。北東-南西方向で検出し、トレンチの南東側に接する現園路と同方向に延びる。江戸時代の園路路盤に相当すると考えられる。路面の標高は5.45m付近で、南東側は現園路によって削平されているため、園路の北西辺部分を約0.8m幅での検出にとどまった。園路路盤の基盤となる第4層は、厚さ10cm、灰白色のシルト土塊を少量含むもので、土の状況から盛土であると理解できる。このことから、標高約5.35mに基盤を平坦に整えたのち、路盤を造作した様子が看取できる。園路8周辺は、網点で図示した範囲に礫の散布がみられた。これは現園路によって削平を受けているため、園路8の路盤の一部が露出しているものと考えられる。出土遺物としては、路面を検出中に染付の椀11が出土している。底部のみの細片で、18世紀頃のものか。しかし第1層からの出土であると考えられ、園路8の時期を反映するのではなく後世の混入の可能性が高いと思われる。第5・6層は洪水による自然堆積層で、第5層は微砂、第6層は灰白色の粗砂を主体とする洪水砂となる。また、標高4.8~5.0m付近で旧地形が北西側へ下がる状況を確認している。



第29図 T20 (1/50)・出土遺物 (1/4)

二色が岡の南、四天王堂の北側を東西に延びる現園路に接して、トレンチを8か所設定しているが、江戸時代の園路はT17とT20の2か所で検出したものの、これらに挟まれた位置に設定したT18とT19では確認できなかった。このことから、現園路は若干の差はあるものの、江戸時代のを踏襲していると考えられる。そして、その遺存状況としては、T20では一部削平を受けているものの、全体としては良いと考えられる。(團)

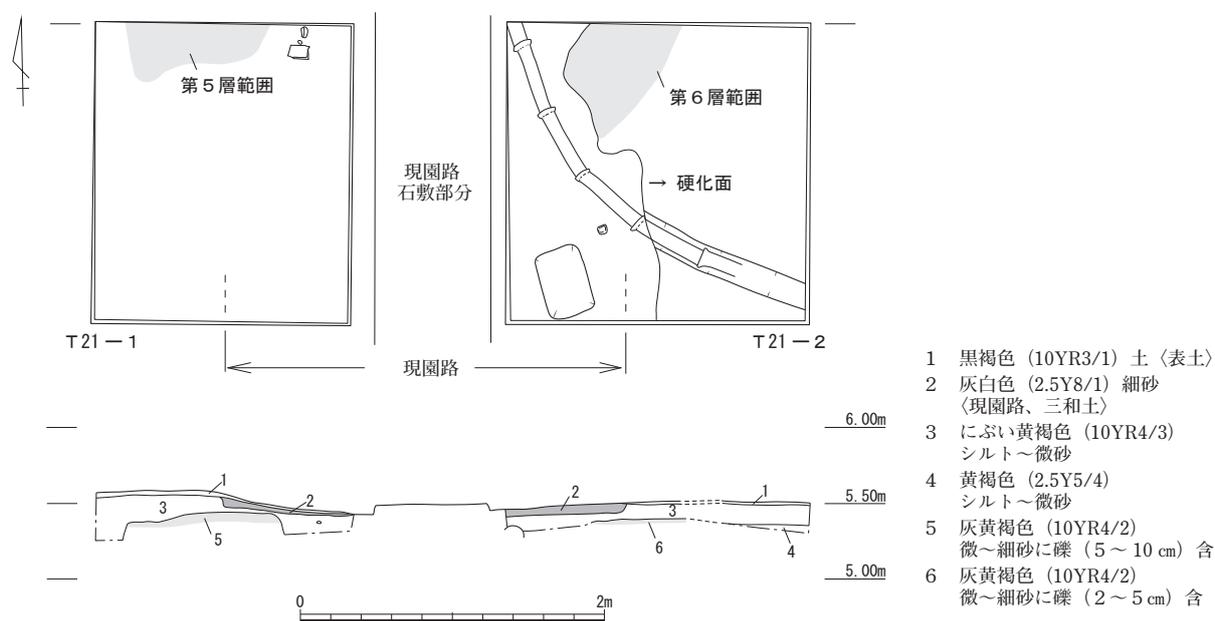


第30図 「享保の絵図」とT17・T20、園路7・8検出地点(★印)

T21-1・T21-2 (第5・31・32図、図版10-1~10-4)

地藏堂の南側に位置する2か所のトレンチで、「享保の絵図」に描かれている鳥居について、その場所を明らかにするために設定した。平成29年まで、享和2(1802)年の銘が入った石製の鳥居が存在していたが、現在は撤去されている。これは戦後に移設されたもので、地藏堂に伴うものではない。

T21-1は、2.0×1.7mの規模を測る。調査区北端で5~10cm大の円礫を含む灰黄褐色微~細砂が広がる範囲(東西1m×南北0.4m)を確認した。上面の標高は5.4mを測る。それ以外の範囲について標高5.1mまで掘り下げを行ったが、明確な遺構は確認できなかった。T21-2は、2.0m四方の規模を測る。調査区北に位置する地藏堂の手水舎から延びる陶製暗渠や、棕木の根が入り込んでいた。調査区北端で2~5cm大の円礫を含む灰黄褐色微~細砂が広がる面(東西0.6m×南北0.7m)や、調査区の東半では黄褐色シルト~微砂の硬化面が存在し、その上面は標高5.3mを測る。それら以外の



第31図 T21-1・T21-2 (1/50)



第32図 「享保の絵図」にみえる鳥居

範囲について標高5.2mまで掘り下げを行い、調査区西南隅で長軸0.5m、短軸0.3mの平面形が長方形を呈する土坑(埋土はにぶい黄褐色細砂)を検出したが、鳥居との関連性は低いと考える。なお、図化していないが直径15cmの粉炭が入った穴を検出している。これは平成26年に施された樹木保護工の痕跡である。したがって今回の調査範囲内では鳥居の位置を明確にすることはできなかった。しかしながら、硬化面や円礫などを現園路直下の三和土より下層で検出したことから、江戸時代の旧園路や鳥居周辺の造作に伴う痕跡の可能性が考えられる。(松尾)

第4章 自然科学的分析

第1節 岡山後樂園二色が岡で採取した土壌の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岡山市に所在する岡山後樂園は、岡山平野東部を流れる旭川下流左岸に築造された庭園である。令和3年度確認調査では、調査トレンチから盛土、樹木の抜去痕の可能性がある土層、造成土などの人為層が確認されている。本分析調査では、調査断面より採取された土壌試料を対象に、岡山後樂園の築庭当初の周辺環境に関する情報を得ることを目的として、花粉分析を実施する。

1 試料

対象試料は、令和3年度確認調査トレンチのT8から採取されている。T8は、岡山後樂園二色が岡に設定されており、花葉の池の南西、茂松庵の南に位置し、上位から第1層～第12層に分層されている。この内第1層が表土、第2・3層が造成土、第4層が旧表土、第5・6層が樹木の抜去痕の可能性がある土層、第8～11層が盛土、第12層が河川堆積層とされている。分析試料は、この内の第7層（盛土上位の細砂）、第9層（細砂土塊を少量含む微砂）、第11層（細砂土塊を多量、炭片含む微砂）の、計3点である。この3点について花粉分析を実施する。

2 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、三好ほか（2011）等を参考にする。

3 結果

結果を表に示す。T8から採取された第7・11層では、いずれも検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損あるいは溶解している状態であった。なお、第9層からは、花粉化石は1個体も確認されず、わずかにシダ類胞子が確認された程度である。また、分析残渣は3試料とも

表3 花粉分析結果

種 類	T 8		
	第7層	第9層	第11層
木本花粉			
マツ属	1	-	2
クリ属	1	-	-
草本花粉			
キク亜科	-	-	1
タンポポ亜科	1	-	-
シダ類胞子			
ヒカゲノカズラ属	1	-	-
他のシダ類胞子	55	5	11
合 計			
木本花粉	2	0	2
草本花粉	1	0	1
シダ類胞子	56	5	11
合計	59	5	14

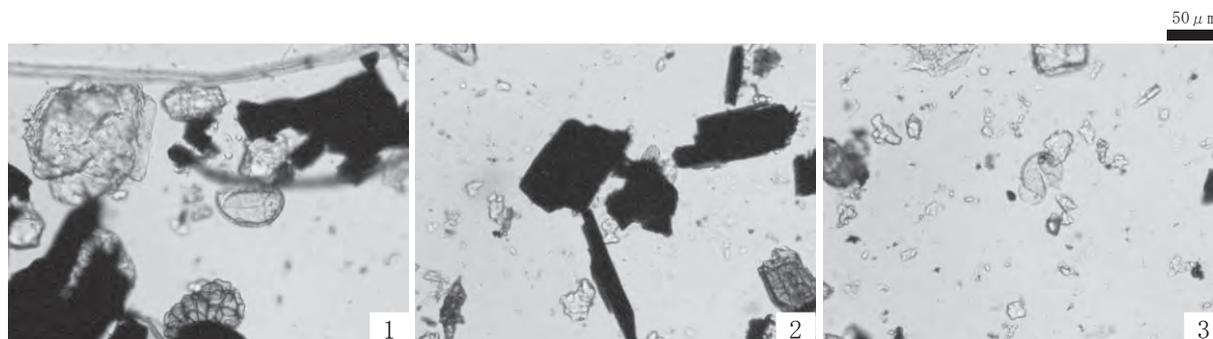
少ない。第7・11層からわずかに検出された花粉化石の種類は、木本花粉ではマツ属、クリ属、草本花粉ではキク亜科、タンポポ亜科であった。プレパラート内の状況写真を写真6に示す。

4 考察

T8の第7・9・11層について花粉分析を実施した結果、いずれの層準からも花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。花粉が堆積する際、シルト粒子と挙動をともにすることが知られており、対象とした土層はいずれも砂質であること、第9・11層は盛土とされていることなどを踏まえると、これらの土層が堆積する際に花粉が取り込まれにくかった可能性がある。また、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。わずかに検出された花粉化石の保存状態が悪いことも踏まえると、わずかに取り込まれた花粉も、その後の経年変化で分解・消失したと推測される。なお、第7・11層からは、マツ属、クリ属などの木本類が確認された。マツ属は二次林などで一般的であるが、古くから庭木として庭園に植樹されてきた種類でもある。クリ属は虫媒花であることから、あまり広域に花粉を散布する種類ではない。平成19年度調査で確認された花交の池排水路底面の土壌について自然科学分析を実施しており、花粉分析ではマツ属が高い割合で検出されている。元禄初期に製作されたとみられる「御後園絵図」にも、花交の池周辺にマツと思われる樹形の木が描かれていたことから、マツ属は当時の後楽園内に植栽されていたと推測している（パリノ・サーヴェイ株式会社,2009）。以上のことから、今回わずかに認められたマツ属、クリ属も、岡山後楽園二色が岡周辺に生育していた可能性が考えられる。草本類ではキク亜科、タンポポ亜科などが確認された。これらも二色が岡周辺の草地などに由来すると思われる。

引用文献

- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
 パリノ・サーヴェイ株式会社,2009,岡山後楽園花交の池排水路に関わる自然科学分析.岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書223 特別名勝・国指定史跡 岡山後楽園 史跡等保存整備事業に伴う発掘調査,岡山県教育委員会,43-55.
 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73



1 T8：第7層

2 T8：第9層

3 T8：第11層

写真6 花粉分析プレパラート内の状況

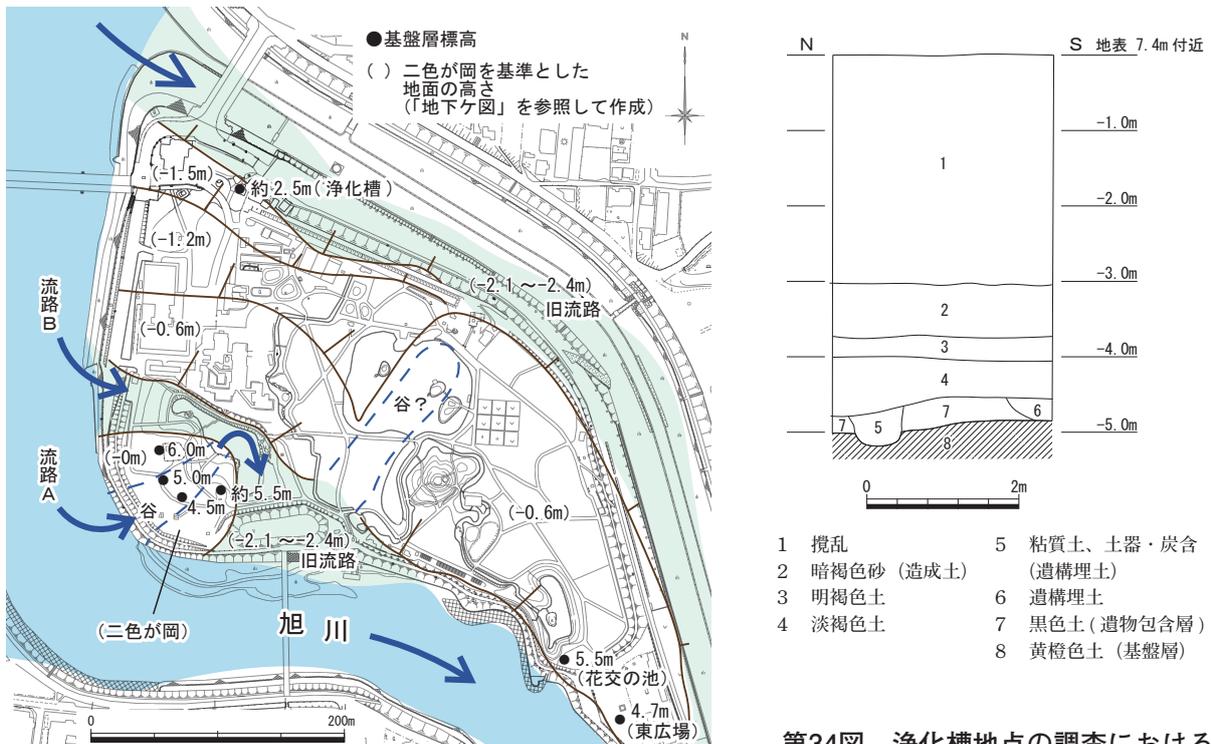
第5章 総括

第1節 考古学的成果

1 築庭前

(1) 地形

岡山後楽園（以下、後楽園）は旭川の左岸、河川堆積作用によって形成された微高地上に位置している。北と東側を昭和15（1940）年に掘削された放水路（東派川）によって限られているため、現状では中州に立地しているようにみえる。この微高地は、後楽園北西隅地点の浄化槽の調査で弥生～古墳時代の包含層（第34図）を確認⁽¹⁾していることから、弥生時代までに形成されたようである。微高地の基盤層を、今回の調査地である二色が岡では標高6.0m付近⁽²⁾で、花交の池調査地では約5.5m、また浄化槽調査地では包含層の下層の2.5m付近で確認したことから、旭川左岸に沿って土砂が厚く堆積し、北東へ向かって下がる地形が復元される（第33図）。また、後楽園築庭以前の予定地周辺の様子を描いたとされる「地下ケ図」（巻頭図版4-1）にも、後の二色が岡付近を頂点として、南西から北東に向かって徐々に下がっていく地形が表現されており、調査結果からの地形復元と整合する。この絵図には、後楽園の敷地の北側を旧流路に区切られている様子が見えることから、後楽園は南北約250m、東西約400mの微高地上に立地し、その形状を利用して築庭されたと推測できる。



第33図 岡山後楽園築庭前の地形推定図 (1/6,000)

第34図 浄化槽地点の調査における東壁土層断面図 (1/100)

続いて、今回の調査地点である二色が岡付近の旧地形について考えてみたい。現状の地形は、地藏堂と茂松庵（江戸時代の花葉軒）の立地する2つの丘（標高5.5～6.0m付近）が浅い谷地形によって隔てられる様相を呈する。周辺に設定したトレンチ（T6・7・17）では、標高4.5～5.0m前後で基盤層を確認しており、これが現状の谷地形に沿って北東へ向かって下がっている。このことから、微高地南西端に位置する二色が岡付近で、旭川からの流れ（第33図、流路A）によって南西から北東方向に削られることで谷が形成されたのであろう。さらに、二色が岡の北側を取り巻く花葉の池から御舟入跡にかけては、「地下ケ図」からも旭川の旧流路であったと考えられ、この流れ（第33図、流路B）によって北東側が削られることで、狭隘な二つの丘と谷地形がうまれたと理解できる。その後、谷地形の南側が旭川の洪水による砂の堆積（以下、洪水砂）によって、標高5m付近まで埋没する状況がみられ（第35図の洪水砂Aの範囲）、浅い谷地形を残す、今の二色が岡に見るおおよその地形が形成されたと考えられる。旧流路上の低い位置に、花葉の池が造られたことは、これまでによく知られていたことである⁽³⁾が、二色が岡も築庭にあたって地形を巧みに取り込んだ様子が窺える。

（2）土地利用

後楽園築庭前の土地利用は、弥生時代に始まることが浄化槽調査の出土遺物から示唆される。中世になると、花交の池木樋管の調査で搬入土ではあるものの鎌倉時代の土器が一定量出土していることから、近辺に中世前半期に溯る集落の存在が想起される。さらに今回の調査でもT6・T14で中世後半期の土器包含層を確認した。また遺構に伴わないものの、T1で中世前半期に属す可能性のある土師器も出土しており、二色が岡周辺でも中世段階の集落の存在が窺える。万治4（1661）年に描かれた「上道郡図」（巻頭図版4-2）には、後楽園の西半付近に「小性町」の記載がみられ、宇喜多秀家が小姓を居住させたと伝えられているが、この前身の集落が鎌倉時代から存在した可能性が考えられよう。

2 二色が岡の造成

（1）造成の種類

二色が岡の地藏堂から四天王堂の北側を巡る園路と土堤の間には、四天王堂が配される平地が広がっている。今回の調査では、こうした現在に残る地形が造成によるものであることを確認した（第35図）。造成に伴う盛土を6か所（T6～T8・T10・T12-1・T20）で検出し、工程や土質の違いから、二つに大別される。一つはT6の褐色～暗褐色の微砂を互層に積み、石灰と考えられる灰白色土の薄い層を挟む堅緻な盛土である。盛土に用いられた褐色～暗褐色の微砂は、T6の下層で検出した基盤層に類似することと、T6の南側に位置する茂松庵周辺とその西側に標高6.0mの等高線が方形に巡ることから、丘陵頂部を削平し、その切土を北側へ押し出したと考えるのが自然であろう。もう一つは、T6以外の地点において約30～60cmの厚さで検出された砂（微～細砂）を主体とするもので、土質や色調の異なる、淘汰の悪い偽礫が混じることから（図版5-2）盛土と判断できる。この盛土はT8やT10でみられるように、偽礫が入る方向から、地形に沿って谷部へ向けて盛られたようで、砂が主体であることから軟弱なものではあるが、これによって二色が岡の南西側を標高5.3～5.5m付近に高さを揃え、平地にした状況が窺える。この砂を主体とする盛土の基盤となる層は、地点によって異なり、各々、T7は微高地を形成する基盤層、T8・T10は洪水砂、T12-1・T20は旭川の氾濫によって堆積したと考えられる自然氾濫堆積泥⁽⁴⁾が基盤となる。このうちT20で

は自然氾濫堆積泥の下層で洪水砂がみられることから、砂主体の盛土が施されたのは、洪水砂の堆積後と自然氾濫堆積泥の堆積後の二時期があり、造成に時期差があることが示唆される。

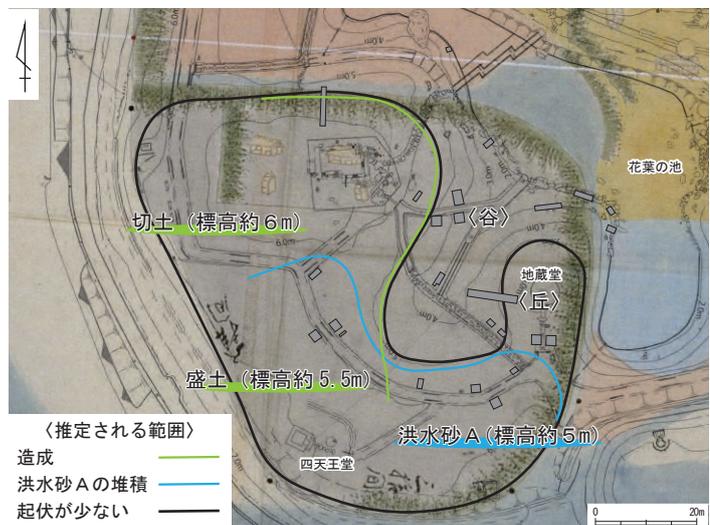
(2) 造成の時期と範囲

造成に伴う盛土から遺物が出土したのは、T12-1のみであった。出土した肥前陶器の椀は17世紀後半から18世紀初頭の特徴をもつことから、T12-1で検出した盛土の時期は、1687年の後楽園の造成開始に近い可能性が高いと考えられる。しかし前述したように、全ての造成が築庭に伴って同時期に行われたと考えることは難しい。そこで層序関係に着目して、造成の新旧関係とその範囲について考えたい(第35・37図)。

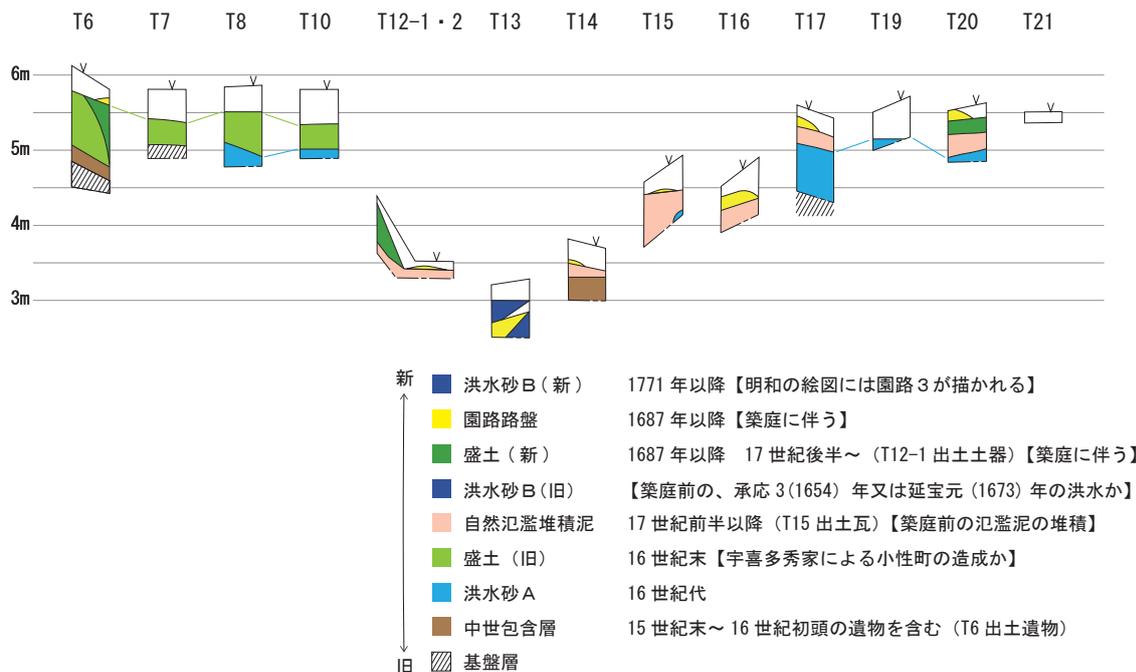
築庭に伴うと考えられるT12-1の盛土の基盤となる層は自然氾濫堆積泥である。これはT14~T17で確認した江戸時代の園路路盤(1716年頃の「享保の絵図」にみえる園路)の基盤となる層と同じで、T15出土瓦から、17世紀前半以降の堆積と考えられる。T20では、自然氾濫堆積泥を基盤とする盛土の上面に園路が敷設されるため、洪水砂の堆積後、別の洪水による泥の堆積を経た後にT12-1で盛土と園路が造作されたと考えられる。このことから、自然氾濫堆積泥を基盤とする遺構が、築庭に伴うと思われる。一方、T8・T10では洪水砂直上に盛土がみられることから、T12-1・T20の盛土より古い時期の造成に伴うものであり、築庭前に遡るものと考えられる。また、T6の盛土は、平坦面1をつくる第12層を挟んで二つの単位が観察される。造作の工程差と考えることもできるが、時期差と捉えることができ、砂が主体の盛土の新旧に対応すると思われる。T6の園路1が第8・9層上面に敷設されることから、盛土のうち、上層の第8~11層が築庭に伴うもので、第13~15層が築庭より前の造成によるものであろう。T13で検出した洪水砂が園路3の基盤となる点については、洪水の時期と流路の違いと捉えることができる。T13の洪水砂は園路3の上層と下層で検出しているが、上層の洪水砂は「明和の



第35図 洪水砂の堆積と造成の状況 (1/1,500)



第36図 二色が岡周辺と「地下ヶ図」の比較 (1/1,500)



第37図 土層断面模式図と層序関係 (縦：1/100、横：任意)

絵図」から1771年以降に堆積したもの(第41図)であり、このように園路が洪水砂で覆われた箇所は、二色が岡ではここだけである。このことからT13の洪水砂は、二色が岡の北西から旧流路へ流れ込んだ洪水によってもたらされたと考えるのが妥当である(第35図の洪水砂B)。T13の園路3の基盤となる洪水砂Bが洪水砂Aより後の時期に堆積したと考えるならば、南西部に堆積した洪水砂Aの直上の盛土が築庭前の造成によるものであって矛盾はない。T13の園路3の基盤の洪水砂B(旧)の堆積は、二色が岡まで浸水したとされる延宝元(1673)年⁽⁵⁾か、百間川築造の契機となった承応3(1654)年の洪水による可能性がある。以上のことから、二色が岡周辺の土層の新旧関係は、古い時期から順に、基盤層→中世土器包含層→洪水砂A→盛土(旧)→自然氾濫堆積泥・洪水砂B(旧)→盛土(新)→園路路盤→洪水砂B(新)であり、盛土(新)は築庭に伴う造成、盛土(旧)が築庭前の造成と捉えることができる(第37図)。造成の範囲は、築庭前には花葉軒の南西側を広く平地にし、築庭に伴っては、園路の敷設に必要な範囲のみを盛土したものと考えられる(第35図)。

では、築庭前に二色が岡を造成する契機とは何であろうか。「地下ケ図」(巻頭図版4-1)にみえる二色が岡は、一帯を藪に囲われ、何らかの土地利用の範囲を示していると思われる。これと現況図を合わせたところ⁽⁶⁾、地藏堂周辺の丘部分に加えて、造成と洪水砂Aの堆積によっておよそ標高5～6mとなった、起伏の少ない範囲⁽⁷⁾(谷部を除く)と藪囲いの範囲が一致する(第36図)。また、北西部には藪と細い線によって区画された内側に建物が描かれており、これが屋敷の表現にみえる。標高6mの等高線が方形に巡る範囲がこの屋敷地と重なることから、この造成に伴うものと考えられる。先述したように宇喜多秀家が後の後楽園周辺に小姓を居住させたという伝承を踏まえ、秀家により二色が岡の造成がなされた可能性を指摘しておく。秀家は旭川の流路を岡山城の北側へ一条となるように付け替えているが、ここは流路が狭いことから、洪水の際には後の二色が岡となる方向へ水が溢れることは想像に難くない。このことで二色が岡の南西部に洪水砂が厚く堆積し、結果として平地とする造成を容易に行うことができたのではないだろうか。

3 園路

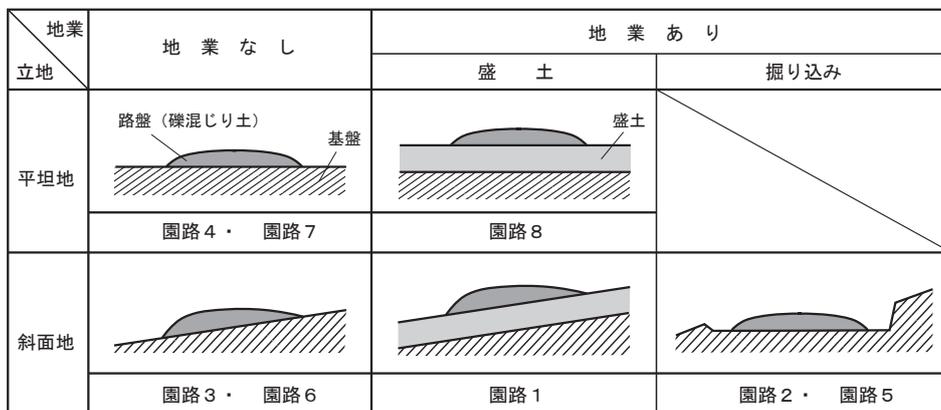
(1) 園路の認定

現在の後楽園の園路は一部に石敷があるものの、基本的には土が露出して縁石やロープ柵、魚子垣などによって境を明示され、明治時代以降の写真にはその様子がみえる。後楽園は明治17（1884）年に池田家から岡山県に譲渡されたのち現在まで幾度となく整備がなされているため、江戸時代の園路の残存状況はこれまで不明であったが、二色が岡に隣接する御舟入跡の発掘調査で、築庭後間もないとされる園路が現園路の下層約30cmで検出されたことにより⁽⁸⁾、保存状況が良好であることが示唆された。

本報告書で園路として報告した遺構は、令和元年度の調査で最初に確認した。築庭後間もない1716年頃の「享保の絵図」に描かれる園路の検出を目的として設定したT15から明瞭な礫層の広がりや平・断面を確認し、位置と形状が絵図に描かれたものと一致したことにより、これを江戸時代の園路との認識を得た。また、令和2年度の後楽園の南東端にある東広場における確認調査でも、複数のトレンチから、「享保の絵図」でみられる園路の位置に礫混じり土を凸状に盛り上げる遺構を検出した。よって、礫を伴う土層が江戸時代の園路を構成するものと把握するに至った。

(2) 園路の構造と規模

園路は、幅のわかる箇所では255～360cmを測るが、概ね3m弱と現園路と同程度の規模である。園路路盤は礫混じり土の単一層で、これを盛り上げて路面をならすことにより、園路の内外を区分している。礫混じり土は、黄色を帯びた均質な微～細砂に長径1～3cm程度の礫が不均質に混じること、礫の大きさが比較的揃っていることなどから、人為的な堆積であることは明らかである。園路の構造は簡素で（第38図）、地業そのものも行われないものもある。地業も盛土（園路1・園路8）がみられるほかは、浅い掘り込みを行う（園路2・園路5）にとどまり、これは斜面地においてのみ行われていた。園路の基盤が平坦か斜面かによって、路盤の土量や盛り上げ方に違いがみられ、路面をならすために斜面地で約20～30cmと厚くなる傾向がみられるものの、掘り込みを行っている園路路盤は薄く、数cm程度である。一方、平坦地では厚さを20cm以内に収める状況が窺える。路面には細礫が密に現れ、礫敷きに見える園路6などもあるが、これは礫混じり土の表面に近い部分の礫が風雨等で洗い出され、結果として礫敷きの様相を呈したものと考えられる。園路7の路盤は他地点と異なり、



第38図 二色が岡における園路路盤模式図

礫混じり土の上層に砂質土が盛り上げられている。こうした状況は園路7でしか確認できないことから、改修の痕跡と考えるのが妥当であろう。一方、御舟入跡の園路は路盤に礫を含まず、砂質土で路面が硬化している。こうした違いは、御成御門にほど近いという場所であることに起因するのかもしれない。園路はその地点ごとに適切な土を用いて路盤が造作されたと考えられ、二色が岡では景観を損ねない園路である必要から、簡素な構造であったと推察される。

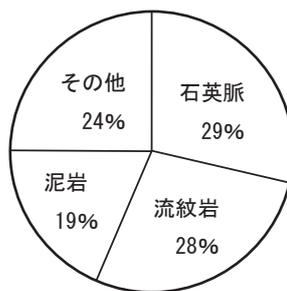
(3) 礫の由来

路盤の礫混じり土は、不均質な礫の混じり方から砂質土に礫を混ぜたものであると考えられる。この礫の由来について、『御後園諸事留帳』にある、虫明(瀬戸内市邑久町)と下津井(倉敷市(旧児島郡))から砂利を取り寄せる記述(表4)が参考になると考えた。このことから、路盤の礫サンプルについて、鈴木茂之氏(岡山大学名誉教授)に鑑定・御教示いただいた。鈴木氏によれば、下津井周辺は花崗岩が多いことから他地域のものとの判別は難しいという。それに対し、虫明周辺に分布する超丹波帯虫明ユニット⁽⁹⁾には、泥岩に挟まる砂岩やシルト岩が流動的に引き伸ばされたものが時折見いだされることから、礫は虫明ユニットに特徴的な産状を呈し、他地域のものと判別が可能であるという(写真7)。T14の園路4の礫サンプルは4点のみと少量であったため、参照としてT14・T20周辺で現状露出している礫を採集したもの⁽¹⁰⁾と、令和2年度に調査をした東広場調査地の園路⁽¹¹⁾の礫サンプル154点を鑑定いただいた。その結果、園路4の礫サンプルには虫明産出のスランプ性堆積岩(泥岩～砂岩)(写真8-1)が1点確認された。また、参考とはなるがT14・T20周辺採取でも虫明産出の礫(泥岩及びスランプ性堆積岩(泥岩～砂岩))をT14で9点、T20で4点確認し、さらにT14では旭川や吉井川流域に産出しないチャートの礫が確認された。チャートは、岡山では備前市三石に小分布する丹波帯丹波層群に産するため、虫明周辺で採取されることに矛盾がない。また、東広場のT4の園路の礫サンプルにも、虫明産出の礫が1点(泥岩)確認された(写真8-3)。よって、築庭当初の園路路盤に含まれる礫は虫明周辺から持ち込まれた可能性が高く、後楽園の一応の完成後、



提供：鈴木茂之氏

写真7 虫明ユニット、礫サンプル (断面)



サンプル総数 154点

石英脈	44
流紋岩	43
泥岩	29
砂岩	8
花崗岩	7
断層破砕部	7
片岩	6
山砂利	6
ホルンフェルス	3
石灰質岩	1

第39図 東広場調査地園路の礫組成



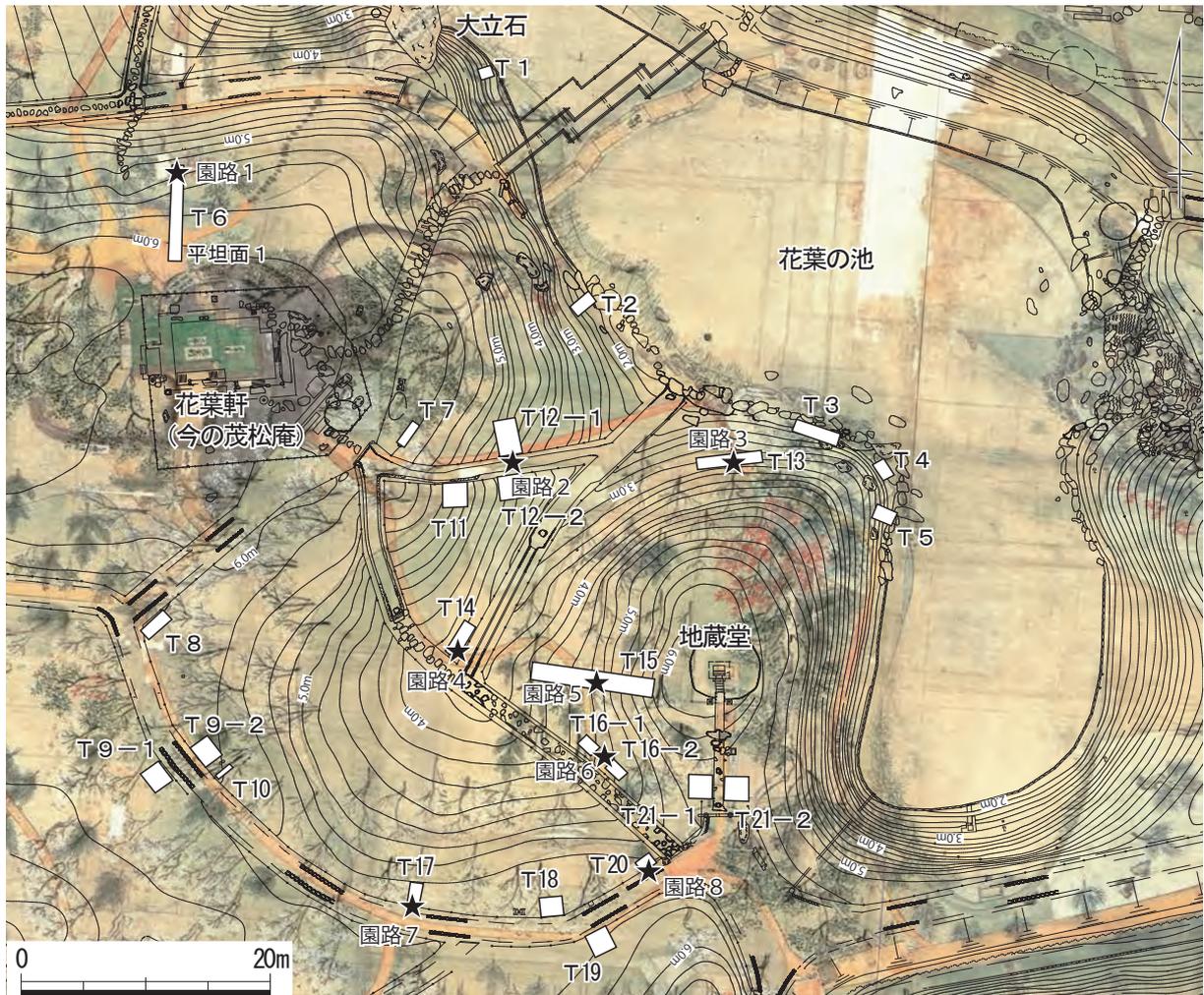
1 T14園路4 (スランプ性堆積岩(泥岩～砂岩))
 2 T14園路4周辺採取 (泥岩)
 3 東広場調査地T4園路 (泥岩)
 4 東広場調査地園路 (泥岩)

写真8 路盤に含まれる礫 (1～3：虫明産出 4：旭川流域産出)

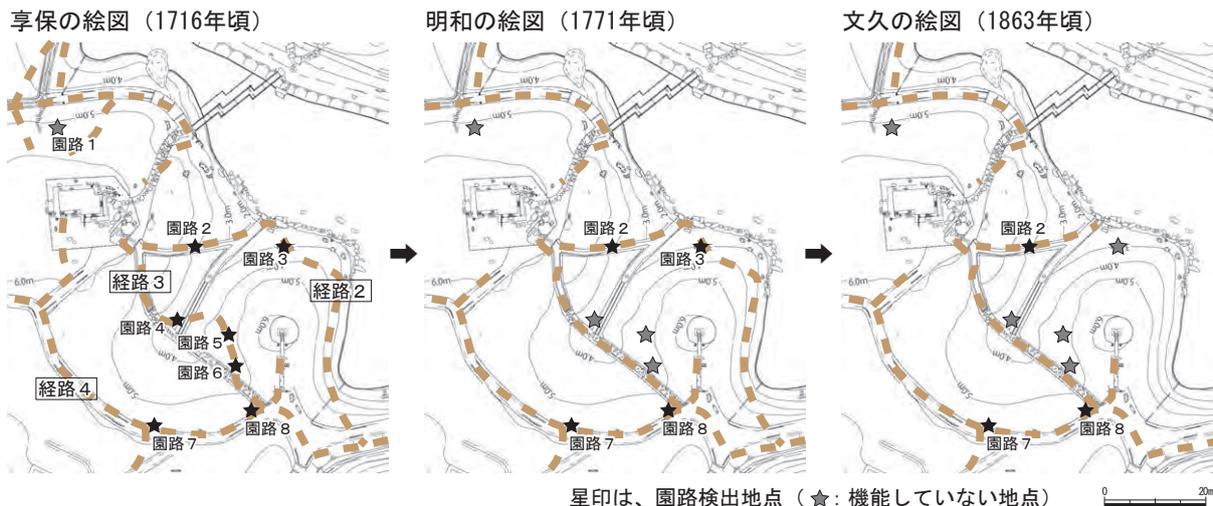
40年以上経過した延享3（1746）年や宝暦2（1752）年の記述にある虫明の砂利は園路の補修に使用されたことが想定される。一方、東広場調査地の園路に含まれる泥岩の多くは虫明のものではなく、旭川流域で産出される（写真8-4）もので、岡山市北区中牧から御津鹿瀬にかけての旭川沿いと御津金川から御津虎倉にかけての宇甘川沿いに分布する舞鶴帯舞鶴層群由来と考えられる、葉理を伴わない塊状の泥岩である。また同由来のホルンフェルスや1点であるが石灰質岩が確認されたことから、礫の構成としては旭川流域で産出される様相を呈している。このことから、遠隔地の虫明以外にも近隣の旭川流域の礫を園路敷設にあたって持ち込んだのであろう。虫明の礫については延享3（1746）年の記述には「青細石」との但し書きがあり、その色調が泥岩を想起させる。旭川流域のものが主体の東広場調査地の園路の礫の組成には泥岩が2割を占めることから（第39図）、園路の造作にあたっては暗灰色である泥岩が好まれたのかもしれない。虫明産出の礫には、灰白色を呈するスランプ性堆積岩もあることから、暗灰色の泥岩を選別して搬入させる意図から但し書きが書き加えられたと考えられるのではないだろうか⁽¹²⁾。

（4）園路の時期と変遷

園路の時期は遺物から判然としないのが実情ではあるが、江戸時代の絵図にみえる園路と比較することでその時期を絞り込むことができ、変遷があったことが知れる。



第40図 江戸時代の遺構（園路1～8・平坦面1）検出地点と「享保の絵図」（1/600）



星印は、園路検出地点 (★: 機能していない地点)

※経路1は、第12図参照

		1687年 貞享4年 着工	1690年頃 元禄3年頃 花葉軒付近 に亭舎	1700年 元禄13年	1712年頃 正徳2年頃 正徳の絵図	1716年頃 享保元年頃 享保の絵図	1771年 明和8年 明和の絵図	1863年 文久3年 文久の絵図	現在
経路1 (花葉軒の北)	園路1	造成を伴う	一応の完成	(○)	付替	×	×	×	×
	経路2 (花葉軒から花葉の池を巡る)	園路2		造成を伴う	○	○	○	○	○
経路3 (花葉軒から地藏堂へ続く)	園路3			○	○	○	洪水	×	×
	園路4			○	○	×	×	×	×
	園路5			○	○	×	×	×	×
経路4 (四天王堂の北)	園路6			○	○	×	×	×	×
	園路7			○	○	○	○	○	○
	園路8	造成を伴う		○	○	○	○	○	○

第41図 絵図からみる、園路の変遷 (1/1,500)



写真9 大正頃の茂松庵とT14付近 (南東から) [渡辺家資料]

園路は、検出地点で園路1～園路8として報告しているが、絵図と比較対照すると第12図(経路1)と、第41図(経路2～4)に示した4つの経路に復元される。経路1にあたる園路1は「正徳の絵図」のみにみえる(第12図)もので、塗りつぶされていることから、築庭まもなく付け替えが行われたことがわかる。1716年頃の「享保の絵図」にはみえない(第13図)ことから、1712年までに造作され、1716年以前には廃道となったようである。園路2・園路3は、経路2に位置する。園路2は江戸時代を通じて現在も踏襲されているが、園路3は、洪水砂で埋没し、1863年の「文久の絵図」には明瞭に描かれない。この頃までに経路2は花葉の池端まで行き止まりとなり、池端を巡る部分は廃道となったと考えられる。園路4～園路6は、経路3に位置する。「正徳の絵図」・「享保の絵図」にのみ弧を描く園路として描かれ、弧の部分の3地点で園路を検出している。「明和の絵図」には直線の経路として描かれていることから、1771年までに付け替えられたことがわかる。園路7・園路8は、経路4に位置する。絵図からは、江戸時代を通して現在まで使用される経路にあたる。踏襲されながら今もある経路2・

経路4にあたる園路2・7・8の3地点のうち、路面が補修された痕跡がみられるのは園路7のみで、『御後園諸事留帳』の天保7（1836）年の記事中にみえる「砂利道ノ小砂利ヲ不残揚ケ山土ヲ入ル」という記述⁽¹³⁾から、園路7の補修痕が江戸時代に遡る可能性がある。「明治の絵図」には、経路4を描く園路に大ぶりの礫敷表現があるが、これは安政2（1855）年に調練のために園内の道筋を補強したことによる可能性もあるという⁽¹⁴⁾。しかしこのような礫敷を調査では検出できず、園路8付近などは大きく削平されている箇所もあり、近代以降の改修のなかでその痕跡が失われた可能性が高いものと考えられる。現園路のうち、花葉の池からT14へ向けて南西方向へ延びる直線の園路は、江戸時代の絵図には見当たらず、近代の整備に伴って敷設された園路であろう。この園路に沿って設定したT14では、表土直下で三和土により整地された平坦面2を検出した。大正時代頃の写真(写真9)に、この付近が写っているものがあり、園路に付帯するものと思われる。このような三和土はT21でも確認し、現状でも一部露出しているのがみられる。近代以降、園路の整備に伴って三和土が施された箇所があると思われる。

4 植栽痕

5基確認した土坑のうち、土坑1は戦災の片付けによるものと思われるが、それ以外については出土遺物に乏しくその性格は不明である。しかし、江戸の大名庭園の調査で報告されている土坑状の遺構のうち、植栽痕と報告されるものがあり、その形状から樹木を植える、または抜去するなどが想定されている⁽¹⁵⁾。『御後園諸事留帳』には後楽園内での植栽記事が散見され、二色が岡でも木の植え替えが行われたようである（表4）。

検出した土坑2～5は時期が江戸時代から現代に至るものがあり、その規模や形状も様々であること、基本的に遺物を含まないことや、庭園という場所を考慮するならば、土坑2～5として報告したものは植栽痕である可能性が考えられる。

5 花葉の池の汀について

花葉の池の汀に設定したT1～T5では、近代以降の大きな改変がみられ、江戸時代の様相は不明であった。隣接したT13で検出した園路3を覆う厚さ40cm洪水砂の存在から、旭川の旧流路に位置する花葉の池では築庭後も洪水による被災が甚大であり、池汀付近が江戸時代にも改修を受けていることも要因と思われる。築庭間もない元禄初期頃の「御後園絵図」や、元禄2（1689）年頃の「御後園指図」（巻頭図版4-3・4-4）にみえる花葉の池南岸の亭舎の遺構を今回の調査で確認できなかったことは、洪水被害や、その改修によって遺構が損なわれたためであると考えられ



写真10 明治末年頃 花葉の池の石組護岸（南西から）[渡辺家資料]



写真11 昭和9年の水害から復旧後 花葉の池の石組護岸（南西から） [渡辺家資料]

る。現在ある地藏堂北側の汀付近に配された自然石も、築庭当初の位置を留めるものは少ないものと思われる。このような立地にあったことが、元禄3（1690）年頃の「後楽園図 御茶屋廻り之図」（巻頭図版4-5）に池汀の亭舎がみえず、今の茂松庵の建つ丘の上に建物が描かれた理由の一つであると考えられる。また、現状の石組護岸が施されたのも、洪水による被害の軽減をはかったのであろう。近代以降の造作と確認したT2の石組護岸は、「明治の絵図」にもみられない。しかし明治末年の写真（写真10）に類似したものがあり、明治17（1884）年の一般公開以降に整備されたものと考えられる。また現在の石組護岸は、古写真（写真11）から昭和9（1934）年の室戸台風に伴う水害以降の造作と考えられ、その被害が甚大であったことが窺える。

おわりに

今回の調査では、岡山後楽園二色が岡における築庭前の成り立ちと、築庭に伴う園路の造作や変遷の一端、ならびに洪水被害の状況を明らかにすることができた。しかし、面積や出土遺物の限られた調査のみでは困難な作業であり、これはひとえに『池田家文庫』に残された絵図や文献と比較することによって理解し得たことであるといえる。

本報告書をまとめるに当たっては、万城あき氏（公益財団法人岡山県郷土文化財団 主任研究員）には、数多の貴重な御助言をいただいた。また、鈴木茂之氏（岡山大学名誉教授）には、地質学の見地から洪水堆積や石材鑑定など、多岐にわたる御指導をいただいた。末筆ながら、記して感謝の意を表します。

（團）

註

- (1) 『岡山県埋蔵文化財報告』23 岡山県教育委員会 1993 所収の浄化槽地点の調査の土層断面。
- (2) 二色が岡の地藏堂付近の基盤層標高については、調査では確認できなかったものの、「享保の絵図」に描かれた、築庭前からある棕の木が現存しており、この箇所は旧地形を反映していると考えられる。
- (3) 柴田一「第一章第五節「園地」『岡山後楽園史』通史編 後楽園史編纂委員会 2001
- (4) 自然堆積層のうち、洪水によって運ばれた微砂を主体とするものを指す。
- (5) 「地下ケ図」の注記にある「丑の年洪水」で、延宝元（1673）年の洪水で二色が岡が浸水した記述がある。
- (6) 現況図と絵図との重ね方については、万城あき氏からの御教示による。
- (7) 「地下ケ図」には、二色が岡全体が灰色で塗られ、ここを地盤の高さの基準としていることから、谷部を除いた場所の起伏は少なかったことがわかる。
- (8) 御舟入跡の報告書には、現地地表下90cmで園路を検出しているとあるが、調査地点が盛土下であるため、現園路下では30cm程度である。
- (9) 脇田浩二「第4章 超丹波帯」『地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』産総研地質調査総合センター2022において、詳細に報告されている。
- (10) 園路4・8は現園路による削平により、第22・29図の平面図で示したトレンチ周辺の網点部に礫の散布が見られ、園路の方向と一致することから園路路盤の礫である可能性が高いため、サンプリングを行った。
- (11) 令和2年度に調査した東広場に設定した4本のトレンチのうち、T1・T3・T4の3か所から園路を検出しており、そこから礫サンプルを持ち帰ったものである。
- (12) 瀬戸内市邑久町虫明に所在する長島の海浜部では、現在も多くの泥岩の礫の散布が見られ、砂岩やシルト岩の葉理をあまり含まず暗灰色を呈するものと、そうでないものが混在している。
- (13) 天保7（1836）年「花交土手道損し、藤ノ棚土手・瓢池土手、但同所砂利道ノ小砂利ヲ不残揚ケ山土ヲ入ル、御成御門外舞上ケ砂も取払」とある。場所は二色が岡ではないが、洪水で壊れた道の復旧についての記述。
- (14) 万城あき氏からの御教示による。礫敷に見える表現ではあるが、定かではないという。
- (15) 亀田修一氏からの御教示による。植栽痕の分類を行っているものに、津藩藤堂家の庭園での発掘調査報告書（「染井X XIV」『豊島区遺跡調査会調査報告36』豊島区教育委員会 2012）がある。

参考文献

- 神原邦男編『御後園諸事留帳』上・中・下 吉備人出版 1999 2005
 後楽園史編纂委員会編『岡山後楽園史』通史編・資料編 2001

表4 岡山後楽園と二色が岡周辺の出来事

和暦	西暦	二色が岡周辺の出来事	
年未詳		[絵図]	『後楽園地下ケ絵図』：後楽園築庭前の土地の様子がわかる。
貞享4年	1687年		後楽園の造成を始める。
元禄初期頃		[絵図]	『御後園絵図』：花葉の池に貼紙による修正がある。花葉の池の南岸に亭舎が、周辺に一部園路が描かれる。
元禄2年頃	1689年頃	[絵図]	『御後園指図』：花葉の池の南岸に亭舎が描かれる。花葉の池の周囲や二色が岡の辺りに細かい園路がある。二色が岡は、丘と谷が色分けて表現される。
元禄3年頃	1690年頃	[絵図]	『後楽園図 御茶屋廻り之図』：花葉の池の南岸の亭舎はなく、花葉軒の位置に亭舎が描かれる。大立石がある。
元禄13年	1700年		後楽園の敷地の拡大が終わる。一応の完成。
元禄15年	1702年		地藏堂、二色が岡に遷座。
正徳2年頃	1712年頃	[絵図]	『御後園地割御絵図』：後楽園の敷地の外形がほぼ整い、園内ができあがった様子がみられる。約1/100で描いた絵図。二色が岡の園路の一部に、塗りつぶしによる修正がみられる。
享保元年頃	1716年頃	[絵図]	『御茶屋御絵図』：約1/100で描いた絵図。貼紙による修正が多く見られる。現存する地藏堂脇の棕木についての記載がある。園路は分岐が減り、経路が整理されたことがわかる。
享保17年	1732年		『御後園諸事留帳』（以下、『諸事留帳』）の記載が始まる。※記載内容は「」で明示。
延享3年	1746年	[砂利]	「拾五艘 下津井砂利 三拾代 虫明砂り、但、青細石」 後楽園に砂利を持ってくるよう依頼。
延享4年	1747年	[植栽]	「御後園延養亭、此間ノ風入兼候間、花葉之森木伐り込」 延養亭に風が入らないので、二色が岡の木を伐採する。
寛永元年	1748年	[植栽]	「西二天後植込仕候様ニ被仰付候ニ付」 四天王堂の後ろの植込みについて。
宝暦元年	1751年	[修繕]	「花葉之樋居かへに付」 花葉の樋の取替について。
宝暦2年	1752年	[植栽]	「花葉樋ノ辺ニ山ふき植候事」「花葉御池ノ端ニ山吹植させ候」「地藏堂後園木植候事」 二色が岡での植栽の様子。
		[砂利]	「下津井砂利 式艘計 虫明石之事」 後楽園に砂利を持ってくるよう依頼。
明和8年	1771年	[絵図]	「御後園絵図」：写実性に乏しい。園路の付替がみられる。地藏堂前の鳥居が赤く描かれている。
文化2年	1805年	[植栽]	「邑久郡西幸崎村金兵衛方曲輪松本出ス、花葉御茶屋前之松枯候ニ付代りニ植ル」 花葉御茶屋前の松が枯れ、邑久郡から持ってきた松を換わりに植える。
文化6年	1809年	[破損]	「花葉御池水門跡樋損し、御普請方ほり立」 花葉の池の樋、損傷。
文政2年	1819年	[浚渫]	「花葉御池堀り」 池の浚渫か。
弘化4年	1847年	[修繕]	「花葉外樋蓋取替」 花葉の池の樋の修繕を依頼。
嘉永4年	1851年	[植栽]	「御庭之植木根掘、左之通御城へ御取寄ニ付、……花葉御茶屋西手ニ有之 椎の木 丈壱間合」「御庭花葉三角ニ有之高野楨、……根掘、今昼御城江差上候」 二色が岡の椎の木と高野楨を城へ取り寄せる為に根掘する。
		[修繕]	「花葉御池縁芝手損所御座候間」「花葉御池縁御普請、地方今日方取掛ル」 花葉の池縁の芝生が破損したので、修理に取りかかる。
		[破損]	「花葉御池縁右為断」 出水により、花葉の池の縁が破損。
文久3年	1863年	[絵図]	『御後園絵図』：園路の表現が不明瞭。
明治4年	1871年		「御後園」から「後楽園」と名称が改称。庭園の公開。
明治5年	1872年		池田家一族が後楽園に移り住む。庭園の公開中止。『諸事留帳』の記載が終わる。
明治16年	1883年	[絵図]	『備前国岡山後楽園真景図』：園路に大振りの礫敷表現がみえる。
明治17年	1884年		後楽園が岡山県に譲渡される。
明治30年	1897年	[絵図]	『岡山後楽園之図』：園路や石組護岸の表現はみえない。
大正11年	1922年	[指定] [園路]	名勝に指定される。散歩道整備開始。
昭和9年	1934年	[災害]	室戸台風による洪水のため、園内の亭舎倒壊。
昭和20年	1945年	[災害]	岡山空襲
昭和27年	1952年	[指定]	特別名勝に指定される。
昭和62年	1987年	[指定]	史跡に指定される。

第2節 絵図と和歌にみる二色が岡の植栽と変容

(公財) 岡山県郷土文化財団主任研究員

万城 あき

はじめに

岡山後楽園の南西部をしめる林は「二色が岡 (にしきがおか)」と呼ばれ、築庭当時の様子を伝える「正徳の絵図」(巻頭図版5-1)と「享保の絵図」(巻頭図版5-2)をみると、数多くの山桜・彼岸桜にまじって楓や松が植えられ、春は花、秋は紅葉、冬には松の緑が残るという工夫がされていたようである。江戸時代の後楽園の名所十か所について詩歌・和歌・俳句を詠んだ「御後園十景」(江戸時代後期に成立)には「二色岡花」・「栄唱橋」の題で、二色が岡には霞のように咲く桜の光景が詠まれている。築庭当時の景観がしばらくはその様子を保っていたことを想像させるものでもある。

一方、「十勝」(成立年代不詳)の和歌では、二色が岡が花と紅葉が季節で彩りを変えて楽しめる林であることを詠っている。

「御後園十景」の和歌 [1800年前後に編纂された『吉備温故秘録』に掲載]

二色岡花 (作者不詳)

うすくこく霞へだてて山ざくら にしきの岡の名をや見すらむ

栄唱橋 (作者不詳)

花の香はむせぶばかりに立こめて かすみぞわたる谷のつぎはし

「十勝」 [大正11(1922)年の『岡山県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二冊が初出]

二色ヶ岡ノ花 伝・池田斉敏(和歌の作者を池田斉敏としているが原典は不明)

花もみぢ変るながめのあかざりき 誰もにしきの岡といふらん

そこで、江戸時代の絵図や後楽園を築庭した池田綱政が残した和歌やその詞書、近代の書籍などから二色が岡の植栽と変容について考察し、現在行われている二色が岡の再生について紹介したい。

1 絵図にみる築庭初期の二色が岡

まずは、岡山大学附属図書館所蔵の池田家文庫に残る築庭初期の絵図から後楽園造成の過程とその後の展開をみていきたい。

築庭直前期の絵図 後楽園築庭直前の姿を描いた「地下ヶ岡」(巻頭図版4-1)には、園の南西部の土地の高さを基準とした園地予定地の土地の高さが色分けされ、現在の沢の池北岸までの範囲に赤線が引かれ、最初の後楽園となった約17,900坪が示されている。基準としている土地は後の二色が岡にあたり、土地の高低差を色で示した範囲は後に後楽園の敷地となる形がぼんやりと描き出されている。予定地の中央には「溝」(川)が流れ、黄色で示された二色が岡より約60cm低い土地を庭園としたようである。築庭に当たって「溝」(川)の流れを途中で堰き止めて池にし、家屋が描かれた辺りに延養亭などを置き、二色が岡の周囲に深く入り込んでいた池か沼は花葉の池として利用した様子がある。黄色の部分は、元禄2(1689)年頃の「御後園絵図」(巻頭図版4-3)では田畑になっているから、築庭以前は耕地だった場所をそのまま庭に取り込んだようである。基準となった二色が岡の

元の土地利用は不明だが、絵図の貼紙には土地の者の話として、延宝元（1673）年の洪水で水が2尺（約60cm）ほどのり、家の下には5寸（約15cm）ほど水がついた、とあるので田畑ではなく、少し高台で人家があった可能性が高い。また、後楽園用水の原形とみられる「竹田用水」が園外北に描かれ、築庭以前から存在した用水を庭園の水として利用したものと考えられる。つまり、庭園も水の確保も元の地形を活かして造成したことがうかがえるのである。

元禄2年頃の絵図 元禄2（1689）年頃の「御後園絵図」（巻頭図版4-3）と「御後園指図」（巻頭図版4-4）では、園内の水路の基本的な動線が出来、延養亭など主要な建物、各所に配置された池、芝生地が描かれている。この頃は、花葉の滝への導水は延養亭を過ぎた辺りで分岐する水路が直接流れ込むようになっており、二色が岡には築庭以前から存在する大木（「享保の絵図」の寸法が記された榎や棕に相当すると思われる）と多少の木々が描かれるが、まだ園路もなく林ではなさそうである。また、花葉の池の東沿岸に小規模な建物がある。

元禄3年～4年頃の絵図 元禄3～4（1690～1691）年頃と推定される「後楽園図 御茶屋廻り之図」（巻頭図版4-5）には延養亭の西側に栄唱の間の前身となる「翠庭」がある。「翠庭」は「コ」の字状の建物で、現在の栄唱の間の約3倍ほどの規模があったが、享保17（1732）年からの能舞台の改築に合わせて縮小され、南側の部分が栄唱の間となった。

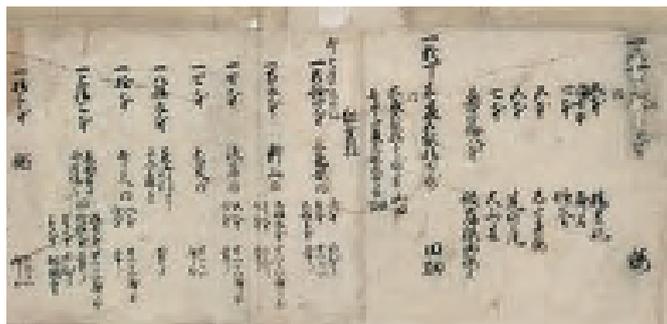
さて、元禄3～4年頃の絵図からは、花葉の滝の上部に園内の水路から暗渠で導水する仕組みへの変更がうかがわれ、この仕組みは現在も踏襲している。また、花葉の池の西端には、元禄4年に運び込まれた大立石⁽¹⁾が描かれ、元禄2年頃の絵図にあった花葉の池東沿岸の建物はなくなり、現在の茂松庵近くに小規模な建物があるが、園路や植栽は描かれていない。延養亭に続いて「翠庭」が出来たことで、主要な建物群から眺める南方面が庭園として整備され始めたことが示唆されている。この後、敷地が現在の形に整い、庭園の原型が一応完成している「正徳の絵図」と後楽園所蔵の「享保の絵図」までの絵図は確認されていない。

「御後園地割御絵図」（「正徳の絵図」）と「御茶屋御絵図」（「享保の絵図」）この2つの絵図はよく似た特徴を持っており、築庭した池田綱政が意図した後楽園の姿を伝えるものである。両絵図とも約1.8cm幅の升目が引かれた中に描かれており、「正徳の絵図」は10種類、「享保の絵図」は11種類（板敷きが増加）の色分けで田畑、石敷き、建物の畳や竹縁などが細かく描き分けられている。また、これまで「享保の絵図」を元に、御舟入跡の雁木、二色が岡の園路、現在の東外園の大藪の園路などが発掘されていることから、構造物の位置関係を精度良く示した絵図と言える。建物や景色の描き方は基本的には平面図で、延養亭などの建物は座敷の間取りが詳細に描かれ、景色は主に桜・楓・松で形成された林で、大立石などの景物が延養亭や栄唱の間から眺めた時に見える向きで描かれている。景色は平面的だが、視点場を意識した描き方となっているようである。

また、「享保の絵図」は事務的に使われたためか、改変があった場所に貼紙で修正を加えた跡が多く、景色も「正徳の絵図」とくらべると平板に描かれている。

2 「享保の絵図」にみる築庭当時の二色が岡の植栽景観

桜と紅葉の書上 「正徳の絵図」・「享保の絵図」とともに桜の本数と田畑の面積を記した貼紙がある。両図の桜の種類・本数は同じで、「楊貴妃5本、廊間17本、塩竈4本、しだれ桜5本、虎の尾5本、大山木7本、彼岸桜・山桜共1,148本」とある。合計1,191本の桜が園内に植えられていたようであるが、



第42図 「享保の絵図」の貼紙（部分）

二色が岡への配分は不明である。また、「享保の絵図」には、「卯ノ十月十九日改 紅葉数」として園内各所に配置された楓の種類と本数を改めた書上がある（第42図）。楓の種類には「のむら・せいがい・やしほ・常ノ・相国寺」があり、「のむら・せいがい・やしほ」は元禄期から宝永期にかけて作られ、流行した楓の園芸品種の名前である⁽²⁾。「のむら・せいがい・やしほ」は若葉が赤い楓で、綱政は元禄12（1699）年に、江戸屋敷の庭に花盛りの桜のそばに「やしほ」を植えさせて、吉野の桜と龍田の紅葉を楽しむ、という和歌を『竊吟集』⁽³⁾に残しているの、綱政が好みとする楓を後楽園に入れたことは想像に難くない。それに対し「常ノ」は通常の楓で緑の若葉が出て、秋に紅葉が美しくなるイロハモミジと考えられる。

さて、「紅葉数」を改めた卯年には、絵図が描かれた時期に近い年では元禄12（己卯、1699）年、正徳元（辛卯、1711）年、享保8（癸卯、1723）年がある。書上にある「二色岡」・「千入森」という名称は、『竊吟集』の正徳元（1711）年に出て、それ以前の「二色岡」は「桜岡」と呼ばれ、「千入森」は宝永2（1705）年の「月出の図」（後楽園所蔵）では「守警堂の森」となっている。絵図が描かれた年代と綱政の庭づくりの好みを考慮すると、この書上の卯年は正徳元年の可能性が高く、築庭当時の植栽を伝えるものと考えられる。次に、この2つの書上に注目して「享保の絵図」に描かれた植栽をみていく。

景色の描き方 林を形成する木々の大部分は、延養亭・栄唱の間・茂松庵など建物から眺めた姿で描かれており、一つの季節ではなく、全園の桜が咲いた春の風景が描かれる一方で、千入の森など紅葉が見どころとなる林では秋の紅葉の風景が描かれる。さらに、紅葉した状態でも千入の森では秋の紅葉を鮮やかな紅色で描いているが、「新山」（唯心山南の小さい築山）のように若葉が赤い楓があったとされる場所では、少しくすんだ紅色で描かれるなど、微妙な描き分けもある。築庭当時の後楽園では、葉の色の変化を巧みに利用した植栽景観が意図されていたようである。

この後の時代に描かれる絵図も、藩主の居間がある延養亭を中心にどういう景色が広がっているかが描かれており、藩主がよく利用する建物は平面図で、樹木や景物は視点場からの景色を意識したためか立体的に描かれるという特徴がある。

二色が岡の描き方 二色が岡に注目してみると、茂松庵の前面（南方向）は桜が大量に描かれた林で、その樹間に若木の松や部分的にはつくり松があり、紅葉した状態で描かれた楓は主に地蔵堂の周辺と花葉の池近くに描かれている。紅色の色合いに多少の違いがあるので、このうちの何本かは若葉が赤い楓だと思われる。茂松庵西の周辺部には立木の松が数多く見られる。茂松庵の南東前には白い大きな花を描いた木があり、花葉の池西岸の花葉口御門周辺には白に混じって紅色が目立つ大きな花を描

いた木が並木になっており、これらは八重桜だと思われる。ただし、書上にある八重桜のどれに相当するかということは不明である。また、築庭以前から存在した大木の榎や棕には寸法が記されており、何らかの意図で残したことが示唆されている。また、林の中には園路が示され、地面は緑色の濃淡で描かれて、その境界には薄い線が引かれている。薄い線は、高低差があることを示唆しているものと考えられる。

桜が花に添えて葉が描かれ、葉の色には紅色と緑色があることに注目すると、桜の書上にある「山桜・彼岸桜」のうち紅色の葉が山桜、緑色の葉が彼岸桜と色で区別できるのではないかと推測した。しかし、絵としての描き方からの見解として、江戸狩野派を研究されている静岡県立美術館学芸員（現、神戸大学大学院人文学研究科専任講師）野田麻美氏のご意見をうかがったところ、「江戸狩野派の描き方から見た時、山桜の描き方に江戸狩野派らしい特徴が認められるものの山桜と彼岸桜が描き分けられているとは思えない。紅色と緑色を使うのは樹叢を描く際の一つのパターンであり、絵として単調にならない描き方と考えられる」ということであった。

そこで、「正徳の絵図」と「享保の絵図」の二色が岡の植栽が、どの程度一致するのかを調べると、桜・楓・松が描かれた位置はほぼ一致するが、桜の葉の色には違いがあることがわかった。また、「正徳の絵図」に描かれた松を「享保の絵図」では貼紙で消していたり、「正徳の絵図」では名前が付けられた楓が「享保の絵図」では描かれていない、地藏堂の前に桜が2本増えているなど、両図には多少の食い違いがあった。つまり、築庭した綱政の好みを反映した景観が描かれた資料にはなるが、景観となる樹木の植えられた位置、本数、種類が特定できるものではないようである。

3 池田綱政の和歌からみた二色が岡

絵図と和歌から読み解く 次に、二色が岡の景観を読み解くために、「正徳の絵図」・「享保の絵図」だけでなく、綱政が残した『竊吟集』の和歌にあらわれる感懐や詞書から綱政が眺めたであろう景色を探ってみたい。この手法については、岡山大学名誉教授倉地克直氏から「正徳の絵図・享保の絵図は、一本一本が実写ではないだろうが、群的表現としてはそれなりに正確だと考える。綱政の和歌と組合わせての説明も納得できる」というご意見をいただいた。

元禄2（1689）年に綱政が庭を利用し始めた頃、延養亭を「^{そのまま}其俣」と名付けてあまり手をかけていない風景や園内の田畑の様子、園外の山の紅葉を詠っているが、「芝生の山いくへともなくつゞき」とあるのは、まだ園内には景観となる林があまり成長していない状態と思われる。

その後、元禄6（1693）年に「嘯月庵の落葉をみて」、同8年に「嘯月庵の前に、さくらの数々有しを見て」の詞書とともに秋の落ち葉の多さ、春には数々の桜が咲くさまを詠っている。嘯月庵は元禄11（1698）年に「桜岡嘯月庵」と出てくるので、二色が岡に出来た建物で、元禄8年頃には桜が建物の周囲の景観となっていたことがうかがえる。そして、元禄11年正月には、「いつかはと思ひしなからたねうへて、見うたてしさくらの十とせにたにたらても、はた千もとにあまりしを見て」（いつかは見たいものだと思つた桜が10年にもならないうちに千本の桜となった）、という詞書とともに吉野の桜を庭の中で見るができるようだ、という和歌を残している。「正徳の絵図」・「享保の絵図」に貼紙で示された園内に1,191本の桜がある、ということと一致するようである。

また、岡山理科大学名誉教授波田善夫氏（植物学）によると、「昭和40年代の松枯れの跡地に、ヤマザクラやカスミザクラが芽生え、ほどなくサクラ山に変貌した」というエピソードもあり、「庭園



第43図 「享保の絵図」 茂松庵前の谷間の桜（部分）

や農場で肥育したとすれば10年で鑑賞に堪える程度の苗木を育成できるのではないか」というご意見をいただいた。このことから、綱政が言う「種から植えて10年足らずで千本の桜を眺めることができた」という状態は可能だと思われる。

全園に植えた千本の桜が若木ながら花をつける様子を詠った元禄11年2月には「桜岡嘯月庵」で桜を眺めている様子や多くの人が訪れている様子うかがえる和歌が数首ある。また、同年の「谷のさくらを見て」

という詞書の和歌で、咲き続く花を見ていると谷もまだ奥があるようだ、と詠っているのは、茂松庵から前面の谷間に咲く桜がその様子ではないかと思われる光景である（第43図）。

では、紅葉はどのように眺めていたのであろうか。紅葉は元禄2（1689）年に庭の大部分が一応出来た頃には、庭にはまだ紅葉を楽しむ木が育ってなかったためか、借景となっている操山など園外の山々の紅葉を詠んでいる。その後、芝生が色を変える様や鳶の紅葉など数多くの和歌を残している。

二色が岡で詠んだ和歌では、宝永2（1705）年の「さくらおかの谷の楓（後略）」、「流花軒の森の木葉いつとなく散侍しをみて」などがあり、いずれも二色が岡の庵から谷間の楓や周囲の紅葉を眺めている。また、「さくらおかの庵より谷を眺て」は、滝の水に谷の紅葉が色を添えている、とあるから花葉の滝方向を眺めていたようである。「享保の絵図」には、茂松庵前面の谷間、花葉の滝方向の谷間、いずれにも桜や楓が描かれているので、それらが紅葉した様子ではないかと思われる。

そして、正徳元（1711）年11月頃には「花紅葉のながめのほかに、此庵はあたゝかにて、いさゝか冬をわかざりしかば、書付てかけ侍りし」として「春は花秋は紅葉をながめ来て 冬をばよそにくらす庵かな」（詞書と和歌の濁点は筆者）と詠んでおり、庵から春の花（桜）、秋の紅葉（楓と桜、松の鳶など）を眺めてきたが、冬はとても暖かい、という状況うかがえる。建物周辺には落葉樹が多いので、葉が落ちた後は庵に日差しが届いて冬でも暖かいということだろう。

また、綱政の和歌と「享保の絵図」で合致するものでは、宝永3（1706）年の「滝の辺りの梅をみて」と「流店の糸桜に」がある。梅は水辺に咲き、その香りを喜んでいるが、同様の和歌が『池田家履歴略記』にもあり、梅は流水と香りの組み合わせとなっている。「享保の絵図」では、梅は花葉の滝、花交の滝いずれも滝近くに描かれ、流店の南東前の水辺にはしだれ桜が描かれている。「享保の絵図」に描かれた景色と和歌に見える綱政の好みが一致していることが、こうした細かいところからうかがえる。

『竊吟集』からうかがえる綱政の好みと二色が岡 『竊吟集』の和歌のうち、和歌そのものは文学的表現が強いことを考慮しなければならないが、詞書のある和歌からは実景や呼称の変化がうかがえる。二色が岡は元は桜岡（さくらおか）と呼ばれたが、正徳元（1711）年頃からは花だけではなく桜、楓、鳶などの紅葉の美しさも名に込めて「二色岡」（にしきのおか）と呼ぶようになったものと思われる。

また、二色が岡の建物「嘯月庵」は、「浣花軒」⁽⁴⁾から二色が岡の趣をよりよく表す「花葉軒」へと変わり、「正徳の絵図」・「享保の絵図」ともに「花葉軒」と記され、幕末まで続く。

二色が岡の桜は、和歌からは彼岸桜と山桜を分けている様子はないが、詞書には彼岸前後から咲く桜があることから、その桜は彼岸桜の可能性もある。一方で、八重桜について詠った和歌はなく、群生する桜の一部という意識なのかもしれない。樹種としては山桜と若葉が赤い「やしほ」が和歌に詠われ、いずれも絵図の書上にあることから、江戸屋敷の庭同様、満開の山桜に添えて若葉が赤い楓を植えて楽しんでいたことがうかがえる。

和歌と視点場 綱政の和歌の視点場は主に「花葉軒」(現、茂松庵)で、その後に編纂された「御後園十景」の視点場は延養亭・栄唱の間の側にあることを考慮して「享保の絵図」をみた時、次の3つの視点がうかがえる。

- ①茂松庵から南方向の谷間の桜、東方向の滝と紅葉を眺める。
- ②松の樹間に見える谷間の紅葉。

前年度までの園路の発掘調査で確認された尾根筋の園路からは、松の木立の間に谷間の桜や楓を見て詠んだ和歌の景色が「享保の絵図」にうかがえる。

- ③二色が岡全体に咲く桜を延養亭や栄唱の間から花葉の池を通して眺める。

③の視点から改めて「享保の絵図」をみると、二色が岡の木々や大立石は延養亭・栄唱の間から眺めた時、どのように見えるかという姿で描かれていることがわかる。享保17(1732)年に記載が始まる『御後園諸事留帳』をみると、栄唱の間は饗応で使われることが多かったから、大名らしい風格のある前庭として整備されたものと思われる。

また、延養亭・栄唱の間に視点場がある「御後園十景」の和歌からは、二色が岡の桜は岡を覆う霞のように数多く咲くことが期待されていたと推測される。綱政の和歌で③の視点から詠んだものは確認されていないが、『池田家履歴略記』の綱政の和歌に、詠まれた年代や場所は不明だが、「白雲」のように咲く桜と梅は香りを好むというものがある。こうした好みからすると、綱政も桜が霞や白雲のように咲く二色が岡を延養亭側から眺めていたことは想像に難くない。



写真12 茂松庵前の谷間を眺める
(2023年11月)



写真13 茂松庵から花葉の滝を眺める
(2023年11月)



写真14 栄唱の間前から二色が岡を眺める
(2023年11月)

二色が岡の意匠 以上のことから、「享保の絵図」を改めてみると、次のような景色が綱政が意図した二色が岡のデザインとしてうかがえる。(時期、建物の呼称は現在のものを使用)

滝近くには初春に花開き春をつげる梅が流水の近くに植えられ、まだ寒い時期に春の香りを届けた。そして、3月の彼岸頃、全園の桜が咲き始め、二色が岡では南周辺部から茂松庵までにかけての中心部と花葉の池西岸に彼岸桜と山桜が咲き始める。山桜などが咲きおわる4月20日前後には、茂松庵近くと花葉の池西岸の花葉口御門付近の園路沿いに八重桜が華やかに花開き、約1か月にわたり桜が咲く景色を延養亭、栄唱の間、茂松庵から眺めて楽しんだ。また、桜の花盛りとあわせるように、若葉が赤い楓、緑の楓が芽を出して、春から夏へと緑の林になっていく。秋には桜、楓そして松にからんだ蔦までもさまざまに紅葉し、春とはまた異なった美しい彩りを見せる。春は花、秋は紅葉を楽しんだ林は、木々が葉を落とす冬には暖かい日差しがふりそそぐ。そして、寒い冬でも色を変えない松の緑が残り、春を待つ凜とした林となった。

4 二色が岡のその後

明和8年の「御後園絵図」 明和8(1771)年に描かれた「明和の絵図」(巻頭図版6-1)では、「正徳の絵図」・「享保の絵図」と同様、景色となる林には桜・楓・松が描かれているが、儉約のため人手のかかる耕作をやめて田畑を芝生に変えたり、建物の周囲の垣を取り外すなどの変更点に主眼が置かれているため、景色となる木々は模式的に描かれている。

二色が岡には園路や桜・楓・松は描かれるが、木々は東向き一方向で描かれており、植えている位置は特定しがたい。ただ、この絵図からは、二色が岡に桜がまだ存在することはわかるので、「御後園十景」に詠まれた桜が霞のように咲く光景が続いていたものと推測される。

文久3年の「御後園絵図」 「文久の絵図」(巻頭図版6-2)は、現在に伝わる後楽園の構成に最も近い姿である。二色が岡には桜は描かれず、楓と松が中心となっている。明治時代中期に刊行された『後楽園誌』(木畑道夫)や『後楽園真景及詳誌』(細謹舎)では「かつては花木の彩りがあったが、今は紅葉を『錦(にしき)』にたとえる」という説明になっており、同様の様子が同時期から発行さ

れる絵葉書にも残っている。ただ、「文久の絵図」には、景観は変わったものの地藏堂前には「にしきの岡」という標があり、二色が岡の眺めを名に込めた「花葉軒」の建物名は残されている。

二色が岡の変容が藩主の関心がうすれたことによるものか、儉約などで林の維持に手が回らなかったことによるものかはわからないが、林相が変化しても江戸時代を通じて「二色岡」や「花葉軒」といった築庭以来の名前は変えずに伝承された。

なお、明治16(1883)年の「明治の絵図」(巻頭図版6-3)の二色が岡には桜、沢の池には蓮が描かれている。これは、岡山県に譲渡する時に描かれた絵図で、建物や景色となる石や木が譲渡の対象となったため「御後園十景」を意識して、かなり美的に描き込まれているた



写真15 栄唱橋南詰め付近の二色が岡
(2008年4月)

めであって、明治になって桜が復活したわけではない。また、この絵図では「花葉軒」が茂松庵となっている。明治5年5月23日の『後楽園諸事留帳』に「花葉軒茂松庵」と併記されることがあり、この頃から呼称が「花葉軒」から茂松庵へと変化したのかもしれない。

明治17（1884）年に後楽園が岡山県に譲渡された後も二色が岡に桜を植えた形跡はなく、戦後は、松食い虫の被害で松枯れが起きた。その後、大木の杉から実生で育ったり、生育の早い杉を補植したことで深山のような景観になり今日に至った（写真15）。現在はかつての二色が岡の景観を再生する取り組みが進行中である。

おわりに 二色が岡再生と検討すべき課題

岡山県では平成31年3月に「二色が岡景観復元整備」の基本方針を策定し、まずは発掘調査によって旧園路などを確認後、樹木の伐採と山桜などの桜や松、楓の植栽を開始した。ただ、現在の二色が岡は景観としてだけでなく、高木による遮蔽機能や野鳥の生息域の保全も必要なため、エリアを分けて、伐採と植樹によって景観を再現するところと樹木を残すところがある。

後楽園の保存計画と整備は、「文久の絵図」に基づいて行うことが原則となっているが、この絵図の二色が岡は松と楓が中心になっているため、二色が岡の再生は「正徳の絵図」と「享保の絵図」を検討して進められることになっている⁽⁵⁾。

本稿でみてきたように、「正徳の絵図」と「享保の絵図」及び綱政の和歌を検討すると、絵図を实景として扱うことはできないが、綱政が好みとした景観を描いていると考えられることから、木々の位置や樹種の特定は困難でも、綱政の好みがわかる絵図を参考に二色が岡の再現・再生を図ることは可能であろう。

植栽に当たっては、今回発掘で明らかになった築庭当時に存在した園路からの視点、「享保の絵図」や和歌にある谷間の桜や紅葉を茂松庵から眺める視点、二色が岡全体を延養亭や楽唱の間から眺める視点など視点場からの景観を重視する必要があるだろう。

二色が岡をかつての美しい景観に再生することで、後楽園をより魅力ある庭園とすることが期待されている。

本稿は令和4年5月の岡山後楽園保存管理委員会に提出したレポートを改稿したもので、野田麻美氏、倉地克直氏、波田善夫氏には専門のお立場からご助言いただいた。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

註

- (1) 笹谷牛右衛門の「奉公書」（池田家文庫）によると元禄4（1691）年5月6日から同月晦日まで「御茶屋大立石取立御用」を勤めている。
- (2) 大井次三郎・有瀧龍雄・中村恒雄 『モミジとカエデ』 誠文堂新光社 1968
- (3) 『竊吟集』は、林原美術館所蔵の池田綱政の日記的な和歌集。同館紀要二号（2007）に翻刻されたものがある。
- (4) 「浣花軒」は、杜甫が春を楽しんだことを偲ぶ「浣花草堂」に由来するものかと思われる。（後楽園史編纂委員会編『岡山後楽園史』通史編 2001 P.990）
- (5) 平成20年3月策定の『特別名勝岡山後楽園保存管理計画書』の中で、「目標年代は幕末の姿（文久3（1863）年の絵図）を基本とするが、地区や要素によっては作庭時（正徳2（1712）年、享保元年の絵図）や現在の観賞形態や利用にも配慮して柔軟に対応する」（P.112）とあり、二色が岡の整備の方向性としては「『御後園十景』等にも謳われ、早くから景観が整えられた地区として、「にしきの岡」にふさわしい植栽景観の再生を目指す」、考え方では「季節感のある植栽を愛でながら快適な散策空間となるようかつての景観の再現を図る」（P.134）としている。

1 遺構一覧表

園路

遺構名	旧遺構名	検出 トレンチ	規模 (cm)		方向	路面上面 海拔高 (m)	時期	礫		備考
			巾	厚さ				大きさ	量	
園路1	旧園路	T 6	100以上	22以上	北西-南東	4.96 ~ 5.00	江戸時代	直径2 ~ 3 cm程度	中	
園路2	旧園路	T12-1・ T12-2	270	5以上	西-東	3.36 ~ 3.38	江戸時代	直径1 ~ 3 cm程度	中	
園路3	旧園路	T 13	292	32以上	北西-南東	2.68 ~ 2.82	江戸時代	直径2 ~ 3 cm程度	中	
園路4	旧園路	T 14	上端：60以上 下端：85以上	3 ~ 5	西-東	3.58 ~ 3.64	江戸時代	直径1 ~ 3 cm程度	中	
園路5	旧園路	T 15	255	8	北西-南東	4.26 ~ 4.51	江戸時代	小礫	中	
園路6	旧園路	T16-1・ T16-2	上端：約220 下端：約360	22以上	北-南	4.46 ~ 4.58	江戸時代	直径1 ~ 2 cm程度	多	
園路7	旧園路	T 17	90以上	上層6 下層6	西-東	新：5.38 ~ 5.46 旧：5.30 ~ 5.40	江戸時代	直径1 ~ 2 cm程度	多	改修の痕跡
園路8	旧園路	T 20	上端：68以上 下端：105以上	12	南西-北東	5.42 ~ 5.48	江戸時代	直径1 ~ 2 cm程度	中	

土坑

遺構名	旧遺構名	検出 トレンチ	規模 (cm)			平面形	断面形	底面海拔高 (m)	時期	備考
			長辺	短辺	深さ					
土坑1	ヤラレ	T 6	160	85以上	30以上	隅丸方形	碗状	5.38以下	昭和20年以降	戦災の片付け
土坑2	土坑	T 8	90以上	—	65	円形	筒状	5.02	近代以降	植栽痕か
土坑3	ヤラレ	T 14	125以上	115以上	55以上	不整形	碗状	3.00	昭和20年以降	植栽痕か
土坑4	土坑	T 14	135	35以上	34以上	不整形	碗状	3.00以下	江戸時代	植栽痕か
土坑5	土坑	T 18	38	16以上	38	円形	筒状	5.10	江戸時代か	植栽痕か

その他

遺構名	旧遺構名	検出 トレンチ	規模 (cm)		平面形	検出面海拔高 (m)	時期	備考
			長辺	短辺				
平坦面1	平坦面	T 6	530以上	—	—	5.50 ~ 5.74	江戸時代	「正徳の絵図」・「享保の絵図」にみえる花葉軒北側広場か
平坦面2	平坦面	T 14	270以上	—	—	3.38 ~ 3.68	近代以降	三和土による造作園路4上面にも敷設
被熱面	被熱面	T 14	95	45	不整楕円形	3.52	昭和以降	平坦面2上面、戦災によるものか
硬化面	硬化面	T 21-2	195以上	105以上	不整形	5.28 ~ 5.30	江戸時代?	

2 遺物一覧表

土器・陶磁器

番号	出土 トレンチ	出土層位	種別	器種	計測値 (cm)			色調	焼成	備考
					口径	底径	器高			
1	T 3	現代造成土	土師器	鍋	—	—	(3.9)	外：灰褐 (7.5YR4/2) 内：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	中世前半期
2	T 3	現代造成土	磁器	椀	—	—	(3.4)	釉薬：こい紫みの青 (4.5PB3/7) 素地：黄みの白 (2.5Y9.2/0.5)	堅緻	染付 幕末～明治
3	T 6	第17層 (中世包含層)	陶器	壺	—	—	(2.4)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	備前
4	T 6	第17層 (中世包含層)	陶器	壺	—	—	(4.6)	外：灰褐 (7.5YR5/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	備前
5	T 6	第17層 (中世包含層)	陶器	甕	—	—	(8.0)	灰 (10Y4/1)	良好	備前 15世紀末～16世紀初頭
6	T 9-2	表土	磁器	椀	—	—	(1.7)	釉薬：透明 文様：こい紫みの青 (4.5PB3/7) 素地：黄みの白 (2.5Y9.2/0.5)	堅緻	染付 18世紀後半以降
7	T12-1	第6層 (築庭時造成土)	陶器	椀	(12.2)	—	(4.3)	釉薬：にぶい黄 (2.5Y6/3) 素地：にぶい黄橙 (10YR7/3)	堅緻	肥前 17世紀後半～18世紀初頭
8	T12-1	側溝掘下げ中	土師器	皿	—	6.2	(0.8)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	底部糸切り
9	T12-1	第6層 (築庭時造成土)	土師器	皿	—	(7.1)	(0.8)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	底部糸切り
10	T14	第5層 (土坑4)	土師器	皿	—	—	(1.3)	外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	
11	T20	園路8 検出中	磁器	椀	—	4.3	(2.0)	釉薬：こい紫みの青 (4.5PB3/7) 素地：黄みの白 (2.5Y9.2/0.5)	堅緻	染付 肥前 18世紀代か

ガラス製品

番号	出土 トレンチ	出土遺構	種別	器種	計測値 (cm)			色調	備考
					口径	底径	器高		
G 1	T14	土坑3	ガラス	瓶	1.0	3.8	12.0	透明	広島県規格塚

瓦

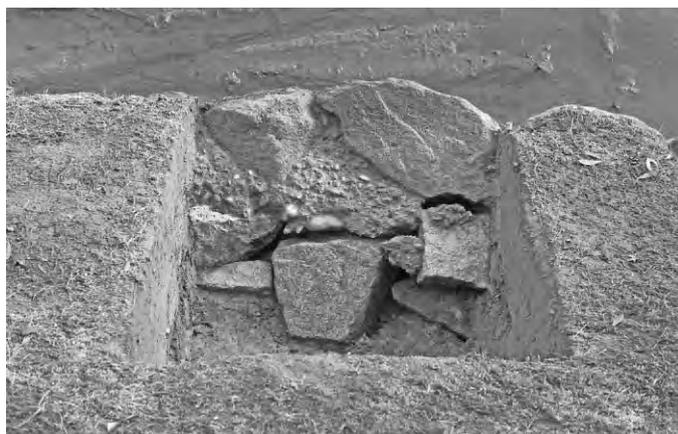
番号	出土 トレンチ	出土層位	種別	計測値 (cm)			色調		焼成	備考
				最大長	最大幅	最大厚	外面	断面		
R 1	T 2	表土下の層	軒平瓦	(5.5)	(9.5)	1.7	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(N7/)	良好	外面：一部銀化 明治時代
R 2	T 2	表土下の層	丸瓦	(11.9)	(10.5)	1.4	暗い灰色(N4)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	凹面：粗い布目と板状圧痕 明治時代
R 3	T 3	現代造成土	丸瓦	(11.5)	(8.0)	1.7	灰(N5/)	灰白(2.5Y7/1)	良好	凹面：粗い布目と板状圧痕 岡山城6式
R 4	T 3	現代造成土	平瓦	(12.6)	(9.5)	1.8	暗灰(N3/)	灰白(10YR7/1)	良好	外面：キラコ 明治時代
R 5	T 7	第3層 (洪水堆積層)	平瓦	(5.0)	(8.7)	1.3	灰白(7.5Y7/1)	灰白(7.5Y7/1)	やや不良	外面：全体に摩滅 19世紀代
R 6	T12-1	第6層 (築庭時造成土)	平瓦	(14.0)	(13.6)	2.4	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	やや不良	コビキA、凹面：ヨコナデ 岡山城2式
R 7	T15	第6層 (園路5 基盤層)	平瓦	(6.8)	(6.0)	1.8	灰黄(2.5Y7/2)	灰色(N6/)	やや不良	コビキB、凹面：板状圧痕 岡山城4式

3 トレンチ一覧及び新旧対照表

掲載 トレンチ名	調査年度	調査時 トレンチ名	所収埋文報告・年報名(刊行年)	埋文報告・年報 掲載時トレンチ名	規模(m)		備考
					長辺	短辺	
T 1	平成30年度	T 2	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 2	1.0	1.0	
T 2	平成30年度	T 3	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 3	2.0	1.0	明治期、旧石組護岸
T 3	平成30年度	T 4-1	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 4-1	4.0	1.0	
T 4	平成30年度	T 4-2	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 4-2	1.5	1.0	建築部材
T 5	平成30年度	T 5	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 5	1.6	1.2	
T 6	令和2年度	T 1	岡山県埋蔵文化財報告 51(令和3年)	T 15	8.0	1.0	園路1 土坑1 平坦面1
T 7	令和2年度	T 2	岡山県埋蔵文化財報告 51(令和3年)	T 16	2.5	1.0	
T 8	令和3年度	T 20	岡山県古代吉備文化財センター 年報1(令和4年)	T 20	2.5	1.0	土坑2
T 9-1	令和元年度	T 4-1	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 13-1	2.0	2.0	
T 9-2	令和元年度	T 4-2	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 13-2	2.0	1.7	
T 10	令和3年度	T 21	岡山県古代吉備文化財センター 年報1(令和4年)	T 21	1.5	0.4	
T 11	令和元年度	T 1	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 10	2.0	2.0	
T 12-1	令和元年度	T 2-1	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 11-1	3.0	2.0	園路2
T 12-2	令和元年度	T 2-2	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 11-2	2.0	2.0	園路2
T 13	令和2年度	T 3	岡山県埋蔵文化財報告 51(令和3年)	T 17	5.0	1.0	園路3
T 14	令和3年度	T 23	岡山県古代吉備文化財センター 年報1(令和4年)	T 23	2.3 0.6	1.2 0.6	園路4 土坑3・4 平坦面2 被熱面
T 15	令和元年度	T 3	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 12	10.0	1.5	園路5
T 16-1	令和2年度	T 4-1	岡山県埋蔵文化財報告 51(令和3年)	T 18-1	1.5	1.0	園路6
T 16-2	令和2年度	T 4-2	岡山県埋蔵文化財報告 51(令和3年)	T 18-2	1.5	1.0	園路6
T 17	令和2年度	T 5	岡山県埋蔵文化財報告 51(令和3年)	T 19	2.0	1.0	園路7
T 18	令和元年度	T 5-1	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 14-1	2.0	1.5	土坑5
T 19	令和元年度	T 5-2	岡山県埋蔵文化財報告 50(令和2年)	T 14-2	2.0	2.0	
T 20	令和3年度	T 22	岡山県古代吉備文化財センター 年報1(令和4年)	T 22	1.4	1.0	園路8
T 21-1	平成30年度	T 6	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 6	2.0	1.7	
T 21-2	平成30年度	T 7	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 7	2.0	2.0	硬化面
A	平成30年度	T 8	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 8	0.3	0.2	花葉の池、底打ち調査
B	平成30年度	T 1	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 1	0.3	0.2	花葉の池、底打ち調査
C	平成30年度	T 9	岡山県埋蔵文化財報告 49(令和元年)	T 9	0.3	0.2	花葉の池、底打ち調査



1 T1と現護岸・大立石（南東から）



2 T1（南西から）



3 T1（北西から）



4 T2と現護岸（南東から）



5 T2 旧護岸検出状況（東から）



6 T2 旧護岸と現護岸（南西から）

図版2



1 T3と現護岸（北西から）



2 T3 西壁土層断面（南東から）



3 T3 東壁土層断面（北から）



4 T4（南東から）



5 T4と現護岸（北西から）



6 T4 建築部材部分（西から）



1 T5 (南東から)



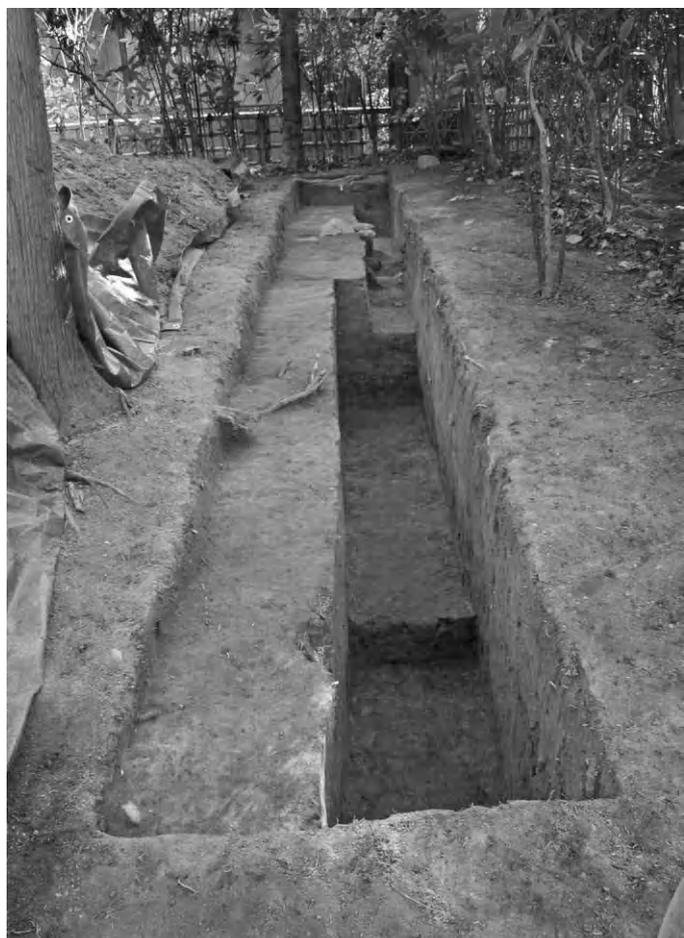
3 T5と現護岸 (北西から)



2 T5 南壁土層断面 (北東から)



5 T6 東壁土層断面 盛土部分 (東から)



4 T6 奥が茂松庵 (北から)



6 T6 園路1 (北東から)

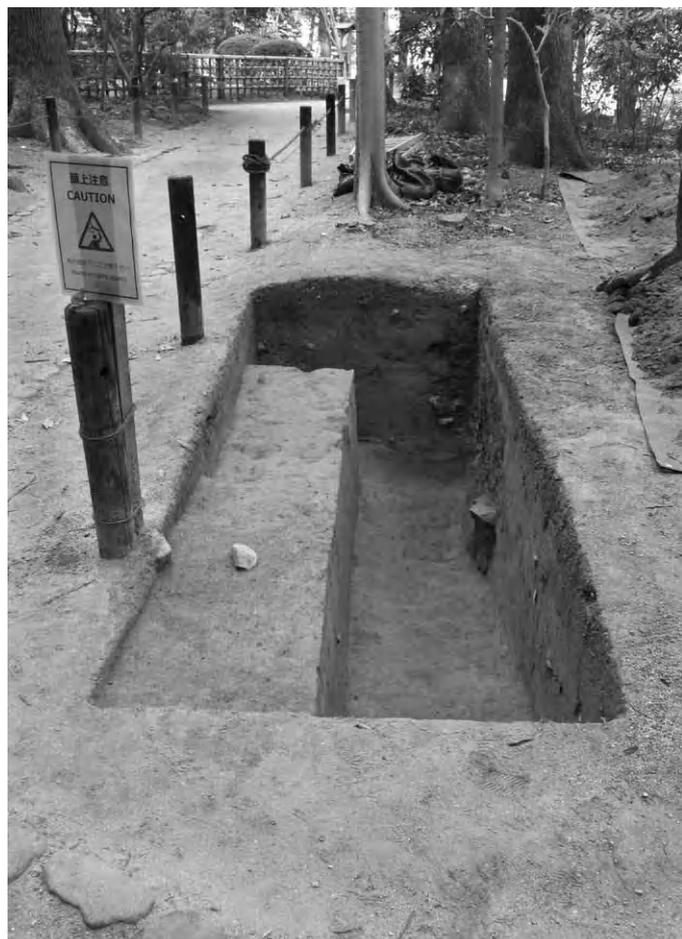
図版 4



1 T7 (北から)



2 T7 南東壁土層断面 (北西から)



3 T8 (南西から)



4 T8 南東壁土層断面 (北から)



5 T8 土坑2 (北西から)



6 T9-1 (北東から)



7 T9-2 (南西から)



1 T10 (北から)



2 T10 盛土内偽礫検出状況 (南西から)



3 T11 (北西から)



4 T11 北壁土層断面 (西から)



5 T12-1 (南から)



6 T12-1 東壁土層断面 (南西から)

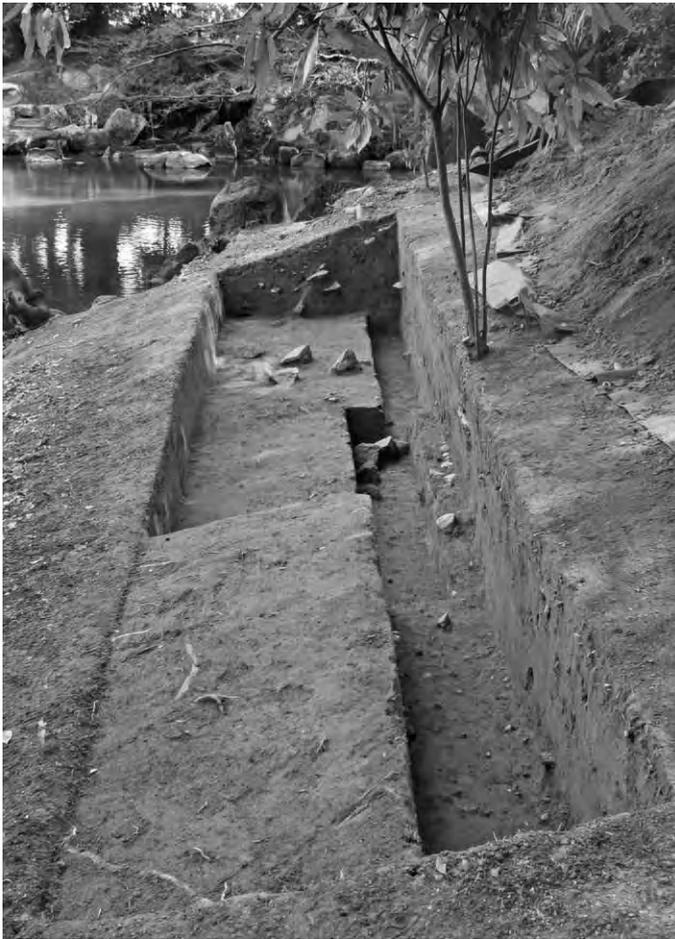


7 T12-2 (北西から)

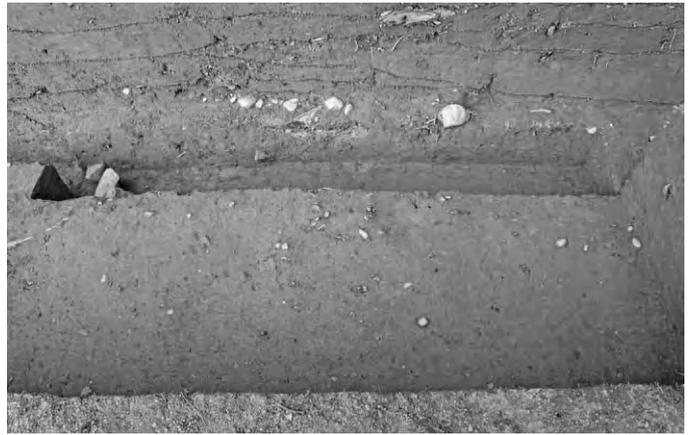


8 T12-2 東壁土層断面 (西から)

図版6



1 T13 (西から)



2 T13 南壁土層断面 園路部分 (北から)



3 T13 南壁土層断面 洪水砂堆積状況 (北西から)



4 T14 (南西から)



5 T14 園路4 (北西から)



6 T14 北西壁土層断面 (南から)

1 T15 奥に地藏堂
(西から)



2 T15 南壁土層断面
(北から)



3 T16 (西から)



図版8



1 T16-1 (南西から)



2 T16-1 園路6西半部分 (北西から)



3 T16-2 (西から)



4 T16-2 園路6東半部分 (南東から)



5 T17 (北から)



6 T17 園路7 (北東から)



7 T17 西壁土層断面 園路7部分 (東から)



1 T17と現園路 (南東から)



2 T18・T19作業風景 (南西から)



3 T18 (南から)



4 T19 (北西から)



5 T20 (南東から)



6 T20と現園路 (北東から)



7 T20 南西壁土層断面 (東から)



8 T20 専門委員による現地指導風景 (南東から)

図版10



1 T21-1・T21-2作業風景（南から）



2 T21-1 第5層検出状況（南から）



3 T21-1（南から）



4 T21-2（南から）



4



5



7



G1



R3



R6



5 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とくべつめいしょう おかやまこうらくえん しせき おかやまじょうあと							
書名	特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡							
副書名	特別名勝岡山後楽園二色が岡景観復元事業に伴う埋蔵文化財確認調査							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	268							
編著者名	團奈歩 柴田英樹 松尾佳子 万城あき パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻 1325-3 TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下 2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2024年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市区町村	遺跡番号					
とくべつめいしょう 特別名勝 おかやまこうらくえん 岡山後楽園 しせき 史跡 おかやまじょうあと 岡山城跡	おかやまけん 岡山県 おかやまし 岡山市 きたく 北区 こうらくえん 後楽園 1-5	33101	332012294	33° 66' 72"	133° 93' 41"	20190115 ~ 20190124 20200114 ~ 20200122 20210215 ~ 20210225 20220201 ~ 20220210	89.1	保存目的 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡	庭園	江戸時代 近・現代	園路 土坑 平坦面 土坑 石組護岸	土師器 陶磁器 瓦 陶磁器 瓦 ガラス瓶		築庭当初と考えられる園路を検出。		
要約	岡山後楽園は江戸時代に築庭された大名庭園で、一応の完成は文禄13 (1700) 年とされている。今回の調査箇所は二色が岡は、花葉の池に接する小高い丘で、茶室である花葉軒や地藏堂などの宗教施設などが点在し、藩主が度々訪れた場所である。花葉の池の汀は、度重なる旭川の洪水被害を受けて大きく改変されているものの、二色が岡を巡る江戸時代の園路が良好な状態で保存されていることを確認し、絵図との比較から変遷が明らかになった。園路路盤の構造は簡素であるが、瀬戸内市邑久町虫明産出の礫が用いられたなど、園路の造作の一端が判明した。また、二色が岡の南西半は築庭より前に造成された可能性が高く、土地利用の移り変わりが窺える。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 268

特別名勝 岡山後楽園
史 跡 岡 山 城 跡

特別名勝岡山後楽園二色が岡景観復元
事業に伴う埋蔵文化財確認調査

令和6年3月15日 印刷

令和6年3月15日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻 1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下 2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南 1-1-5